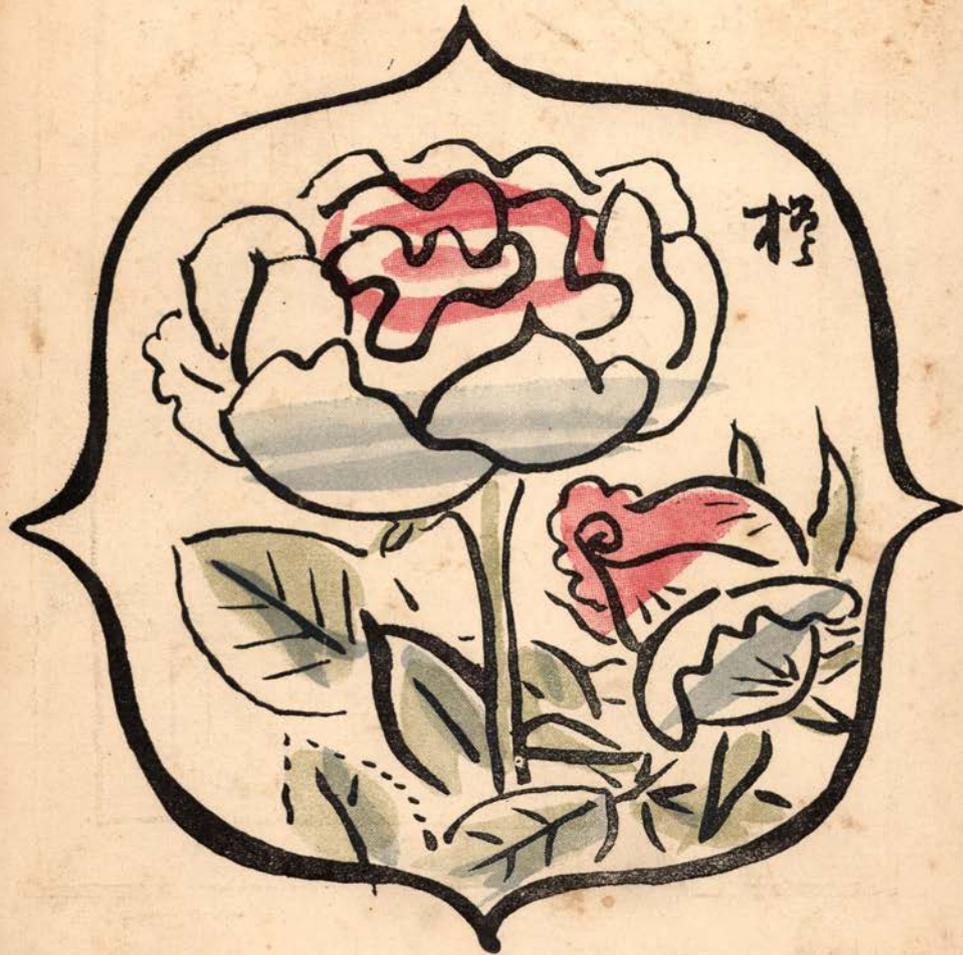


郎路生麻·幹主

川柳新誌

號輯特春新



新
春
特
輯
號

アサヒビール

アサヒ黒ビール

特醸
白類話

シムズンビール

清涼飲料
リボソントロン

午の歳……馬力をかけて

一層御愛飲の程希上候

大日本麥酒株式會社



馬の歳

初詣

官幣大社 住吉神社

○四日福の餅神事 ○五月初卯 ○六月初辰

官幣大社 大鳥神社

○濱寺公園驛ヨリ直營バス

別格官幣社 阿倍野神社

○阪堺線宮の上下車

南海線は總て吉方

厄除方違神社

○堺東驛ヨリ約三丁

厄除もす八幡

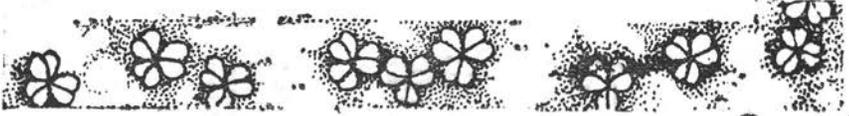
○もす八幡驛ヨリ約五丁

厄除あびこ観音

○元旦ヨリ一週間開運厄除祈禱

○高野線あびこ前、軌道線あびこ道下車

南海電車



川柳雜誌新春特輯號（第七卷第一號）目次

【感想・評論】

十七字への惧れ 前田雀郎 (二〇)

歳 晩夜景 川村花菱 (三)

南 座 食満南 (五一)

大 聾啞獨語 岩本素人 (四〇)

小 技巧の問題 出口雨町 (四二)

問 郷土川柳といふこと 伊藤緑之助 (四三)

問 労働者の希望 越田久 (四四)

問 社会宣傳の謂 安井ひろし (四五)

柳 評釋 二十四篇まで (主) 麻生子路郎 (一六)

鳥 烏 蛭子省二 (一五)

川 柳略語解 西原柳雨 (一三)

月 卓を圍んで 山路柳琴太 (一四)

蠶 童 國枝史郎 (一〇)

松 の 樹 鍋平朝臣 (一〇)

美しい惱み 小出楢重 (一〇)

孤 兒 窪田銀波樓 (一〇)

宵やまち 篠原春雨 (一〇)

芥子坊主 大島濤明 (一〇)

竹のごさかれ 蛭子省二 (一〇)

アザの先生 安川久流美 (一〇)

當 屋 福田山雨樓 (一〇)

歳 七 六

紙石版の追憶 前田五健 (一四)

刀さみ雨 富士野鞍馬 (一四)

學齡未滿 佐々木三福 (一五)

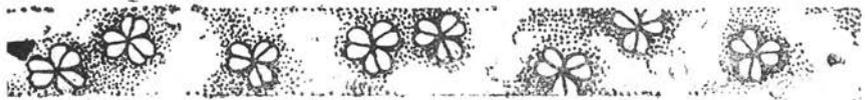
鳥の子 麻生路郎 (一五)

パレンの親仁 岩本素人 (一五)

電話でよんだおまつあん高橋かほる (一五)

かやり竹 長谷川一徹 (一五)

弱虫泣虫の頃を憶ふ 藤里好古 (一六)



兵隊さんの水入……………安井ひろし(七六)
 跛の仔猫……………阿部閑生(七七)
 叱られなかつたこゝろ……………橋本二柳子(七七)
 火事ミ喧嘩ミ祭……………松盛琴人(六八)
 自 然 児……………松 藤 之 助 (六八)
 河豚ミ傷痕……………伊藤緑之助(六六)
 浪花……………小川三猿堂(六六)
 吹雪の電柱……………酒井駒人(六九)
 暮れるのが悲しい……………若井たけし(六九)
 暗い光……………清水光風(六九)
 腕白時代……………西村水光(六九)
 カクレンボ……………木山青砂郎(七〇)

【創 作】

泣 虫……………三輪五輪(七〇)
 四條磧の夕涼み……………石川双葉(七〇)
 悲しい事さも……………川合鳥鐵(七〇)
 おもちゃ箱……………中谷美々(七一)
 矢の立……………浅井冷光(七一)
 鼠の齒……………桑原京子(七二)
 汐く蝸……………浅井冷光(七二)
 自由の牛……………桑原京子(七二)
 災由難……………桑原京子(七二)
 御殿の醫……………桑原京子(七二)
 右向の思ひ出……………桑原京子(七二)
 七歳の思ひ出……………桑原京子(七二)

近 川 柳 塔 作

ひろし・花童子・かほる・愚陀・琴人・双葉子・新水・駒人・鮎美・冷々子・町二・雨町・三猿堂・亂耽・舟々
 鐵洲・綠之助・二柳子・石竹・閑生・市公・光路・汀柳・圓角・里十九・公二・たけし・琴峯・杏三・濁水
 敏郎・普門・雪峰・青砂郎・五輪・久水・梅里・柳影

光 粒 耀 々 抄 集

葎乃・信子・武子・欣女・壽枝女・よし江・柳芳女・光菊・柳女・愛女・加根女・稚女・白梅女・みさ子・靜香
 森 東 魚 選……………(六四)
 麻生 葎乃 選……………(七五)
 中澤 濁水 共選……………(七五)
 中見 光路 共選……………(七五)

一 路 集 指 海 老

川柳塔の足跡……………朝田新水(七五)
 表……………朝田新水(七五)
 紙……………朝田新水(七五)
 編輯後記……………朝田新水(七五)

各 支 近 部 聯 作 地 柳 壇

諸……………朝田新水(七五)
 家……………朝田新水(七五)
 記……………朝田新水(七五)

麻 生 路 郎……………(四)



近作

麻生路郎

木像が動くミ見ぬし大晦日
エゴイスト僕はめぐまれてるさいふ
あの眼の中で男討死
お金を預つてやらうミせめられる
初日の出愛を二倍の嵩にする
出は出たが一人はさびし松の内
夫婦出勝ち山羊は近所の子ミ遊び
エキゾティックなパイプも春を豊にし

近作柳樽

路郎

選

貧乏のなまじよい日もありはあり
 諦らめて暮す浮世のまるさかな
 病床から妻の吐息へ話しかけ
 もう蠅は追はで蒲團をかむるなり
 手を出せば虫の方向をかへてさび
 苦勞せうための長壽でないものを
 鬼灯を母の口からひつたくり
 氣休めの醫者の言葉をすぐ信じ
 手に持つて御覽潰しの値にしても
 保護の子をあやして巡査涙ぐみ
 酔つてゐて出す手へ死相占はれ
 やぶれから覗けば足袋を刺してゐる
 鼻先であしらふ襟が合つてゐる
 さで改まつて事なき机なり
 要するに程度もんささ酌いでやり

別府 同 同 同 金澤 同 同 同 神戸 同 同 東京 同 同

兎 同 同 同 今 同 同 同 志 同 同 山 同 同

卓 雨 郎 門

妾豪然。秋風を横切つて
 前科六犯子供。遊ぶこゝが好き
 床をづらして。病人。三月を見る
 年寄に金を持たせて。雨仕度
 空想は嬉し道頓堀の人出
 すぐに子を叱る。女房になつてゐる
 親しさが階級の差にはまれ
 馴れて来た。好意。豫算へ入れてあり
 ダンサーの家をくれば。目刺の香
 目刺より鯛のうまいは知つてゐる
 ニヤ／＼。老人が聞く。馬鹿話
 青年團皆ラッパ手になるのらし
 戀人の匂ひ。妹にはあら
 これだけは賣れる。きめた並べよう
 お醬油の泡か。んざしの足で消し
 元女中。だつたも。來てる。來てる。お葬式
 恩給が俺の短氣を笑つてゐる
 妹を處女。さ。信じて。睦まじさ
 死に直面して。三ッ
 眼を閉ぢた。ッ。けで。佛になつて居り
 不仕合せ。續いて。命だけ。があり

金澤 好次
 同 大阪 同 蒼樓
 同 釜ヶ池 同 湖舟
 同 大阪 同 八歩
 同 堺 同 清路
 同 大 同 千春
 同 平塚 同 城月
 同 大阪 同 青果
 同 高知 同 蝸牛
 同 大阪 同 雪舟

信用が出来ぬ。彼女取合はず。仰山に驚く。戀の山道や。盟みて水に變りはなし。鯉泳ぐ。さて戀の絶頂にある。いふさみしさ。糸底の汚れ。眼につく。晝の酒。喘ぎつゝ踏臺になる。役廻り。病床にて。君笑ひ給へ。こ友はあぐらかき。君戀しわれ何日の日に唄はんか。郷に歸へれ。こ映畫囁やく。減俸が取り止め。こ言ふ高笑ひ。藝者の子だ。藝者の子だ。こ言はれ。くゝられて行く人もあり。廓の灯。スポーツの話。我身に過激なる。輕蔑の眼上れ。こ云はぬなり。緊縮をする。ささきいた口をきく。おしろいは。小さくなつて。咲きつゝけ。野施行の川筋へ出た。聲になり。きてら着た。日の父さんは怖くなし。拘留へ。巡查が。竹刀叩く。音。

大 阪 同 島 根 同 大 阪 同 豊 橋 同 大 阪 同 大 阪 同 大 阪 同 大 阪 同 京 都

山 茶 花 同 花 情 同 凸 瓢 同 集 一 同 蘆 穂 同 三 絃 同 さ だ を 同 魚 頭 同 與 詩 夫 一 同 羊

口笛の何處で覺わたり越後獅子
 大金を託されて身をあやぶくし
 就職早々親父は金送れ
 後添のなかく理解してくれず
 禮服で一幕のぞく初芝居
 來る文のすべてに死んだ返事なり
 一人出を親へ氣兼ねの年になり
 いなごさりあざけるやうに飛んで逃げ
 良心は隣の門も掃けさ云ふ
 御祭もすんだらしいが氷割る
 弟を愛し義理ある母を捨て
 喰へぬと言つた友を廓の夜に見たり
 お隣で電話を借りるお辭儀をし
 愚かさを泌みくみ知る我れなりし
 詰將棋又二十錢取られて來
 影法師逃げたいやうで離れない
 世の中へ出れば泣く事先づ覺わ
 ボーナスへ何う響くのか判を押し
 嘘をつくばかりの娑婆に生れて來
 双方の親が詫び合ふ子の喧嘩
 メートルできかかれた母の一苦勞

松山 松山 幸泉 川字 青水 樂鳥 大島根 大島根 四五磨 大島根 大島根 素子 兵庫 白水生 大坂 卯三 凡平 嘉月 大坂 立子 松山 炭車 大坂 空山 大坂 裸城 丸龜 大坂 衣童 大坂 柳兒 大坂 柳兒

よ突晴藥秋焚さ寢運大かチ散妹賣安戰食我顔金折一
 く然さ日きも心動仰こユ髮をつ全争客一立モ靴卷
 怒のだ局和つす地會にひウの明嫁をた日すのの格が
 る鼻けへ我けれの我そ者番傘一は旅て間待つてたは縛られ
 先そむ元家のこ民宿の朝も思ひしめ役け
 生こ日のな聲の内明るさよるひしめ役け
 家らのな聲の内明るさよるひしめ役け
 でをなはいは明るさよるひしめ役け
 養騒い日薬取りよるひしめ役け
 子が日記取りよるひしめ役け
 なせ記取りよるひしめ役け
 りる也りよるひしめ役け

大松大鳥大鳥大別大別石大中大大大横大島大鳥大鳥
 阪山阪取阪取阪府阪府川阪關阪和阪濱阪根阪取阪根

太雨風の虫一孤劍南豐子夕一憲勝紫垢一專狂青英正
 郎來ほ阿ん

坊眠坊る二風愁彌牛泉雀鐘羽太二電坊舟路雨蛙郎兒

オ、澄める水よ懺悔の髪解かん
 悉皆屋年期上りを妻に持ち
 慰勲に別れ想ひの増すばかり
 鳩にやる米が乞食の前に落ち
 日曜日炭切るこゝも頼まれる
 注文が来て開幕のベルが鳴り
 見こまれた丁稚金庫を預けられ
 冷めし車の窓へ霜の屋根が見
 泣く事に女の智慧はこゝもなく
 夕焼ぞ明日は日和ぞ皆刈れよ
 親切にうつかり乗つてさけまれ
 食つてみてトマトの色の惜しがられ
 知り過ぎて世を鈍感で歩むなり
 電話口あんな空々しい嘘を
 今日だけの責を次席はもてあまし
 幡随院みたいな顔で讀んでる
 六年も病めば院長また變り
 出世するつもりへ綿入れミヤけられ
 健やかか白痴は母を沈ませる
 誓文も思惑外れて見るも憂し
 ねだらせせてから買ふ若い父の所作
 國を出た時の言葉へ垢がつき

鳥取 大坂 堺 奈良 大根 島根 大浦 兼二 大岡 福岡 大河内 河内 大坂 神戶 大阪 甲府 大府 大坂 兵庫 大坂 大坂 大坂

無帆 麥角 幻草 凡郎 青柿 吐句 夕情 黒天 如空 主税 大猷 赤笑 喜天 可村 内匠 素子 勇宗 四方 路鳥 仙掌 豆秋



柳樽評釋 廿四篇まで (十二)

麻生路郎

(七) 三篇の句 (續き)

ゆび二本ひたいへ當てゝ下女はにけ

お内儀がコレですから……こゝ、ゆび二本をひたいへあてて下女が逃げた。亭主の色好みが想はれておかし。

同じ三篇の句に

徴りたやら今度の下女に沙汰がなし

がある。これも好色の亭主を嘲笑した句である。

人べらしよらずさはらぬりんき也

人べらしと稱して、お内儀が美しい下女を下けてしまった。

亭主は、内心ギクツミしたけれど、それを引きこめておくだけの口實がなかつた。

ねがはくばよめの死に水取る氣也

早く死にたいの、お迎ひを待つてゐるのこいやがらせを云ひながら生きのびてゐる姑の腹の底を割つて見れば、この一

句に盡きるであらう。

ごの湯へも一廻り入るかたきうち
敵を捜すためには、他國人の入り込んでゐる温泉場を第一に

目ざしたものだ。

そこで何等の手がゝりが無いミ又次の温泉場へミ移つて行つた。それをミの湯へも一廻り入るミ穿つたのである。

取次の出る内ひだのしわをのし

なかく取次が出て來ない。ふミ見れば、袴のひだに皺が出來てゐる。まだ取次が出て來ないのを幸ひ、そつミ、皺をのばしてゐるのである。軽い穿ちの句。

おしそうにものをくれるが妾也

旦那の鼻の下を量つてむしり取つたものだけに、さうやす

し、ミやれぬのも尤もな話。ここに行末のこミを考へるミけちにもならう。ミは思ふが、この句は妾のけちくしたさまを嘲

笑したのである。

足留に盃ばかり出しておき

客扱ひに馴れたお内儀ぶりがよく出てる。

「ではホンの少しばかり」

こ受けてるうちに、お誂らへが運ばれてお谷の尻が釘づけにされるのである。

(八) 四篇

四篇は明和六年の刊行である。次に其序文を掲げておく。むかしくの前句冠附は蝶々子菩薩萬句合に名をならし、享保の頃收月出て世話事に句意のおかしみを専らこ撰みしより江府在在の組々迄これを好み、年毎に一萬の句員を集め、今にその餘風残りぬ。爰に寶曆のはじめ淺草新瑞端の考士川叟萬句合發し、めづらかなる言葉に當世のはいかいこひこしき句姿を新斧せしに、或は一萬或は二萬の句あつまる事此考士の妙さいはん徳さやいはん、よつて書肆星連堂のぬし誹風柳樽の小冊を編集し二篇三篇となり、こしし四篇をあつめる事を乞ふにまかせ、近來の勝板行を拾ひ集め、二二の篇まはなしぬ。

于時明和六丑の孟秋吉辰 淺下境異陵軒述

(九) 四篇の句

女湯へおきたくさだいて來る

輕妙な寫生吟である。女湯の中の女房の姿までが彷彿として浮んで來る。殊に今日と違つて式亭三馬の浮世風出時代を想像するに、

「起きたく」

こ抱いて來た若い亭主の當惑しきつた態度までが遺憾なく表現されてゐて面白い。

もつこ寝てござれに嫁は消れたが

この句、嫁對姑の序曲である。花嫁の初々しい姿が、その家庭へ明るい光りを投げた事實は姑にしても否むことが出來ないのであるから、これを姑の皮肉に解するのは少しく酷な觀方であらう。何れは息子の中に挟んで嫁と對峙し、鎗を削る姑ではあらうけれども……。

病み上り喰はせずにおくやうにいひ

食欲地獄の悲惨な滑稽を詠んだ句。眼は鼠のやうに光つてるし、髭は葱畑のやうにまばらに伸びてる。斯うした病み上りにこつては、色氣よりも食氣である。又しても肯力を無視して食欲を挑む。若しこれを遮らうものなら、喰へるものも喰べさせないやうに訴へてやまないのである。

中直り鏡を見るはをんななり

亭主は長火鉢の猫板によりかかつて無闇に煙草をふかしてゐる。大風一過、今仲直りがすんだばかりなのである。女房はさすがに女、泣いた時の化粧くづれに亂れた髪容を氣にして鏡に向つてゐる。さうした態度は淋しいうちにも何事なく、なまめいて見へるものだ。男のこゝろがほんまに解けるのはこの時である。

同じく四篇に

中直り初手に笑ふは耻のやう

さいふ句がある。古人の觀察の鋭さに敬服する。仲直りこそした
たが、また亭主の方もムツチリしてゐるので、女房の方も素
知らぬふりをしてゐるのだ。お互ひに惚れた弱身をせまじ
する心がうかがはれて可笑しい。

つばな賣よくくみれば女の子

茅花はちさいふ草の、穂の萌え出たものである。春の野邊な
ぎに生じ、こぎもか振きこつて食べてゐるが、つばなを喰べる
ご肥えるごか、血を止めるごか、尿を洩らすのを治するごか云
はれ、藥草としての効果も多いので、村童が江戸へ賣りに出た
ものである。つばなは随分古くからあつたものらしい。萬葉集に
『わが君にわけはこふらし給ひたるつばなをくへぎいややせに
やすーさいふのがある。この句はつばな賣云へば洩らしい
村童ごばかり思つてゐるのに、よくく見れば女の子だつた。
女の子は矢張りごつかにやさしいごころがあるご、春らしい詩
美を感じたのであらう。

武士のけんくわに後家が一人出来

アツシ云ふ間に二人は傷ついた。双方ごにもう蟲の息であ
る。武士は今日あつて明日ない命、貞婦兩夫に見えずで忽ちに
して二人の後家が出来てしまつた。奇抜な穿ちの句である。

柄杓賣なんにもないを汲んでみせ

『ごてもく。直は負かりません』云ひ乍らも柄杓賣は
しきりに汲んでサツシ流すやうな様子をして見せる。それが
いかにも實際汲んでゐるやうに見えるごころにこの句の面白味

がある。軽い寫生句。

圍はれはいひわけ程の見世を出し

今も昔も變らないのはお妾の商賣で、何かしてゐれば淋しい
さいふ程度のものである。それをいひわけばぎの店を出し云
つたのである。そのころなら、揚子見世でも出してゐたのであ
らう。

十二月人をしかるに日をかぞへ

『おい、何を愚圖々々してゐるんだ。もう十日しきやないん
だぜ』云つた風に正月までの日を、人を叱るたんびに數へた
てたさいふのである。穿ちの句。

白狀をむすめは乳母にしてもらひ

今時はこんなむすめもゐないだらうが、戀病さいふローマン
ティック病が女性の間に幅をきかしてゐるごころのごである。
兩親からごんなに問ひつめられても、惚れた男の名を白狀する
ごころが出来なかつた。そこに昔の娘らしさがあつた。日本特有
の女性美があつたのだ。しかしそのまゝでは戀病ひをした娘ご
いふ娘は、みんな死なねばならぬが、そこにはうまい抜け道が
あつた。むすめの日常生活を尤もよく知つてゐる乳母がむすめ
に意中の人が出来た位なごころに氣づかない筈がないから、乳母
がそれごなく白狀をすゝめるご、流石にはにかみながら、そ
んならご乳母までうち明ける。乳母がむすめに代つて兩親に白
狀する。それを『白狀して貰ひ』ご詠んだのである。

切れごみは一ぱいのんでかきかかり

あいそもこそも盡き果たは云ふものの、切れ文を書くのはあまり氣のすゝむものではない。

考へりや淋しくもならうさ。矢張りうれしかつた頃もあつたのだもの。それに今日まで一緒に苦勞して来ただけに、いろんな思ひ出もある。しかし今更さうするこゝも出来ない。

そこで一杯のんでから書くのだ。酒の力を藉りてするこゝいふこゝはいゝこゝではないが、さうして自分をだまさないければ切れ文一つ書けないところに人間の弱さがあるのだ。

泊り客近所ではもうなんのかの若い女の泊り客でもあらうものなら近所ではもう噂の種になつてゐる。火の無いところに煙を立てやうとするのだ。あの息子と遠くに關係が出来てゐるので近く嫁にして披露するつもりなんだらう。一人が云へば、さう聞けばあの娘は身重のやうだ。

さあらぬ噂をそれからそれへさひろけてゆく隣近所の人々。あの女房すんでにおれがもつこころ

一寸レツテルがいゝからな。誰でもひつかかるよ。あれで格氣深くて、おまけに盗みごころがあるさいふから、人は見かけによらぬものだ。桑原々々。すんでにおれがあの女房を持つこころだつた。聞いただけでもぞつこするよ。

大三十日世間へ義理で碁を休み

降つても照つても三百六十四日、ばかりくゝさうも續けて来た碁も、大三十日ばかりは流石に世間への義理で石を片づけるこゝを詠んだ穿ちの句。

かりものの部へははいれぎ手柄也

武門の勢力が旺んになつてから世繼に男の子が生れるか生れないかは、お家の運命の岐れるところになつた。そこで腹はかりものさいふ言葉が生れて、舊姿の制度が行はれ、本然に男の子が無い時には、たこへお妾であつても男の子さへ生めば其の子が世繼になれたのであつた。この句は即ちお妾に男の子が生れたので、腹はかりものの部には這入るけれども、兎に角世繼を生んだのであるからお手柄ださ云つたのである。

てゝ親がひろへば文もしづか也

娘の落した文をてゝ親がひろつた。わしの顔へ泥を塗るやつと思つたが、誰にも知られぬやうに、それを内懐に入れてしまつた。苦りきつた顔が月に向つてうなづいてゐた。

年わすれかはれぬ時分一がきれ

年忘れは年末に親戚知己を招いて歌舞舞曲して遊樂するこゝで、これは一年の間に憂事のあつたのを忘れて新年を迎えるこゝいふところから生れたので古くは唐土にもあつた行事である。

潑散さか別歳さかいふのは年忘れの事で、東坡の別歳の詩に且爲三日歡慰此窮年悲さいふのがある。江戸年中行事に誌されてゐる。さうした忘年会で底抜け騒ぎをやつたゝめに一の糸がぶつさり切れてしまつた。三の糸なら準備もあるか、容易

に切れない一の糸の準備までしてなかつた。そこで「買はれぬ時分一が切れ」を詠んだのである。これで夜も深史、興も酣であるこゝが知れやう。(つゞく)



十七字への惧れ

自由律派俳人に對する疑ひ

前 田 雀 郎

(一)

所謂新しい俳句に就て、今月(十二月)は珍らしくも萩原井泉水、河東碧梧桐の兩氏が、揃つて論陣を張られてゐる。即ち都新聞文藝欄に掲げられた井泉水氏の「俳句界對立の立場」及び中央公論に掲げられた碧梧桐氏の「萬葉以後の新興運動」がそれである。私はこの二つの論文を、同じ短詩界に遊ぶ川柳家の一人として興味深く拜見したが、常々句の自由律さいふものに對し、多少の關心を有つ私にも、讀後、何かその筋合の上に

うけがへぬものが生じたので、その點をこゝに申述べ、御示教を得たいと思ふのである。

尤も井泉水氏の云はれるところは、少しく抽象的で、あれだけでは「傳統派の人々はなぜもつち自らの今日を疑はぬのか」といふ以上に私には聞けぬので、これに對しては別に異説のあらう筈もないし、こゝではより詳しく検討されてゐる碧梧桐氏のそれを「自由律派」の主張を代表するものと見て専ら氏の考察を對境に、私の疑ひを申上げやうとするのであるが、その前

に私は先づ碧梧桐氏の議論に九分の賛意を喝采を贈らなければならぬ。

碧梧桐氏は云ふ「七五調は神代ながらのリズムであるが、三十一字形式をやまと言葉の最善最美の形であるがかなすのは無根據な概念的迷信である。七五調は萬葉人の創造なのだ。歴代和歌集は、その萬葉の創造の摸倣、その踏襲なのである、かういふ、詩は全的自己の創作でなければならぬ。一半の先天性を缺くところに歴代和歌集の墮落がある。外的形式及びリズムを固定して、内的感情のウエーブを律しようとするのが、摸倣と踏襲の大なる缺陷である。こゝに、弛張急緩區々なるべき感情内容のウエーブを表現する形式として、或る局限された一律を選ぶこの、大なる不合理性を認めなければならぬ。」

氏は更に、形式マンネリズムの行き詰りが當然招かねばならぬ「非詩的根柢としての理智の潜入」に就いて指摘され、最後に、これを救ふの道は、たゞ「先づ總ての因襲を人爲を罷脱して出来るだけ原始に還元する大旋廻運動である。古事記時代へまで溯源して、詩歌の理化、理解化、及び形式化のマンネリズムやら、感情内容のウエーブに拘する自由律の直感に轉廻すべき大なる目覺めより他にない」と断じられてゐる。

右は氏の論文の大骨を拾ひ出したのに過ぎないが、かういふ條理を極めた氏の議論は、從來の「十七字だから俳句である」

こか「古き草叢に新しき酒を盛れ」こか云ふ至極泰平な傳統派の醉語に聞き飽きて来た私の耳に、如何にも新しく、生々響いたに違ひない。にも拘らず、何を私ほその中に疑はうしてゐるのか。

(二)

私は折に觸れ時に臨み、我が嘆きを十七字に記してゐる。それは私が川柳家であるが故に、十七字といふ窮屈な言葉に我が感慨を盛らうしてゐるのではない。川柳といふ短詩の形式が私の感情の姿を表現するのに最もふさはしい事を知つたからである。更にその短詩の持つ格調が、感情表現の手段として効果的である事を知つたからである。

まつたくこの十七字音を一句の調ベする詩の形式は、不思議な働きを持つてゐる。表現を試みた私の感情の姿の上へ、この詩形は豫想せぬ一種の情調をさへ加味して呉れるのである。それは確に私の計畫した効果を、二倍に價値つけて呉れるに違ひない。かういふこの詩形の微妙な働きは一體何處から來るのであらう。私の考察は碧梧桐氏は以對に、こゝから始まるのである。

碧梧桐氏は、三十一字形の發見も、七五調の統一も、萬葉人の創造だと言はれてゐる。私は古代歌謠に就て何等の智識をも持つてゐないので、その事の當つてゐるか否かを知らないが、

(三)

或はさうなのであらう。しかし氏は、何が故に萬葉人が、詩歌として價值つけらるべき感情内容のウエーヴを直感して、五七調、三十一字形といふ一律に局限する必然性を發見したか、それに就ては何も説くところが無い。勿論私は、七五調が神代なからのリズムであるか三十一字形式をやまと言葉の最善最美しいの形であるか、それあるが故に主張するものではないが、氏の議論の基調をなすべき最も大切なこの問題に對し、充分な考案を下されて居ないのはまことに遺憾である。

七五調云ひ、三十一字形云ふも、言葉の一つの組合せであつて、決して人間本來の呼吸が持つリズムの形體ではない。既に言葉のリズムとして先天的に五七調を持つて居なければならぬ筈の、神代から一つ手前の原始やまみ民族に依つて作られた古事記等に見ゆる多くの歌謠が、長短區々、極めて自由な状態に於いて諷詠されてゐるのは何故か、これは彼等がその自然性に即し、率直に、無技巧に、息づかひのまゝ言葉を持つてその感情を表現してゐるからである。しかるにさういふ勝手氣まゝな古代歌謠の中に、私共はたましく七五調を發見し、三十一字形を見出す。意識されたる言葉の組合せにしてはなく、自然な息づかひの、ある段落として。

この事は後世の歌謠の律調を論ずるに當り、私共のよくよく考へなければならぬ點であらう。

前にも述べた如く、我が古代の歌謠は、感情内容のウエーヴの千狀萬態に從つて、自由な言葉で諷詠されてゐた。さういふ歌謠に對し、私達はこれを總括的に單に「うた」とは呼ぶけれども、例へば「和歌」とか「俳句」とかいふやうな、一つの限られた名稱を贈る事は出来ない。なぜならばそれらの歌謠にはそれを統一すべき定つた詩の姿がないからである。では「和歌」とは何か「俳句」とは何か。

七五調及び三十一字形は萬葉人の創造だ。碧梧桐氏は云はれてゐる。萬葉人は一體何所からそれを發見して來たのであらう。碧梧桐氏は「言葉及びリズムに對する敏感性」だ云ふ。それは云ふまでもない。しかしその敏感性は何を反射させたのか。私は單なる「美しくあるべき言葉の組合せ」方を生んだのではなく、言葉といふものゝ向ふにある呼吸本來のリズム、この息づかひの感情表現上に於ける効果に、創造者の敏感が働いたのだと考へる。

音楽がある音と音との組合せを行つて、一つの情緒をつくり出すやうに、言葉も息づかひのまゝに驅使され、ある所にまで疊まれて行けばやはり一つの情緒をそこに作り出すものである事に、創造者は氣がついたのであらう。創造者はこの息づかひのすみにはずんで、あるクライマックスに達した時、そこ

に醸し出された情緒、その中に一つの完成された「詩」を感じたのだと想像する。

和歌は、さういふ「詩」の全體を包む特殊な氣分に、假りに付せられた名稱である。この事は俳句の場合に於てもまた同じであるが、この情緒を醸し出すに必要な言葉の調べ、即ち創造者が「詩」を感じた刹那の現在状態に於ける詩の姿を約束化したものが「詩形」を名づけられてゐるものなのである。

私は先に、自分の川柳創作の體験に徴して、詩の固定形式が表現効果の上に微妙な働きをなす事を申述べた筈であるが、その効果は實にこの「詩形」の持つさういふ働きに他ならなかつたのである。内容それ自體の持つ情緒との二重奏が融合して、特殊な表現効果を収めてゐたのである。

他の文藝にあつては、表現即内容云はれ、形式は單なる表現手段としてその中に包含されて仕舞つてゐるが、固定形式を持つ詩歌にあつては、形式、内容、表現、この三つが渾然と融合して始めて價值をなへるところに、文藝としての特殊性がある。詩歌に於ける「形式」は、他又藝のそれのやうに二にして一のものではなく、一にして二なのである。詩歌を論ずるに當つてこの特殊性を忘れる時、そこから錯覚が始まるのである

(四)

碧梧桐氏の議論の中に発見しなければならぬ一例の錯覚も、つまりはこゝに出發してゐるやうである。碧梧桐氏は俳句の墮落を、その十七字といふ固定形式のマンネリズム、即ち詩形の

踏襲と模倣にあると云つてゐる。これは明かに氏が、俳句の形式といふものゝ内容といふものを、一にして考へられてゐる證據である。

詩形といふものは、詩といふものに特殊な情緒を保たせる爲め、はずみかゝる息つかひに、ある統制裁斷を加へたものである。故にこそ「和歌」にはしか呼ぶべくふさはしい詩形が設けられ、また「俳句」にもそれにふさはしいものが定められてゐるのである。従つて詩形は感情表現の自由を阻むものではなく、却つて感情表現の効果を助長させるものなのである。

既に「和歌」も「俳句」も呼ぶ以上、さういふ名のもとに、或は意識のもとに製作された詩歌には、その名にふさはしい詩感が無ければならない。詩感とはその詩形の内容とは別の情緒の意識を云ふのである。これはその詩歌の内容とは別に、常に有るべききらので、またその名のある限り永久に日本人と共に存在すべき筈のものなのである。

碧梧桐氏は、俳句の墮落は形式のマンネリズムにあると云はれてゐるが、それは内容のマンネリズムの誤りではないのか。そこに覺すべき思つかひのマンネリズムにあるのではないか。感情内容のウエーヴに即して弛張緩急區々なるべき思つかひを無理にある時のある人の思つかひに律して言葉に移さうとするところに、自然ささみ溘瀾さか失ひ、今日の生氣なきマンネリズムに陥つたのではないのか。私の考へるところ、今日の定形詩の墮落は、たゞその詩形の醸し出すところの情緒にかくれ

て、内から湧き起るべきものを忘れたに原因すると思ふ。

碧梧桐氏は、蕪村が俳句の十七字を破壊しなかつた事を疑つてゐるが、寧ろ蕪村が何故俳句の十七字を捨てなかつたかを考ふべきであらう。「春風馬嵬曲」の如き、或は「晋我追悼曲」の如き、あの頃にあつては破格の長詩を試みてゐる蕪村であるも、蕪村にして俳句の詩形か、我が感慨を託すに有害無用のものであると知つたならば、何じ破壊を試みずするやう。蕪村はこの詩形の効果を知つてゐたのである。

蕪村は詩形は詩形として、そこに盛る言葉の息つかひを、常に我が感情内容のウエーヴに即してはすませた。

柳ちり清水かれ石ころく

かういふ蕪村の句を引例するまでもない。かるが故に彼の句は詩形に準據し、ながらも私共に清新な響きを傳へるのである。私はこの事實を芭蕉の發句に於いて一層感じさせられる。

(五)

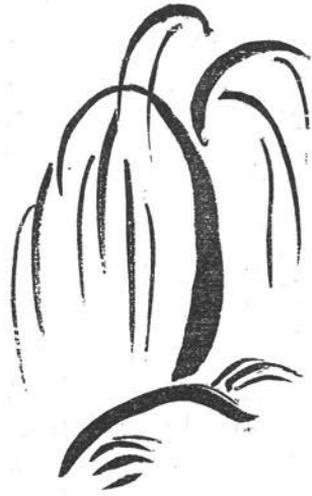
詩形ミ字数ミいふものは、自ら別問題である。詩形は字の數ではなく、この音から来る調へを尊ぶのである。従つてその字数は、その詩形の持つ特殊な情緒を亂さぬ限り、息つかひに従つて、必ずしも十七字である事を要さないかに思ふ。井泉水氏の作であつたか、今私は次のやうな句を記憶してゐる。

で々虫生れてゐるた

この急迫した息つかひの中にも、私は一つの「俳句」的情緒を感じてゐる。

私にこつて、所謂「新しい俳句」ミ呼ばれる自由律派の人々の句の字数は問題ではない。長からうと短からうと、その息つかひさへ「俳句」ミ名づけられた詩の持つ情緒を亂さないものならば、私はこれを俳句として認める。たゞ疑ふのは、十七字といふ詩形にのみ呪ひをかけてゐる事である。

私は言葉を急がなければならぬから、再び前文を繰かへす事を避けるが、自由律派の人々が、俳句の墮落を、その内容のマンネリズムに原因するを見ず、十七字といふ固定形式の踏襲にあると見ているに疑ひを抱くのである。新しい俳句とは云ひ既に「俳句」ミ名乗つてゐる以上、それらの人々も、この詩の形式が持つ一つの情緒ミ、その情緒がもたらす効果を認めてゐるのであらう。さういふ意識のみにて我が嘆きを諷詠される時、その息つかひは、たまく言葉として、その詩の原始的な姿を備へる事はないか。果して有り得ない事であらうか。もし「新しい俳句」であるが故に十七字を慎れると云ふのであれば固定詩形の中に作句するよりも窮屈な事である。自由律派の亞流の人々の句が、既に、従来の十七字形を離れて、何か一つの姿を形づくらしつてゐるのを見て、私は、くくさう思ふのである。碧梧桐氏は、十七字形の正統觀を固守して、その初期に於ける十七字に則らない作をも改さんせんとした晩年の芭蕉を一創造に勞れた、形式中毒者」ミして憫んでゐる。十七字を惧れる自由律派の人々にして、逆にこのそしりを招く事なければ幸ひである。……昭和四十二・十九……



川柳塔

○ 安井ひろし

昭和四年を送る

くたびれた羽織の皺に年暮るる

近江八幡¹居にて (三句)

文がらを焼いて小春の白い花
子の寢息母の寢息の白い部屋

暮れ迫る机に思ふこそ多く

あめきらがいけないのだ たほすのだ

金解禁の井上蔵相^へ

街頭のうめきは聴かぬ耳をもち

借家人組合結成 (三句)

三割まける 不勞所得だい

口へでも當然 拍手のうづまき

しほられて居るこ氣づいた強き見よ
妻を失ひたるM君に

○ 手文庫に箆筒に妻の香をさぐり

○ 龜井花童子

外遊の身になつかしい初日の出

正月は公然こ子こ遊ぶ父

七草がすぎてお餅を願みず

寢正月羨やむ友こ飲みあかし

嘘でない嘘元旦に叱られる

色街に見る正月の麗かさ

羽子板こ羽子板配達 夫を挟み

○ 高橋かほる

おごつてはもろたが傘は一人さし

泊めてほし泊つてほしい電氣スタンド

火だこが出来てみかんがしまひ

髪結ミ芝居ばなしに雪が解け

船世帯奈落へ下りる様に下り

○ 伊藤 愚陀

婉曲に言へばこたへぬ息子なり

夢を辿つて行きついた戀

かほるさん

洋食はきらひだんねん屠蘇機嫌

映畫レビエーなるものをみて (二ウ)

脚のまじゆつに酔ひ痴れて出る

握つた腕が脱け落ちた夢

生々しい孤獨を冬にしられまい

○ 松 盛 琴 人

想像の國はなかりし事を知り

念入に年齢ミ白髪 の殖ゐるのみ

犬ころのやうについてく恥を知り

正月が来る兎も角も生きるらし

松 山 行 (二ウ)

善き友の多きを思ひ温泉につかり

酔ふて戻る温泉の街ふけて温泉の香り

午年に因みて (四ウ)

馬になる頭梁奥に受けがよし

替玉の走つた後へ女優乗り

名馬へ馴れてサーカスにゐる十九

軍馬嘶き五百萬元ばかり費り

○ 石川 双葉子

共存共榮を説いてもうける

内の社長だけはみみんな思ふてた

死んだ兒のラツパを吹けば鳴る悲し

○ 朝 田 新 水

なんこいふ毒婦の髪美しくしき

偽はつた散歩は逢ひに行くのなり

許嫁ガソリン嬢ミなつてゐる

寢間で喫ふそんな息子でなかつたに

靈柩車我が家の門に寫されて

五十に 近く 母 の 奉 公

妙なこゝ時間ばかりを聞く妾

孝行な息子は貯めて居らぬなり

夕陽は 赤く 圖書館を出る

○ 酒 井 駒 人

ふり向けば妻の心の動く品

十二月素足の女道を聞き
古木屋並べ直して讀みつづけ

○ 水谷 鮎美

貧乏をおかしくおもふ朝もあり
戸樋の雀親も子きも口あいて
父三子の鍋にさかなのあたまかな
寂光の春は嫁菜の雪が解け
寂光のけだものこみて犬ほゆる
寂光のするぎく笑ふ佛さま
寂光の貞婦へ鐘のなりやます
寂光の狐のすがた化けられず
寂光の笑へば咳が重りて
寂光のろくろをみつけなつかしむ
寂光の蛇の執念腹を見せ

○ 浅井 冷々子

御多忙のミこミ保険屋恐縮し

門標を更へて (M.I.O.H.H.)

家中を荷負ふた門へ名が更り

○ 松丘 町二

初日には勿體ないが泣き笑ひ
犬よ鴉よ人間ばかり目出度がる

衣食住貧しけれぎもおわ日
胃散を呑んで元日暮れる
元日も鶏は稼いで呉れました

○ 出口 雨町

何一つ不平も言はぬ靴を見よ
雄辯にあの腫が謝罪してゐます
正月だこてかたくなろまい
腹の立つ日は抽斗もがたつくよ
張りきつた弓矢の如く生きんかな
口先きで生きてる奴等ばかりなり
病室の白さ冷たさ十二月
降る雪も雪もオーバにこけてゆく
カクテルのグラスへ俺のそつな手
けんしゆくに富豪の門は閉つてゐ
人間のよさは見事に蹴落され
庭樹まで本家の松に威壓され
榮枯盛衰あゝ貝殻に打ちよせる水
算術の横では餅がやけてゐる

○ 小川 三猿堂

ウインドへ買つてやれないのにのぞき
子供への罪です感情は捨てませう

別府 温泉

飛びこんで見ようかなぎこ海地獄

○ 住田 亂 耽

ネーピカットの鐘に潜んでた彼女
朝日吸へば戀人なきは思はぬよ
春の灯に好色鼻のつやゝけき
カーキ色の憂鬱せまる二十一
年の市を流れるあをい人の群

○ 川合 舟々

いつか知れる戀ミ云ふ氣になつて出る
そんな氣で立てば鏡も曇るだろ
ウインドの光に消されさうな俺
敷石に騙されたこは思へさも

亡き愛男利雄を思ひて (三切)

温めてやるよ も一度伯父ミ呼べ
教室のドア一机が一つ空き
ギツチヨのグラフ投げ投げ投れミ云ふ

○ 中島 鐵州

商人に此の氣短が利用され
鞭打たにや馬へ心が通じぬか
問屋から又一厘を値切られる

兵隊の宿して一家丸く居る

○ 伊藤 緑之助

日本を論じ吹雪のある日なり
置炬燵一人になればまるくなり
秘書官も知らない金を投げ出せり
薬瓶はるばる打ち上げられてるし

○ 橋本 二柳子

貧しさに疑獄事件も知らぬなり
家賃云々ミ師走を遊んでる
田圃まで探しにブローカー附まごひ

高野山詣り (十一月十九日)

冬ごもり薪をはこぶ高野山

晩秋

餌がない餌がないよミ雀まで

◇ 森 石竹

土筆おろくミ泣け手を抜ける
豆細工見せよの豆が落ちたる
草刈りてゆく身のまわり廣さかな
如何に人の力のむけなるを
蟻がおじぎしたエツサく續く

妻の暇なし俵あんでる
おさへ布團の淋しくもある
生れし罪のやれ寝てこまそ
こだま聞こゆるお地藏の顔
戸へ時雨の細長き足立てゝねる
細目して風の心になつて見る
氣もすき通るなり水の音を越わ
麥の穂孕み切つなかるかや
黒んほの麥やぎんなに泣きたかろ
實のりたる南瓜の重みうけて見る
考へ落ちまごこそ箸をおく
ころけおつ雨の白さを見てあきる
砂を胸から流し眺める
然もにつこり親子心中
めぐまれぬ土へもの言ふふた握り
返へす波あはれ濁りて砂さなる

◇ 阿部 閑生

焚付けて飯ふく迄の思ひごこ
行くさ歸るさ逢へば逢ふもの
懐手して癡人めかす

四十男があまへて候

◇ 西村 市公

淋しい思へき梅はまばらなり
病床へ偽はる事になれた母
金借りた證據に木の眞新らし
病人に叩かれるこそうれしうて

◇ 中見 光路

四角な人にされてゐるなり
種馬にしても彼奴はうまくやり
何一つ不足はないの世辭を受け
四女まも着せた妻の元且
チト銜れたまごからムキに怒り出し
蠟船で風評の家へ障子をあげ

◇ 増位 汀柳

寂しさに疲れはてゝはジャズもとし
ストープに流行唄のひからびる
悩みから避難してゐる丈けの旅
漏れくるは枯木の泣いてゐる夢よ

◇ 櫻井 圓角

繪を買へば繪の講釋を聞かされる

借金を抜かん夫婦の氣の揃ひ

◇ 永田里十九

助手にまかしこいた今日の揚り高
不具者のかなしさ彼女を見失ひ
三度目は妹代筆してくれず
妻よりも先づ犬がジャレ犬がジャレ
思惑の一つもせず去つた父

◇ 丸山 公二

喜こんでくれる話と思ひきや
心中の生き残りこは見ぬまいが
あれしきの事恩に被る年賀状
片道の錢がのつてる運轉臺
上女中身に餘る程贈られて

◇ 若井たけし

愛人の心は變り下駄は減り
時雨に消わてしまつた一ミ村
夕焼けに牛の脊骨の光るなり
もの忘れする戀の嬉しく
しんみりこ話せば藝妓も見えず
騙してゐるのかこも問へず

忠告をして呉れる友も離されず
手紙にはいやなお客の名を連ね
まさ夢にナイトキヤツプの亂れたる

◇ 島田 翠峯

妻の氣をくむは父親只一人
心配はかけまじもこの仕事服
死んでしまつて何が倅せ

勅題「海邊巖」

千代八千代海邊の巖に變りなし

祝舎弟の入營

萬歳の聲の中から晴れて来る

◇ 安西 杏三

頼むこも云はず遺した子が五人
責任の回避で次席勤め上げ
編棒の二本が戀をさゝやけり
晴衣縫ふ母だけ火事を知つてゐる
値下げの家に強い北風

◇ 中澤 濁水

轉宅をする氣か家賃遅いこ
句の話夕餉の誰も聴いてゐず

お悔みに行く娘笑顔を封じられ
軍鶏の寄せフットボールの意氣に似る

◇ 松村 敏郎

會釋して通る二世の奥床し
三尺の窓へは惜しい丸い月
簡單だ不平があれば出ればよし
病は氣からそれは丈夫の人の事
惚氣ではないが騙した罰だらふ
貯める人誰でも貯まるものさ決め

◇ 牧田 普門

病院へ紋付が来る三ヶ日
流行の中にうづもる女店員
惡漢のタイプに髪を刈られたり
宵の内だけでも我が子抱いて見る
死がせまればきて金は借らないよ

◇ 池田 雪峰

好い娘だがあれは大家のお嬢さん
金持つて行かぬ家出をすぐ届け

◇ 木山 青砂郎

寝入つてる子に覆ぶさつて朝を出る

隣から勢のよいのみの音
無意識に蟻の通路を閉したり

◇ 三輪 五輪

脊を向けて寝たは淋しい宵なりき
因果だと言ひ捨てられて理も立たず

◇ 越田 久水

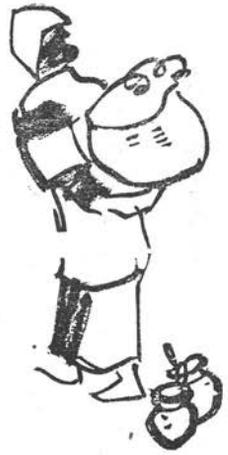
身に餘る光榮の手が油染み
又來るさ女の手から軽く逃け
銀行員すんなり白い手が目立ち
見ぬぬ眼の親に絹糸柔かし
貸家札住みやすそうな陽が當り

◇ 白井 梅里

風の嵩だけの音は知り乍ら
報告の中途がカットされてる
咳すれば裸のあばら淋しくも

◇ 上田 柳影

るねむつてるる人のバックの暮れの街
打ち勝つて見れば哀れな奴なりき
東京へ出るは出世の様に見ゆ
戀をしる頃生活の樂ならず



大蛇

歳 晩 夜 景

川村花菱

新宿追分けの本通りに大きな空地がある。そこは大きい呉服店が建つ事になつて居たが今年の春その會社がつぶれたのだ。

そこへはいろいろの假設の見世物や賣店が取りかへひつかへかゝるやうに、廣いテントが張り切りになつて居る。曲馬のかゝつた時には表に、「馬丁大至急募集、當興行部事務所」云ふ張札を見て、

「は、あ、従業員がストライキをしたな
と思つた事がある。興行師とある爭議をして居る劇團がテント劇場の名で興行した時には、立ちまはりのさわきが往來まで聞こえて来たのがさびしかつた。

夙のさむい夜、その前を通るに、一人の男がかなり大きい蛇を首から巻きつけて口上を云つて居るのにひきよせられた。

「蛇には二本の足があります。これです、さながら鶏の蹴爪のやうな形をして居ますが、怒る時はこれが一寸位に延る

のです』
「集まつた人々に、その足を見せて居た。のぞいて見るこ小さい豆のやうなものだつた。

「中には、大きい錦へびが居ります。此の蛇は恐らく伊崎に上陸したものゝ中で、空前のものです……云ふこ大變大きいやうですが、こもかく大きなものです！」

私はその言葉に何もなく眞實性を感じた。男は猶つゞけて「實は、今日長崎に向けて出發する豫定でありましたが、貨車の都合で明日に延ました。今日はほんの動物のえさ代丈けで只の十錢で御らんに入れます。大蛇が獲物に向つて飛びつく状態から残らず説明して御らんに入れます。御一人さんでもやらせます。猶、ポスターには十三頭ありますが、三頭は死にましたから十頭しか居ません。三頭は白骨にして置いてあります。學術參考の爲にごらん下さい」
凡てが本當だと思つた私は、すぐ十錢出して這入つた。さつ

さり這入つて呉れるさい、と念じたが、見物は三十人程這入つて来た。大きな大蛇が居た。實に大きなものだつた。物語にある四斗樹大のものさ云ふのはこれだと思ふ程の大きさがつたが説明に由るに、四ヶ月間何一つ喰つて居ないので大變やせて居るさうだ。さう思ふに、脊骨の所から體が三角になつて皮がたるんでゐた。小さい——と云つても、優に他の見世物で一疋だけで金の取れさうなもののが、十疋程ゐた。その中、最近に物を充分たべたさ云ふものは、丸くして艶があつた。

中の男が、赤い毛布を大蛇の眼の前にもちら／＼させるに、これも／＼が、いきなりそこにさかぶりつのが凄かつた。場内には、口上の通り、白骨になつたものが置いてあつた。その他に、『がらく蛇』と云ふ毒蛇も二疋ゐた。それが怒るに尻尾ががらく鳴るのなさうだが、いくら怒らしても鳴らなかつた。

『なか／＼鳴りません』

説明者はまじめに云つた。何から何まで本當である事がうれしかつたが、私には却つて見世物らしい感じがしなかつた。教育博物館を見たやうな印象で、『心の散歩』にはならなかつた表へ出るに、金網の中に四五疋の小さい猿が藁の上にさむさうにうづくまり重なり合つて居た。それには

『この猿安く賣ります』

さ札がついて居た。

○曲藝のたのもしけなる紺の足袋
○曲藝のきりり紺の足袋をはき

○小娘のタイプの敷や曲藝園 乞食の子

小田急を新宿で下りるに、大通りへの長い地下道がある。そこを通るに、ほの暗い灯の下に乞食の子が寝て居た。枕元の金をもらふ箱はうしろ向きに丸まつて居た。私がそのそばを通るに、三四間先に行つた十二三の男の子が、つゞき走つて来て

『やるよ！』

その箱の前にしゃがむに、すぐ立つて行つた。乞食の子は見むきもせずに首をうごかして禮を云つた。私は、その子供が怎してひきかへして来て乞食に錢を與へたか不思議でならなかつた。向ふを見るに、その子は立つて待つて居たらしい十七八のきたない作業服の男に何かさやく二人は笑ひ合つて先を急いだ。

『あの箱から金を盗まふごしやがつたんだ』

私はすぐ思つた。不良少年だと思つた。乞食の箱には銅貨ばかり十錢たらずあつたが、もしその中に白銅でもあればそれを盗み取らうとしたのだ。作業服の男が少年にしかく命じたのだ。

私は、その二人が何處へ行くか跡をつけて見た。やがて新宿の驛の表口の前へ来るに、二人は左右を見ながら二人とも大人のやうな腕組みをして、子供は板草履の底で土をふみながら貧乏ゆるぎをして居た。

すつ三前のはなしだが、ある朝、砲兵工廠の前の橋の上で、失業者らしいのが欄干にもたれて川をながめて居た。そこへ、大きな新しい鯉節をくわへた野良犬がせつせつ四ツの足をうごかしてやつて來た。失業者はいきなりその犬の口から鯉節を取らふこするこ。

「何をくそ、此の人間め！」

こ云ふ眼をして、犬はふりむき、走り去つた。男は又川をながめて居た。私は、ふいこそその事を思ひ出して、子供は憎らしいが、此の失業者はあはれだつたと思つた。

うらな い者

新宿の車庫の前に、大勢うらなひ者の店がある。その一軒にさながら大黒様のやうなテラ／＼福々しい山高帽の易者が居る。さもう一人、頗髯のある恵比須様のやうな紋つきのものが

烏 烏

本稿は昭和四年夏、ある非常に暑い日、外から歸り、晝寝しようミ雑誌の棚から一冊ひき抜いた、その中に奉天川柳會發行

居る。ある夜兩方に客があるのを見た。大黒様の方のは中年の女で、手に子供を連れて居た。

「ぢやあせつちや駄目なんですネ？……平氣な顔してりやいよんですね」

女は、まじめに上目使ひにうなづいて居た。

そのかへり、新歌舞伎座の横を通るこ、その酒屋の店に、ゑびす大黒二人もコップ酒をあほつて、ボンチ講のやうに反つくりかへつて笑ひのつて居た。

勿論店はあげつばなしで、客さへあれば飲むんだなこ私は思つた。

のんきな、人も世も茶にしたやうな明るい氣持が私をほゝゑました。

○運命こ云ふうらなひは洋服で居る
○本を賣る氣のうらないは旗を立て

烏

蛭 子 省 二

「瀋陽一二號(昭和三年九月)がはさまつてゐて、曾て柳友が欲しいこ申越された折り、探しても見出さなかつたもの、今一度

讀返してみるに、湯本刺庵氏の「午王の説」、それは極めて短文ではあるが、私には面白かつた。私は午王に就て何にも知らぬからである。其際書いて置いたものが、これである。處が村田氏が日本藥報掲載中尾博士の「不老不死の藥を訪ねた徐福の跡を」の紀行文を、切抜いて惠贈して下さつたうちに

「素蓋鳴尊は朝鮮熊成の峰に居られたが、熊成ケ峰は此を牛頭山ミ書き朝鮮語クマナレミ讀むそつである。此れよりして素蓋鳴尊を牛頭天王ミ佛混合の際には言ひ習はし、此處に熊野の牛王なる御符が出る事になつた。昔は偽をついた者が此の御符を飲む血を吐いて死ぬミ言ひ傳へられ、誓詞によく書かれて居るものである。我輩の如きは此を頂くさへ罰が當ると思つたが恐るゝ頂戴して内々で開けて見るに道書に言ふ、五山行形圖の如きもので鳥形の異變な字が認めてある。恐らく夫等ミ關係があるものであらう」

こ、デ私はオコがましくもバスケツトから取出して、社へ送る事にした。此の方面の研究は本社御同人の藤里好古氏の専門に屬して居るので、センエツ極まるけれ共、誤謬は訂正して頂ける安心もある。何れ眞劍に調査する機會もあらう、今は一寸興味のイタヅラ事に過ぎない。

湯本氏文サムマリ

(一)午王は新井白石の同文通考にもある、生土の誤讀である

ラニ一致して居るが

(二)大連圖書館の西國諸寺社巡禮印譜に「何々之璽」ミある璽の字が大和古篆で自然ニ午字にみえ、玉の字の點のないのが一つ二つある、午王は璽の字を二字によむだものミ考へられる。

(三)璽は三種の神器の一なる、神璽ミ抵觸する所から午王ミ呼むだものではあるまいか、敢て識者の教へを乞ふ。

以上である。即ち此の第三が湯本氏の御卓見ミいふわけ、一及二は古來多く書き残されて居る説で、圖書館での御發見は御勞苦であつたに過ぎない——爲念弘く申上けるが私は湯本氏の文に即して書こつたのではない、單に古川柳の註解ミしてであるから、御諒承を願つて置く。

今古書の一部を記すならば

(一)生土説ミ眞俗佛事編卷一第五項にも、牛王寶印、委しくは谷響集之中の如し、或説に云く牛ナミは生土ニ云々云々なり、生土ミは俗にいふ産神なり、年の始に産神の寶印を講て禳災のためにつ故修正會に此を用ひ(生土ミは生の字一畫を牛の字の下に加ふれば生土ミなる也)

○愚按ずる本尊の印を木に刻み此を加持して神驗あること已に烏欄沙摩經に出たり、斯を牛王寶印の本據ミすべし、木印を加持する明據なり云々

東瀛子卷之一に、諸社諸寺院より牛王ウシノミ云者を出せり、夫本朝の風俗、生王ウツミタの神を深く渴仰し、初生及給着初、髪置カミヅケなきに社參するに、京都祇園の社に犬の子の印ウツミを以て鉛丹を以て孩兒の額カウに巫女ウラハメの老婆オヤバこれを點じ、或は蘇民將來の子孫ソミンこいへる守護札シヤクシヤクを受けて下向シタムカフす(蛭子ヒルコ曰いんの子に就ては、古句に「犬の子ノ」忠盛チカシはだき上げる)「こか」「いんいんのこく」趙雲シヤウウンたたき合ひ等がある)傳云ふ、祇園の神札は牛頭天王南海の蘇民將來が家に宿を求給ふヤドヲモトメき、汝の子孫ニキノミ云はば、鬼魔を避けて幸を守らんサマシ御約ミヤク話ありし故ゆゑかや、又外々の生土子ウツミも忌明イミの社參シヤマシに、臘ラツ脂シにて大の字オホノジ犬イヌの字ジなきを屬ツケし、或は點ウツするも全く犬の子イヌノミの擬ニギ模モなるべし、扱ウツ犬の子イヌノミ云て邪崇ジャシュウを遠トホざげ、又蘇民の子孫ソミンノミ云て疫鬼ウツをさくるを慣ナひて、なべて生土神ウツミより神札シヤクシヤク出すに、神號シヤクシヤクの中に書カて左右サマに生土寶印ウツミ、其産土ウツミなるを證ウケを示して邪崇ジャシュウを退ウツく、これ全く犬の子蘇民イヌノミの神誓シヤクシヤクなきに本モトづけるなるべし、然るを後世誤りて、生ウツの下シタの「畫エを下の土シタの字ジの上に付添ツケへて牛王ウシノミ書カしより、いつしか牛王ウシノミのみ書誤ウツしミなり

(一) 聖説ウツ骨董雜談ウツに、神聖ウツを牛王ウシノミいふ事は、聖ウツの省字ウツ爾玉ウツなり、聖ウツを草書ウツにかくミきは委ウツなり、これ誤ウツつて分ウツけて爾玉ウツに書カきたるより牛王ウシノミさはいひしなるべし、東瀛ウツ子ウツに、或書ウツに牛王ウシノミは聖ウツ也、聖ウツの草書ウツ筆ウツ法ウツ僅ウツ上に餘ウツりを以ウツて、牛王ウシノミの二字ウツきは成ウツりたりウツ云ウツへり、按ウツずるに筆ウツも印ウツ

なり 聖印ウツさ左右ウツに並ウツべ書ウツする謂ウツなし、殊ウツに聖ウツは土ウツに屬ウツしたる字ウツにて、玉ウツに屬ウツせし字ウツならねば草書ウツ筆ウツなるべし、これ説文ウツを見ざる誤ウツ歟、字彙ウツ、字典ウツ、みな土ウツに屬ウツせり、因ウツに云ウツ、字書ウツに非ウツざる印板ウツの書ウツは經典ウツといえざる誤りなき事ウツあたはず、名物ウツ六帖ウツに聖ウツを玉ウツに屬ウツす、況ウツんや其他ウツの書ウツをや、蓋ウツし犬ウツの子蘇民ウツの神札ウツの意ウツによれば、生土寶印ウツなるべし、然ウツれども本朝ウツの文章ウツ、保元ウツ、平治ウツの後は釋氏ウツに落ウツ 又布衣ウツに落ウツたれば、涅槃經ウツ智度論ウツの説ウツによりしもの歟。

古來ウツ、此ウツの外ウツに牛頭天王ウツ説ウツ、牛黃ウツ説ウツ及ウツ牛玉ウツ即ウツち牛寶説ウツなきがあらけれ共ウツ、學者ウツ未ウツだ多くの疑ウツひを殘ウツし、決定説ウツはない様ウツである(附記)倭訓ウツ菜ウツに、牛王ウツ書ウツけり、牛ウツをこウツよぶは牛頭ウツ、牛黃ウツ牛旁ウツ、牛膝ウツ同ウツじ、可成ウツ三託卷ウツ之二ウツに、牛頭天王ウツは神農ウツなるべし、牛ウツの字ウツ、午ウツの字ウツに似ウツたる故ゆゑ、牛頭ウツをゴツウツミ誤ウツり、牽牛花ウツをケンゴウツミ誤ウツり、牛角ウツをゴカクウツミ誤ウツりよむ云々、好古日錄ウツ四十項ウツに、佛刹ウツの牛王ウツの札ウツ、玉印ウツ二字ウツ點ウツ有ウツて殊玉ウツの狀ウツをなす、何ウツの意ウツ義ウツあることをしらず、一日ウツ或人ウツ藏ウツる所ウツの古牛ウツ牛ウツの札ウツをみる、其紙色ウツを審ウツらかにするに、五六百年ウツの者ウツならむ、又近日ウツ、福田寺ウツの牛王ウツ札ウツをみる、文明ウツ中書ウツく所ウツ也、其書體ウツ同様ウツなり、其珠玉ウツ狀ウツの點ウツは、飛白ウツ書ウツより變ウツじて然ウツることを知る。(一) 神符ウツして門戸ウツに貼ウツり邪鬼ウツを避ウツける

(二) 起請文關係

淨瑠璃の祇園女御九重錦に「實々ふしぎは、我兩眼いまた八聲の鶏よりも、鳥の鳴く音を聞きしより、ふつこ目の内涼しくて眼前敵を討つたるも、偏へに神の加護なるか、ミ懐中の守より牛王取出し能く見れば、數多の鳥のかげもなく、扱こそ大靈權現の不思議を見せしめ給ふかこ、肝に鉛する折もこそ、又も羽音は悦び鳥、飛連れ、目下聞きし紙は、忽に、元の牛王に成りにける、かかる奇瑞をみ、熊野の牛王の威徳末の世に、門戸に押し盗人を防ぐ守ぞ有りがたき」

心中天の網島には「孫右衛門懐中より、熊野の牛王の群鳥比翼の誓紙引換へ、今は天罰起請文、小春に縁切る思ひ切る、偽り申すに於ては上は、梵天帝釋、下は四大の文言に、佛前へ神揃へ紙に治兵衛名をしつかり、血判をすゑて差出す」

此の二文で用途の證明なる。

約束の鳥に指の血を吸はれ (古句)

尚ほ心中天網島の末尾に「なうあれを聞きや、二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓紙一枚書く度に、熊野の鳥がお山にて三羽づゝ死ぬるこ、昔より言ひ傳へしが、我ミ其方が新玉の年の始めに起請の書きぞめ、月の始め月頭書きし誓紙の數々、その度毎に三羽づゝ殺せし鳥は幾何ぞや……」

鳥を三羽殺させて月をしよひ (古句)
情を張り熊野の鳥へらすなり (古句)

牛王は熊野を尤も有名とし、祇園次ぎ、其他、法隆寺、東大寺、那智、駿河淺間社、手向山、大峰、西大寺、熱田、白山、富士、大佛堂等いくらも出した、様式にも種々あつて二月堂の一例は

二月堂

南無頂上佛面除疫病
南無最上佛面願満足

なご記してある、熊野牛王に鳥點のあるのは、鳥を使ひしたからで、和漢三才圖會にも、熊野の符札、皆用鳥點、凡鳥七十五隻、爲熊野生土寶印六字、魍魎識畏之、不敢近、乃鬼神無横道乎、將神徳之妙乎あるが、熊野權現は古來誓言妄語の神さされてゐたので、源平盛衰記にもある如く、古くより用ひられてゐた、善經記にも一熊野の牛王七枚をかかせ、三枚は八幡宮、一枚は熊野に納め、三枚は土佐房が五體に納めよきて、燒きて灰になしてのみにけり」なごある、古句に牛王の灰を聞いて見落共の由因は佛説であると言はれて居る「役優婆塞日、閻浮提守護神一には妙德圓滿(摩陀陀國の正中に有り我が國熊野本宮證誠大菩薩)二には北辰(閻浮の北にあり吾邦熊野新宮)三には大元(補陀洛迦に有り我邦那智飛瀧大菩薩)(塩尻説)此の三神を熊野に當て起請文に用ひたのである。

牛王は熊野越王は池の端 (古句)

此の牛王は吳王にかけたもので、狂言の慣用手段である。

起請は表面に書いたものも、裏面に書いたものもあり、木版刷も肉筆もあつた。(四五頁續く)



光耀抄

○ 大阪 麻生 葎乃

長女だけ 母のさばきが氣に入らず
屋根上へ ほり上げられた ゼラニウム
あれ買ふて これを買ふての年の暮
蠟燭の芯巻きまいても 陽が落ちぬ
かぎ雲が 出て来た ねんねこ着やう
では皆様おやすみ JOBKしんごなり

○ 東京 井上 信子

(帝展五題) 野 火
子を焼くまいご必死の翼
繩 飛び

大 近 松

天心の線へつないだアンタレス
曾根崎の一夜は盡きぬ 明の鐘
雪の追憶

モデル業者

眞白い光りに雪の日を憶ふ
白日の下で 秘密を盗まれる

○ 松山 岩本 武子

右の手に大根洗ふ陽が當り
幸福に生きる感謝の戸を明ける
電燈に枕一つが淋しすぎ
戸を閉めて炬燵を買ひに出る夫婦
もう少し歩きませうご女言ふ
煮豆ぶつ 小羊は啼く啼く
乳母車の子供寝入つてゑびす切れ
友達がほしくはないかお地藏さん

○ 大阪 安井 欣女

はるか希望に立ち上りましよ
よいお鯛うまい蟹でこおいて行き
朝のほこりの行衛をば見定める

○ 大阪 松盛 壽枝女

縫ふ事を置いて良人のたよりを見
小走りの先づ木の葉は飛んでゆき
北風が吹き残したよな細い月





亡母をおもふ (二)

一生を淋しう咲いた曼珠沙華
ケープルに乗りごりやくの勿體なし
緋の鹿の子の身重に袂あてゝゆく

病院にて

手術する事も病氣の贅澤さ

○ 大阪 畑田よし江

文學が好きで裁縫ゼロばかり
巻ずしが固くなつてる松の内

○ 松山 清水柳芳女

ボーナスを貰へば保険すゝめられ
何時首になつてもよいの地所が出来

愛子改メ

○ 京都 西村光菊

安賣の足袋をはきつゝ苦笑ひ
世間の人がアツミ云ふ様な戀もほし

○ 松山 安井柳女

はられてもく猫は刺繡の膝へくる
強く出た女は切れてもいゝ覺悟

○ 愛媛 矢野愛女

蹠足をさす先生は靴をはき
遅れてる事知つてゐるのに下駄の雪
少しよくなるミ眼薬めんぎがり

○ 津倉 村上加根女

かんばんの様に女事務すましこみ
おこりつほい姉へ妹は小さくなり
月給日みつけてた品うりきれて

○ 津倉 尾下雅女

繪双六世界一週して戻り
歌増多會戀すてふ手におさへられ
なんてんが二粒欲しい雪鬼

○ 松山 友田白梅女

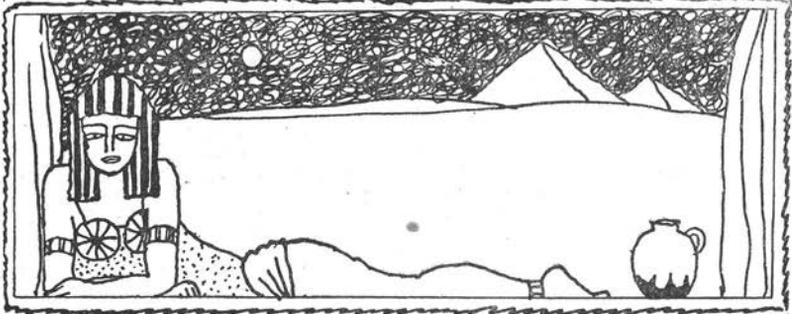
洋装の豊艶ミ云ふ靴下よ

○ 大阪 中見みさ子
(十一)

障子は日めくり見るミ忙しそう
空いばり今朝も立つてるかッしなり

○ 大阪 山本靜香

成金はいつも大名のやうに見せ



大問題・小問題

聾啞獨語

岩 本 素 人

文金の高島出でも、斷髮のモダンでも女と言ふ點に變りはない。スカートは短いのも裾を引摺つてる女も矢張り女は女だ。自分が裾を引いてゐるからと言つて短いスカートで飛び歩いてゐる連中も女でないと言ふのは間違つてゐる。またモダンが長い裾を見て、あんな古風なのは女でないと言ふのも間違つてゐる。破風作りの純日本建でも、西洋建の二十五階でも乃至支那家でも家には違ひない。希獵の建築物を見た東洋人は感心して歸る。夢殿や寶隆寺の建築を觀た西洋人も矢張り感心する。そこには東西共に一貫した建築美を發見するからである。

哥磨や春章や寫樂や廣重——外にもある——は其眞價を西洋人に依て初めて見出されたと言ふではないか。

川柳家の傳統派の或種の人は、少しく現代的な型の新しい句に直面するにこれをさう取り扱つてよいかでんで見當がこないで、こんなものは川柳ではない。こんなものを作りたければ川柳と言ふ名でなく外の名の下に作つてほしい。こゝ

自分勝手に川柳の限界を作つて其中に鎖が籠らうとする。

また革新川柳家の或種の人は、浪漫的香ひのある作品に接するに、古い、こんな川柳は科學的現實主義時代の今日既に詩的價値を失つたものである、と言ふ。兩者共に餘りにも自個の立場に忠實なる結果より來る鑑賞的色旨に陥つてゐる私は絶対に個性を尊重する事に同意するものではあるが、唯々自己の殻にのみ鎖じ籠り他を顧る事を成さざる態度には同情はもてない。そこには個性の硬化があるばかりではないか。

はじめにコトバありコトバと共に思想あり。人類がものを考へる事を始めて以來今日まで考へ詰めに考へて來た。人間は「考へる動物」と言はれてゐる。その考へ方が時代々々によつて變つて來る。その考の代表的なものを時代思想と言ふ。

時代思想は直ちに藝術に反映する。古典主義だ浪漫的だ印象派だ後期印象派だ新浪漫派だ感覺派だ何々だと言つた文藝運動は皆此の時代思想の反映に外ならな

い。
然らば現代の代表思想は一言へば、その主流をなすものはリアリズムである。科學的現實主義である。社會主義的である。そして現代の文藝運動が亦極めて大衆的化しつゝある事はあらゆる形に於て窺知する事が出来る。

偶像ミ僞蹟ミ迷信は、實證主義の前に全く姿を没する日も遠くはあるまい。既成宗教の多くも此の意味に於て、資本主義も帝國主義も亦傳統藝術も共に、偶像を旗印とし僞蹟を手段とし迷信に依つて支持されつゝある限りに於てそれ等の存在は今や斷末淵に立つものである。

然し眞實なるものは、たこへそれがこの様に小さなものにしても、このフルヒの底に残されなくてはならない。藝術ミは眞實なるもののみ附與さるゝところの永生への旅行券である。

偶像ミ僞蹟の土穀には藝術の芽は吹かない。本當の藝術を産む魂は迷信であつてはならない。

實に藝術は永生である。時代を超へて永生である。然してこの永生なる藝術の外皮に時代時代の色彩がベインテングされるのである。即ち時代思想が反映するのである。その様式ミ手法ミが其時代の特長に形造られるのである。

であるから少くも藝術を鑑賞する爲には其時代の文化に通じその風土を知らなくてはならない。様式ミ手法に理解なくして其内に存する美を求めんミするものは反感の外に何もかも發見する事は出来なないであらう。斷髪を女でないミ言ふ高島田姫の如く。同時に現代文化に追従を事ミし紛失したる自己に心付かず時代の尖端を歩むミ自ら號する夢遊病者は口を開けば「彼等半古」ミ叫ぶ。自己の趣味ミ異なる様式の中にも亦美的包藏されてある事には氣が付かないのである。即ち高島田を嗤ふ短スカガールの比喩に當る。我々川柳家は、作家ミしては自分の最も是ミする様式に頼つて自己を没却する

技巧の問題

出口 雨 町

(昭和四、十一、七)

事なく作句すれば足る。時代に追従する要は更でない。だが評者ミしての立場は唯そのみでは満足してはならない。即ち時代思想の傾向に達観しなくてはならない。又被評作家個々の性格に無理解じあつてはならない。

だから作家ミして優れたるが故を以て直ちに選者ミして推舉する従来の習慣は改められなくてはならないと思ふ。

作家ミしての資格ミ評者ミしての資格は自ら別物である。ミは言へ作家ミしての体験を有たない選者はあり得ないのであるが。

(一)

細かいことに就いて云々するミ、末節の問題だミ言つて一蹴する人があるやうだが、例へば「に」にするか「へ」にするかといったやうな處にもその句を活殺する鍵のあることを忘れてはならない。四五磨君の句に「満員の中へ女のみあつかまし」ミ云ふのがあるが、これを「満員の中に

女のあつかまし」ミして見るミ又違つた情景を詠んだ句になる。即ちこの場合の「に」は英語の(to)に相等し「へ」は(in)に當る助詞なのである。勿論兩者の區別は多少なりミ違つた意味を持つてゐる。毎號たくさん句を見てゐるミこうした助詞がかなり不用意に使はれてゐるミ思

ふこころがよくあるので、つまらぬこころも知れぬがちよつと書いてみたまでである。

(二)

母親の氣樂になつてきつこ老け

狂 雨

右の句をかりに「母親は……」とすれば普遍的になり、「母親が……」とすれば限定的になる。そこで作者は「の」を用いたのである。この「の」は「川柳のトリック」でも云ふべき特殊な文字であつていはゞ「上五」「中七」を作る爲、或ひは句語の聯絡の爲に使用されるにすぎないのである、言葉をかゝて言へば「女親氣樂になつてきつこ老け」をやつても意味に變りがないと言ふのである。だからこの「の」は普遍的でもなく限定的でもない漠然とした處を言ひ表はすのによく用ゐられる。實例はいくらでもある。

拙吟「親類は恩に著せつゝ、利子を取り」で私の意圖したのは社會批評であつたのだ。そこで一層しんらつな内容を持たすために「親類は……」とすることによつて、獨斷的な小主觀を普遍化したのである。こゝにも我々の注目すべきは「が」「の」の使ひ方があつた。

(三)

技巧はさうでもよい、こいふ主義もあ

る。だが諸君よ。もし諸君が最愛の戀人去られたならば、諸君はきつこ彼女に對する一つの言動が、如何に不用意であつたかこいふことに思ひ到るであらう。彼女の神經が極めてデリケートである程度に、作品鑑賞者の感覺も亦チヨキクしてゐるのだ。

初めに「男親」こいふ題があつた。私は考へた。考へてやうく出来たのが「そ」う叱るものではないと「男親」こいふ句だしかもこれは私の實感だつたのである。しかし實感即詩ではない。そこに技巧の必要があるのだ。そこで私は前句を「そ」う叱るものではないと「猪口を置き」こ直した。その結果はじめて川柳らしい生きた句になつたのである。そうだこの句から見れば初めの句は確かに死んでゐる。

(四)

机上で拵らへ上げた句は悪いこいふ意見もあるやうだが私はそうは思はない。作者の藝術がにじみでてゐたならば立派な句になると思ふ。實感の句なら何でもよくて、技巧でねり上げた句は皆よくない云ふやうな暴論は恐らくあるまい。古句の「九大夫は睡なきを踏みつぶし」は作者の單純な川柳の想像にすぎないのであるが、而も詩人でなければならぬ得ない面白い見方であると思ふ。

誰の句だつたか忘れだが「陣太鼓利兵衛は牢に立ち上り」こ云ふのを見たこころがある。勿論吉良の門前にマイクロホン

もなければ、當時、天野屋利兵衛がぶち込まれてゐた松屋町(大阪)にラウドスピーカーがあつたわけでもない。たゞ句主の特異な空想から生れたのであるが、松屋町の奉行所を江戸の松坂町あたりへ持つて行くのだから、これ程大膽な技巧はない。しかも利兵衛の心理をかくまで巧みに表現した點に於いて、確かくうまい句だと思ふ。こゝに、生れる川柳、あるこゝ共拵らへる川柳もあるこゝを繰りかへして述べておく。

(五)

實際ア・ン・ポウや芥川の小説を見て、洗練された技巧が如何に効果的であるかよく分かると思ふ。川柳の方でも各作家々々について、その特色あつた技巧を研究してみるこゝ、かなり收穫があると思ふ。水谷鮎美君や森石竹君の句が何時も第一は佳き詩人であるこゝだが、第二には佳き技巧の持主であるからだと思ふ。以上は所謂「習作時代」に於ける「技巧」に關する一般論であつた。したがつて無技巧の力強、句の價值にはいさゝかも抵触しない。むしろ私としては吐かへ吐き出したやうな熱のある句が好きだ。そういふ句には又技巧がなくとも必ずや讀者を魅する力があらう筈だから。

我々は常に「形式は内容を決定する」といふ形式主義文學論の金言を忘れてはならない。

郷土川柳といふこと

伊藤 緑之助

郷土文藝、郷土川柳といふ言葉をよく見受けるやうになつた。そして郷土作家とか郷土詩人とか呼ばれたり、呼んだりする人々が多くなつて来た。

だが、彼等が考へてゐるやうに、彼等は果して郷土詩人、郷土作家として認めたいだらうか？

私は頭を横に振らざるを得ぬことを悲しむ。私の考へてゐるそれは餘りにかけ離れてゐる。

彼等の脳裡にある郷土川柳の定義は、(脳裡に在るので、もつてゐるのではなくからう)郷土に在るから郷土作家であり郷土に在つて作るから、郷土川柳なのである。

故に郷土をしつかりと踏み占めてゐる作家ではなく、郷土から生み出した川柳でもない。郷土に在つて句を作るといふことゝ、郷土に立つて句を生むといふことが郷土川柳の定義が明かにされる一點である。

時代は瞬時も停滯を許さない。何らか

刻々進展を遂げつゝある。随つて新しい時代には新しい時代の川柳が生まれて來ねばならぬ。

今までの文藝はすべて有階級文藝であり、都會文藝であつた。プロレタリア文藝とか郷土文藝といふものが新しく興つて來たが、概して皮相な觀察と、單なる寫生に過ぎないものが多い。

都會文藝に反抗しろ、と言ふのではない。然しこれに倣ひ、これに盲従することには嫌だ。

郷土に在る者は郷土に在るものを育て上げねばならぬ。この郷土にあるものが、何んな力あるものに成長することも限るまい。一本の雑草まで、やがて萬國食糧問題を解決する草であるといふことを誰か否定し切らうぞ。

都會の夢を(都會と言つても餘りはつきりしない言葉だが、郷土に對する都會的といふ意に取つて欲しい)描くことに汲々とするより、我等の脚下にあるものを全身の愛を以て育てたい。否育てねば

ならぬ。郷土から起る力は偉大であることは歴史に徴してゐるわかるし、又、思想家達か風に言つてゐることももある。茲により郷土川柳の意義と使命がある。

だが、こゝに附言したいことは、郷土川柳を育てるからといつて、郷土に捉はれてはならぬ。我等は何處までも自由でありたい。我等の生活に忠實でありたい。生活を偽つた川柳を作るといふことは生活を冒瀆することだ。生活の恥辱だ。たゞ我等は、我等の脚下をさん／＼と流れる大地の温熱に、我等に與へられたものを育て上げたい。(勿論生活に正直であれといふことはひゞり郷土作家にのみ呈する言葉ではない。)

大谷句佛氏がその斷想録の中で「現代の俳人は辯論は仲々達者であるが堅實なる作句家に乏しい」と嘆いてゐるが、川柳家に於いては堅實な作句家といへば、指を折るのに躊躇せずには居られぬ。句に巧みな人はあつても、句に力がひそんでゐるのは少い。一人や二人は人格そのものゝやうな作句家があつてもいい。

郷土川柳を云々するのも必竟、生活に忠實なれといふのに他ならない。生活に即した力ある句を生めよ叫ぶのに他ならぬ。生活に忠實であれといふことは、純真

なる靈の迸りであつて、藝術といふ美名の許に、單なる寫生にして、無反省、無批判の暴露に過ぎぬものあらば、川柳の毒素として排すべきものである。夢のやうな空想、うつゝの如き憧憬を追い、文學少女的な安價な、造花の如き句を弄してはならぬ。我々の脚下を強く強く踏み

勞働者の希望

越 田 久 水

しめて、自己に偽るこゝなく、社會的に川柳藝術を確保せねばならぬ。
新年を迎ふるに當り、貧しき心底を投げ出し、ほんごうの郷土川柳が興つて來なければならぬこゝを望む。
(四、二二、二夜)

私の近くに古本屋があります。硝子戸のところに、複製の寫樂だの、春信だの歌麿だのの繪がかけてあり、時には芳年あたりの、ごく血生臭いところもかけたりしてある。通行の目目をひくのは却つてこれらにあるらしく、古本の正札附近は雨の日さいへぎ店先に人立を見る。棚には重に和本が積み込まれてある。棚の下の臺の上には習字の手本類も並んでゐる。私も夕飯後ふらふら古本屋を覗くこゝがある。

今日は古本屋の前で土工がこんなこゝを話合つてゐた。

「あの手本さ、あの手紙の書き方を買ひたいな」

「莫迦、手前がそんなものを買つてさう

するつてんだい」

「習ふのよ」

「習ふ？ふつ、いゝかけんにしろ。手前がそんなものを習つて、それがさうなうつてんだい」

「うまい字で、ひさの感心するやうな手紙が書けるやうになるのよ」

「こうしておらちや、そんなものはさうだつていゝんだ。第一手紙を出す用なんてねちやないか。向ふから來るあてもなし、したがつて返事を出すこゝもねちや、さうしておらちや、何處で死んでも悲しむ者なきや、知らせて貰ふこゝもねち、虫けらみていなものぢやねか。それがいゝ字でひさの感心する手紙を書く坊主に合力でつりあひがされねば

よ」

「まあ、さう言つてしまつたものでないさ、たごへば、女が出來たさするね」

「こん畜生、ぶんなぐるぞ」

「さう言ふなよ、お互ひにこの先き、ごんなこゝになつて、女が出來ないこゝいふこゝもないさ、そんな時、女にやる手紙が見られねい字で、まづい手紙であつて見る、恥しいと思はねわか、俺あ今からでも用意して置きていよ。それでねねこしても習つて無駄なこゝはねわさ、おい向ふから來たあれをみてみろ」

丁度その時、向ふから四五人針仕事のお師匠さんの歸らしい娘さんたちが、正月が近いせいか、鳥田や桃割れの髪もあでやかに笑ひさゝめいてきた。

この土工達の見てゐるのに氣がつくこゝばつたりおしだまつて、すまじ込んで、傍から見るごおかしい程堅くなつて歩調正しく過ぎ去つて行つた。娘さんたちの髪の毛の香りや、おしろいの香ひが東の間を往來を明るくした。

「おい、みたかよ、あのすまじ込んだのを。俺たちだつて、きつこいまに仕合せはくるよ。さう諦めてしまふこゝはなにもんだよ」

「……………」彼は黙つたまゝ、歩きだした。連れもそれにしたがつた。

が、何んぞはなしにさんざ連れの高尙な趣味をけなした彼は、その趣味をふこめ、彼自身さへ漠然とした希望の中に、未來のことを考へながら、たそがれの往來をたぎつて行くらしく見うけられた。

社會宣傳の謂

安井ひろし

彼等土工らにこつて、彼の言ふごころ高尙な趣味はあへて必要ごしないかも知れない。しかし希望こそは、いかなる不仕合せな、ごん底の生活にあつても、われ人共に失つてはならないものである。

川柳の社會進出が、所謂既成新興の諸柳誌に盛んに書かれて居る。「川柳雜誌」が川柳の社會宣傳を叫んでから七年、漸く柳界の目覺めをみたものご欣快に堪へない。然しながら川柳の社會進出の謂が多きは、川柳作家を多數に作るごいふ事であるらしいのは誤つて居る。川柳の社會宣傳、社會化ごいふのは誤つた川柳觀を排して、社會人に正しい川柳觀賞眼を養はす事でごなくてはならない。

演劇が盛んであり、映畫が盛んだごいふ事は俳優が多いごいふ事でごはなく、観客や映畫ファンが多く、その觀賞眼が高めゆかれる事である。勿論社會の希求に從つて必然的に演者の技能も發達し、よき技術者の輩出する事も當然である。

すべての藝術がそれであるように、川柳にあつても、多くの理解ある觀賞者をつくる事によつてよりよき川柳が生れて來るのである。

川柳の社會宣傳の方法として種々な事が行はれるが、それらは社會人をして川柳に親しますご共に川柳觀賞眼を呼び覺するものごでなければならぬ。

講談や落語や萬歳なご同一視される享樂的讀物として、川柳を提供する事は、大いごな誤りである。

夕刊の讀物でも舊講談の「松平長七郎」に人氣がなく、大佛次郎の「由比正雪」に讀み耽るは作者が時代意識をもつて幕政を批判し時代精神を解剖して居るごころに、讀者の興味があるごのである。

時代が如何に動いて居るかを洞察して進む事が川柳人の心すべき事でありなごらぬ。川柳が大眾詩たごいふ現實に於てそれは動かす事の出來ぬ事實である。ダダや草人のあの熱狂的な歡迎をみるがい。川柳人の關心なくして見逃せる事實ではない。

(卅七頁の續き)

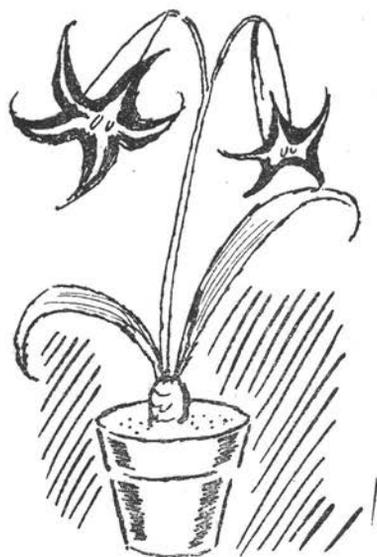
橋窓自語卷三に「北倉・大雲寺の牛王は佐理・喇軍なり、得てみるべし、宇治の白山には久安年中の牛王有、これらをも考へ合附會せるは用ゆべからず」ごある。

やく女房牛王をのめご三女をせめ (古句)

罪を侵し嘘をいへば、これを吞む時は血を吐くなごも俗間で言はれてゐた。

諸人は造人間まで出來る世の中に牛王の御符の如く靈驗いやちごなものが、用ひられなくなつて、大は遊廓移轉にからまるギョク事件、小は家庭のイタヅラ事の紛擾が、うやむやに葬らる事は、文化文化ごいつても古きに及ばない事であるご申さねばならぬ。

曳尼庵の我衣に、牛王賣の比丘尼は無能野牛王賣印を賣に出す比丘尼に、文庫の内へ入もたせ、又腰に勸進ごさくをささせ、米を買はせたる修行なりご、これが寛文の比からびンサッラをもち唱歌する様になり、天和頃より一種の怪しき女ごなつた。



粒々集

○ 朝鮮 蛭子 省 二

驛で足袋はく日婦へ犬もくる
 みなれぬ犬もゐるて落葉たく旗日
 書齋中心の間ざりかく妻はねそびれ
 朝川から支那唄うたひ大根まける
 粉煙草へこまかき町で妻に逢ひ
 あみひきの爛の言ひごまへタ刊
 赤い夜具に小言もいへず宿の雨
 先きんじて老ひ炬燵で智恵の輪
 自らを描く
 元日に眞ッ赤なタドンへ息をする

小照に題す

葱坊主に似も似て白髪染せぬ

妻観ならび元旦をまつ脊のび

賣喰環の夫婦今年も犬を飼ひ

○ 柳風スポーツ 東京 森 東 魚

駿足の素天邊からパントミ出

挾殺は御用々々の氣味があり

一ミ芝居見せて死球は壘へ来る

トンネルも外野のするは事が過ぎ

生きものゝやうにバットをいつくしみ

置くこへバットを置いてよく寝入り
ライナーの不運はフアインプレーにし

○ 甲 府 篠 原 春 雨

緊縮の春を黙つて餅を焼き
ステッキガールを求めつゝ夜が更る
寝正月くれに無盡が取れなんだ
銘仙が目につく春の空ッ風
初賣りの街は値下げの物ばかり

○ 大 連 大 島 壽 明

君へ忠親へ孝なる修身書
空つほになつて佛の前経
生存権だけへは指が觸れられず
水湿へ綿の個性のいごあわれ
あまりにも表裏の貝の肌
ひたすらに今日の踊りや今日の酒

○ 松 山 前 田 五 健

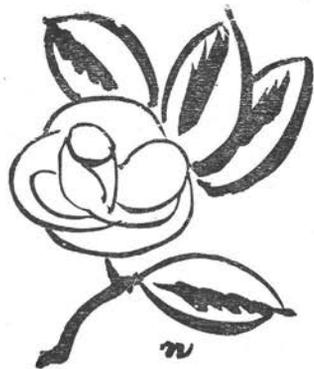
屑籠へ暮らしの判る三の糸
職業が斯う口紅を濃くさせ
品行を云はれる友の美しくさ
炭ついで柏子天邊の禿が見へ
瞬きの奇麗な眼からする戀か
船底の如き鼻持つ工場長

就職にいよく頼み難い世ぞ
朗らかな笑ひ手が行く銀の髻
麗人ミ呼ばれ家庭の人ならず
水鳥の陽筋亂して點點點
隔たりを酔つた中にも確ミ持ち
潑刺ミして男の子朝を出る
知りませんでした其れだけの冷やかさ

○ 東 京 富 士 野 鞍 馬

且那今日普請場へ来て世辭をまき
寢臺も女枕はなまめかし
横濱で駟の男起きて来る
寢臺車件の如く服をかけ
素人ミ見せる氣アルプス髭に結ひ
本當に御馳走されて氣がつまり
閑な晩姐さんうちで飲んでる
魚屋の一群朝のトラツク
食堂で猪口を受けるも運出髭
裸樹のすつかり冬に構へたり
哀れなり今日も昨日もおぎけ役
仕事から戻れば白い飯の湯氣
物尺をびたり嘘偽の面へ當て

○ 大 連 佐 々 木 三 福



月評

卓を圍んで

路郎 紋太
山雨樓 琴人

はむしる全てのもの、中で一番優れたものが賣れ残つたところに一種の皮肉な味を感じたので、そこにこの句を以ての獨立性がある様に思ふ。句の價値はまづ中々ころのものさ見てよからうと思ふ。

琴人提出

妻といふ玩具にあきたペンを

持ち

勝 二一

近作柳樽 紋太提出

王の座にましますメロン賣れ

残り

柳川亭

紋太……下五の「賣れ残り」が多少推敲してゐない難はあるけれども、全体に果實店にあるメロンを見て、邪氣のない揶揄をそのまゝ句にしたところに、軽く微笑ませるものがあると思ひます。

琴人……この句は一段高いところに飾られてある品、それが賣れ残つてあると云ふところに面白味を感じたのだが、この際「賣れ残り」と云ふ言葉にどうか云ふお話がありました、そう云ふ心持からこの句が生れたとしたらこれでいゝのかと私には思はれます。別に私には難を云ふところがないやうに思はれます。

山雨樓……観方が浅いやうに思ひます。成程

軽い揶揄と云つたやうなものが受取れるけれど、只それだけのものではないか。就れも斯うした寫生句に於ては深さを要求する事は無理かもしれぬがそれにしても今少し擇まれた着想を望みたいと思ふ。しかし一面この句の意味のこもつた句として考へるならば、ある面白味を感じないでもない。けれども、それにしては餘りに叙法が云ひ過ぎてあるやうに思ふ。

路郎……古句に「賣れ残り」に十目見るところと云ふ句があるが、その句さこの句とは少し趣を異にしてゐるので、抜いたのである。げに十目の方は所謂寸鐵殺人式の鋭さを持つた句であるが、この方は極く軽い皮肉を見る事が出来ると思ふ。古句の方は、遊女の賣れ残りを詠んだものであつて、全ての中で一番劣つた點に於て、その悲哀から来る辛辣な作者の批評があるが、このメロンの句

琴人……青年期の惱み、新婚當時の樂しかつた夢は何時か月日が重つて結婚は墓場なりと云つた倦怠を覺えて來た。そのうちに妻の足の足りぬ事が見え初めて來る、そして只美しいだけである事の淋しさを味はされて來る。終に「無智な善人に苦しめられて生き」(東洋鬼氏の句にある)と云つた氣持を持つてその日の生活のためペンを握つてゐると云ふのであらう。さういふ半ば諦めた中に悶えるやうな心境を充分に受取る事が出来る。上五、中七、餘りに露骨に出でゐるやうに思はれるが、その點に非難があるかも知れぬが私は「ペンを持ち」下五のために何分かそれが柔らげられはしないかと思ふ。

紋太……「ペンを持ち」は玩具に倦きたからそのかはりの樂みとしてのペンを持ちであらうと思ふ。生活のためではなくて、創作さか云つた様な自分の樂みの方であらうと思ふ。妻を玩具と見る見方はその人の見方として受取りはするけれど、僕はなるべくこうした邪氣のある云ひ方をしたくないと思ふ。句としては纏つた句ではあるけれども、その點

が遺憾に思はれる。

山雨樓……下五は句作者の感じを云ひ表すのに適當な言葉でなかつたんではなからうか。言ひ換へれば上の駒に對してとつて附けた様な感じがする。この句の内容がかなり複雑味を持つてゐるので、「ペンを持ち」と云つた様な簡單なかたづけ方をしてゐるのは受取り難い様に思ふ。

琴人……難しい點を指適された。そこがこの句の要點ですれ。

山雨樓……それから上の駒の叙法に就いて邪氣を含むのであると云ふお話があつたが、これは川柳と云ふ短い詩形の中でやむを得ぬ表現かと思ふ。要は作者が本當の心持をも少し思ひ入つた言葉をもつて、表して欲しかつたと思ふ。

路郎……今山雨樓氏の述べられた説には私も同感であります。下五の「ペンを持ち」を職業的創作家の意味に解するのさ、それから趣味的創作に生きるの二つに解せられてゐるやうであるが、この「ペンを持ち」は仕事（ビジネス）を代表させた意味ではないかと思ふがどうでせう。

山雨樓……さうですね。

路郎……迄新妻と云ふ人生にとつて最も大きな衝動を與へられたものにも、さう長く感激が續きさうな筈がなく、漸く我にかへつて、そして自分の仕事に専念するさ云ふ境地を詠んだものではなからうかと思ふ。でなければ「ペンを持ち」と云ふ下五が、先程山雨樓氏の云はれたやうにやゝ突飛でそぐはない

表現法になつてゐるやうに思ふ。

紋太……僕は取り方の別れ目は「玩具にあきた」でできるか、「あきたペン……」ときらずに續けるかの解し様で別れるのではないかと思ふ。僕は「あきたペン……」と續いてゐるさ感じるので玩具に換る。玩具と云ふ程度に興味のペンを執つて居るさ解したのである。

路郎……勿論「あきた」できつた句ではないずつと上から讀み下ろして行く句であるが、玩具、即ち女に對する愛と、それに換る事業と云ふものが取換へられたので、この問題は現代に限られたことではなく、昔から男は女の關係よりも、事業慾、名譽慾に最後は走つてゐる場合が多い、女性が家庭中心、戀愛中心で生きようとする點と、その點が異つてゐる。

紋太……それから僕が邪氣と云つたのは、妻と云ふものを玩具と視た人が、人を輕蔑するその他全てのものを輕蔑する、見下すさ云ふ氣持の表れを指して云つたのであります。句として、さう云ふ氣持を一切排斥したいさ云ふのが（強ひるのであればありませんが）僕の氣持である。それが、道徳觀が古い、新しいさ云ふ問題になり、思索の態度の問題も起るさと思ひます。

路郎……文學の行くべき道として、道徳を無視する派、例へば惡魔主義の如きはさの一件であるが、近代の頹廢した刺戟性にはさんだ作品として、それは許さるべきものであらうと思ふ。しかし一方には又人類愛の作品こそ眞に我々の味ふべきものとしての立場へ行く

のも一つの境地である。私は惡魔的作品、舊道徳を超越した作品、怪奇的な作品を讀んでその境地の興味に浸ることを樂む氣持も持つて居るが、自分を人類の一員として共同生活の中に發見したときには、それが然たる舊道徳でなくとも、少くとも時代のな道徳律に終始した句こそ眞に我々の生活をよりよき方に誘導するものだと思つてゐる。この點紋太氏の心持をよく理解する事が出来ると共に、又一致點を見出すのである。かく云つたからして句は全て道徳的でなければならぬと、全て道徳の篩にかけて選をする譯ではない。

川柳塔 山雨樓提出

煙突の下に眼ばかりうごめ

くよ

亂 耽

山雨樓……近頃面白い句だと思ふ。「煙突の下に」は現代の目眩しい社會相を浮ばしめ、「うごめくよ」は生存競争の激烈なる有様を物語つてゐる。「眼ばかり」と云つたのは作者の狙ひ所であつて、鋭い觀察を受取る事が出来る。亂耽氏の社會觀の一面を聞く様で、この句に接したことを嬉しく思ふ。

琴人……今山雨樓さんは、この句に對して實に巧い且適切な言葉で評された。私もお説に同感する。實に「眼ばかりうごめくよ」である川柳家の目は、こうして益々發揮されて行くのである。突込んで評するには、この句には言葉を創造してかゝらねば出来ないで、私はこの邊で御免蒙りたい。

紋太……僕は素直に作り、素直に受取りたいと思つてゐるものでありますが、この句を素直に受取つた私の感じは、隙のない表現であると思つた。しかしこの句の持つ内容は、此頃満喫する程間かされる社会観を、私に示めして呉れるだけである。勿論物語さか説明さか持つてゐない。作者の感情そのまゝの句であると思ふはするけれども、引き入れられる程感動は起らない。

琴人……私は煙突の下に生活する、体験者として、この句には大分引きつけられたのであります。

山雨樓……今紋太氏が感情そのまゝを表現した句と云ふ様な事を云はれましたが、この句に作者の感情が現はれる事は、この句の價值と云つていふと思ふ。しかし作者は感激に満ちた心持の底に冷やかな観察の目を光らししてゐるのである。つまり冷静な観察と高潮した感情との一致點に於て、この句は生れたのであらうと思ふ。川柳に思想なり、觀念なりを盛り込む事は初步のものには難い事であるが、そこへ感情まで織り込むと云ふ事は一層至難な腕でなければならぬ、その意味に於てこの句に敬服してゐるのである。

路那……感覺的に非常な鋭さを持つてゐる作者が、近代の社会相を眞二つに截断して見せた句で、その巧さに於ては近來稀に見る句である。こうした句に對しての批評は極初心者にとつて殆んど批評をしないのさ何等擇ぶ所のない難解な句であらうと思ふ。従つてこの句を完全にパラフレイズすることは

中々に容易なことではない。その意味から云へば、この句を單に初心者指導の目的の月評であるとしたならば、このところに持ち出されべきものではなかつたであらう。月評は初心者も指導する目的さ、又句の研究の立場から句評にのぼしてゐるのであるから、その點は諒恕されたい。しかし全然パラフレイズ出来ない事もないのであるから、その点を少し述べて置きたい。「煙突の下には」狭義に解して労働者の境地を思はしめ、廣義に解して都會に於ける頹廢的な徒らにうごめいてゐる人々を思はしめるのである。「眼ばかりうごめくよ」この眼は勿論その人々の眼であつて、目即ち人々の心であつて、所謂云ふべきもの、多くを、行ふべき希望の多くを束縛され、虐げられてゐることを「眼ばかりうごめくよ」で表現したのである。

路那提出

郷里なる農夫ら

ごめんなさい案山子と思ひ違へてた

町 二二

路那……さつき紋太氏の云はれた極く素直な感じを、句でも温か感しをすゝぶる素直に表現した句である。口語調をさつてゐることも郷里の農夫等に呼びかける親しみを云ひ表すにはびつたりと當嵌つて居る。句材はそんなに新しくないかも知れないが、或る温い感情を持つて詠まれたことに、この句の價值を見出した。

山雨樓……さう云ふ句が鈍角の句と云へる

だらう。一見幼稚な、平凡な觀察の様であるが、この句から受取得る感じは、單調ではない、作者の素直な感情が、質朴な農夫等の上に頭を下げてゐる。そしてさうした特異な表現が認容されることに於て、川柳詩形の獨自的な自由律を讚美したいと思ふ。つまりこの句が川柳と云ふ形式をとつた事に依つて、効果的である事に氣付きたいと思ふ。

琴人……句材が古いまさ云ふ事は、確かに云はれるだらうと思ふが、この句を讀んで私が直ぐ受け入れるものは、温い心持と云ふものが判然と出てゐる。自分の心持を何等願慮する事なく率直に云つてのけた。そこに今迄の同じ様な題材の句と異なる感じが與へられる。そこでこの作者と云ふ所に、私として考へて見れば、作者はあらゆる苦い経験を味つてゐる頗る鋭い感覺の所有者である、その作者にさうした優しい句を生みだすと云ふ、その人格がより一層私には慕はれて来る。

山雨樓……句材の事に就いて、懸念と別に表現と云ふことに就いて考へて見ると、我々の川柳創作に於て、一も着想、二にも着想と云ふ風に、思ひ着きがよくなければ、川柳が生れないと云ふ風な考へ方をする者が多い様であるが、元來藝術のことは表現が問題であると思ふ。この句にして見ても、句材の古さと云ふ様な懸念は、この特異な表現によつて、如何に感激が強調されてゐるかを考へ合すならば、さう云ふ懸念は一向顧慮するに及ばないと思ふ。繪畫に於て生物としての林檎は、永劫スケッチの素材とさなるであらう

が畫家は決して、林檎をとらへたことを古い
と捨て去りほしない。そこに前人の描き得な
かつた色彩が表れてゐるなれば、優れた藝術
品として讚美するであらうと同様に、詩に於
ても案山子を詠ひ、農夫等を詠ふことに、古
いとか單調だとか云ふ、懸念を持つ必要はな
くそれ等の對象に對して如何に感激したか、
そしてその感激が如何に強く、鋭く、深く、詠

南座

食 滿 南 北

まれてゐるか云ふことが、より重要なこと
であらねばならぬと思ふ。即ち表現の重要性
を考へなければならぬと思ふのである。
紋太……皆さんの言葉で盡きてゐると思ひ
ますが、僕にも云はせて貰ひますと、僕は句
を味ひ、感じた後に時々もう一度その句を空
間に投げ出して新しく見直して見る癖があ
る。この句をさうして見ると、前書のことか

句に出てゐるか云ふと、別に田舎でなくとも
都會でもこうした句が生れる時があると思
ふ。少し温たかき素直なものであつて、その
中にしつかりとして作者の心を見ることが
出来る。前書を讀むに及んでは畠地の附近を
歩いてゐる作者の姿までが浮んで來る。この
句の表現力から云ふと、句材が新しい古いと
云ふことは要らぬと思ふ。(愚陀筆影)

川柳雜誌に描く事ではなからう。しかし
私はある自信があつて、これを路郎兄のもの
とへ寄るのである。

四條河原の芝居、其處にはむかし
のお國歌舞伎、芝居、かうした氣分に、四
條のはしから灯がひさつ見ゆる處である。
桃山の時代も、徳川の初期も、元録期
も京は決して、京阪電車や、ケーブルや、
ビルヂングに、ポットクされる處ではな
かつた。

幸ひに南座は外観頗る日本式である、
よしそれが椅子席であつても、よしそれ
がエレベーターであつても、南座は京の
南座である。
京の南座である限り、私は四條の橋詰
めに南座の前に、角引まはして、まんぢ
う屋さ、うごん屋のある事を悲しむ。
よしごん屋のイキサツがあつたにしろ、

京の南座である。
それは決して一松竹會社の専有してゐ
るものだと、のびヨケンから脱しなければ
ならない。

可なり立派な建物の前に、怪し氣な物
干があつて、所謂オムツの干したのが見
えるのは、京の美觀にオテレを加へるも
のである。

川柳にはなるだらうが、多く他國人の
入込む京には一種のチゾクである。

私は川柳といふものの上にも、かうし
た、うごんやまんぢう屋があると思ふ。
たゞさへ妙に品格を疑はれる川柳さ、そ
んなカタイヂからポットクしたくはない。
對社會の大きな問題の前には

「カタイヂ」
はダキすべきものである。
私はうごんや、まんぢう屋の肩も持た

ない、又松竹會社に同情もしない。
たゞ大阪の人として、京の街へ還入つて、
四條から東を觀た時、南座を毒し、京を
毒するのはイカンと思ふ者である。

東京の誰かのお邸の隅に小さなセンダ
ク屋が、頗るシヤクにさえて、立退なかつ
たさいふ話、三越の隣の床屋が、三越の
出火に依つて、見舞金を貰つた時、こ
ちから失火した時一文も出さないからこ
れは、受取らないと云つた。この二つの話
さ、南座のまんぢう屋さ、うごん屋さの
場合はたしかに違つてゐると思ふ。

「意地」
さいふものはサラリツク捨つべき時に
は捨てべき者である、私はこれをなと得
ない人は、その世間的と出世間的とを問は
ず、所謂カリヨウのない者さ斷言し得る。
私は此頃めつばう年をとつたさうして
この新しい昭和五年を迎へる時、お恥か
しいが五十一になつた。私は私の
「意地」
を捨てるに、何のミレンもないやうにな
つてしまつた。
よその話ではない。

川柳略語解

追加の一

西原柳雨

其後又少しばかり書留めて置いた分を御吹聴する。尤も間違ひがあつたら是非御垂示を願つておく。

下にゐるていふ禮でなしおかたじけ (天明)

おかたじけはおかたじけないの略、おかたじけなき鼻であらう。しらすたやうな禮は目上の人か目下の者に對していふ挨拶であるこの義であらう。

しらすたやうな禮は目上の人か目下の者に對していふ挨拶である (安永七)

しらすたはしらすの略、關ヶ原に破れた三成が民家に匿れ、下痢の爲に屢々上廁した時に、奉書紙で尻を拭ふたのが露見のもので終に捕はれたとある。されば石田も奉書なきを用ひずに鹿返しの白穂紙で拭ふ事に思ひ附かなんたは不注意であつたこの意である。

母ぢや人さらばこのぶこ舟へ乗り (安永八)

道樂息子がお定期通り銚子邊へ暫く窮命をいひ渡され、船にて出發する時に、涙ながら見送つてゐる母に向つて、ぢやお母さんおさらばだに存外平氣で出て行くさま、のぶこはのぶこい奴の略であらうと思はる。

田樂をくはへてけつをよせに出る (安永)

きつねをきつこ省略するの例は獨り川柳に限らぬのであるが、きつねは又けつねこ詠り、更にけつこ省略されたので眞崎の御出狐を咏んだ句である。

味噌麩で買ふは岡場の袖の梅 (天明)

岡はちがふせこ土手で巧者ぶり (天明)

岡も岡場も云ふ迄もなく岡場所の省略であるが、甲は吉原の名物として知られたる醉覺まし藥の袖の梅に對して、岡場所では石花菜位で間に合はせるこの意、乙は吉原は萬事岡場所には違ふから氣を附けねへこ笑はれるよなき案内に立つた利いた風が半可を振替くこの義である。

寢たやうに見せて御しんがもめかへり (明和五)

御しんは御新造の略かとも思はれる、併し御新造といつても差支なき場所、殊更に御しんがこ出たところから見れば少しく疑を生ずる、各位の御考究を仰ぐ。

それせんべるさきがりんすく (安永九)

此句も不明、大駄券解を述べれば、ソレ善兵衛さのきはごん(殿)の略にて、禿なきが二階の口から若い者を呼んで、臺の物の殺を下けさせる場合ではあるまいかと思ふ。

龍人は鳶に天窓をひつかれ (天保)

龍宮の人を龍人と呼ぶ用例あるか、但しは川柳家の創作語かその邊のことは知らぬが、龍宮城に仕へる人々は皆天窓の上に鯛だの、比目魚だの、章魚だの鳶にさらはれさうなものを載つてゐるこの意である。

新刊・川柳使命會編・

同人
林田馬行・井上刀三・黒木鶴足
河野春魚・塚崎松郎

雑音に生く

同人及會員一ヶ
年半の句を採録

定價壹圓

四六判・高雅
清新なる裝幀
天金・帶付

1930年の川
柳の方向を指示
せる新鋭句集！
柳壇嘗つて見ざ
る良心的句集！

今日の川柳は今日の實生活を表現したものでありたいと思ふ川柳家が如何に人生
を歩んでゐるか、人間と自然を見るレンズが如何に精巧であるか、今日の川柳
家の價値を決定する。

私達の句集は蓋しこの試練を目指して生れたものである。若しも本句集の一句に
でも、眞に人間味のある純眞なる川柳を見出して下さつたならばそれはひゞり私
達のみの喜びではないと信ずる。

私達の句集を買つて下さる知己に對して私達は誠意ある感謝を捧げたいと思ふ。

發行所

大阪市東淀川區中津濱通二丁目七十七番地

川柳使命會

◇ 川柳塔の足跡 ◇

川柳雜誌第一號から第七十一號(六卷十二號)迄掲載の川柳塔(同人社友吟)の發表句數表をつくつてみた。(朝田新水)

(カッコ内は句數)

- 二柳子(四〇四) 柳路(三七二) 松郎(三五〇) 馬行(二七九) 莢豆(二七三) かほる(二二〇) 萬よし(一九二) 輝翠(一八九) 駒人(一八二) 雅幽(一六一) 刀三(一六〇) 濁水(一六〇) 助六(一五三) 一聲改朝陽(一四〇) 琴人(一四〇) 鮎美(一三五) 町二(一二三) 新水(一二〇) 飯山(一一八) 翠峰(一一六) 霞乃(一一四) 眠聲(一一二) 杏三(一〇四) 雨町(九七) 徹底郎(九六) 三笑(九二) 光路(八八) 啞人(八七) 素人(八六) 亂耽(八五) 芦穂(八四) ひろし(八二) 古城山(七二) 鐵洲(六八) 二南(六六) 彩霞(六五) 京郎(六五) 舟々(六三) 花童子(六一) 革郎(五七) 双葉子(五五) 右大臣改冷刀(五四) 零骨(五三) 松雨(五二) 史風(五〇)



一路集

(募集句)

元旦 森 東魚選

日記帳元旦だけは誰もつけ 桃源
 拍手の音に元旦明けかゝり 一風
 元旦に水引を取る下駄をはき 山月
 圓タクに元旦の泥かけられて 桂枝
 子の欲を元旦へ皆片付ける 八歩
 元旦の牧師の娘屠蘇に酔ひ 垢ん坊
 元旦を待つ鬢が出来 髭か剃れ 文芳
 元旦の曠着に路地をせまく出る 鐵洲
 初刷が来て元旦の朝さなり 幻草
 元旦に集配人の愚痴が出る 湖舟
 元旦に母も桃色程は呑み 汀月
 元旦へ子はまつさき年齒を云ひ 吐句坊
 物を買ふ段に元旦ちこ困り 碧水
 汚したくない元旦此氣持 青水
 元旦だまるくく老母云ひ 蚊郎
 散髪の方が歸るご春になり 英賀夫

御元旦大日本の空の色 雪峰
 一年の計に元旦酔ひつづぶれ 市公
 元旦に下駄を抱けて子供起き 今雨
 朝酔ふたまんま元旦暮れてゆく 一舟
 元旦の陽は紫に富士を置き 勝二
 病牀へ今日元旦の日が當り 無鬼
 元旦へ寝る數を言う女親 笑山
 元旦のまた明けきらぬ伊勢へ 孤愁
 元旦に兄珍らしく陽を拜み 狂雨
 君が代は千代に八千代にお元日 大黃
 元旦の静さに寺の鐘を聞く 空山
 元旦に元旦らし。雪もよし 二柳子
 町幅をはつきり見せたお元日 清路
 食つてまた寝ろ元旦起される 太路
 元旦の顔で子供等起きて来る 四方路
 麥角

打揃ふ足袋の白さのお元日
 白い障子へ元日こいふ陽がさし
 僕今朝はこだけにならぬ指で起き
 元日に喧嘩をしてた奴に會ひ
 他所へ来た氣持ち静かなお元日
 元日の朝日へ祖父は立ちつゞけ
 禮服が出来て元日らしく起き
 厄こいふ身に元日の麗さ
 元日の霜を尊いものに見る
 元日の電車に別な揺れ心地
 同

海老

いかめしい顔で伊勢海老賣る也
 三寶を飛び越わさうな海老の顔
 海老フライくの字のまゝに揚揚
 折詰の海老髭だけがはみ出て居
 海老の皮だけが残つた茶碗蒸し
 海老の鬚髭を交へてささやけり
 火が消れた炬燵へ海老の型で寝
 伊勢海老のさつしり髭髭を取り
 おかがみへ海老わらな髭を立て
 飾海老色よく障子旭があたる
 押鮮を彩る海老のけちにすぎ
 てんぶらに味大きい海老に見ぬ
 朝市へまだあきらめぬ海老は生生
 海老腰で無事にひこひこ舞舞ひ納め

山茶花 山綫堂 青果 柳影 冷々子 沐天 大夢子 光路 芦穂 同

麻生葭乃選

出養生小海老なんぞを釣釣て来る
 生きてゐる海老が嬉嬉と都會の兒
 伊勢海老の色塗膳のあでやかさ
 臺所で生きてる海老を子が見見
 海老フライここななくの時下相場
 松の内海老に守衛を申しつつけ
 花嫁は海老へ怖怖さの手がふるへ
 値をきいてもう一度兎兎皿皿の海老
 海老の髭こはく猫の髭か来る
 車海老今日の値段を驚驚かれ
 出前持海老の頭を取りなれて
 海老だけさ指せば梅月値が上り
 一生を腰も伸ば伸ばさず飾海老
 トネルの型で伊勢海老跳跳ねね峰

白眼子 嘉月 鯉友 花夢 失名 朝日 光路 光哉 東魚 同

- (一) 緑之助(四九) 美の作(四八) 柳骨(四八)
- (二) 一洲(四七) 桐郎(四六) 千代(二三)
- (三) 普門(三六) 一徹(三四) 愚院(三四)
- (四) 悟郎(三三) 雪緒(三〇) 双柳(二九) 冷々子(二九)
- (五) 燕柳(二七) たけし(二六)
- (六) 柳陽(一九) 笑太郎(一九) 放馬(一八)
- (七) 仙坊(一八) 三猿堂(一七) 市公(一七)
- (八) 敏郎(一七) 白鷺(一六) 圓角(一四) 多聞(二三)
- (九) 雪峰(二三) 閑生(二三) 洲馬(二二)
- (一〇) 銀砂子(二二) 桂風(二二) 光太樓(一一)
- (一一) 貴山(一一) 夜調(一一) 源坊(一一)
- (一二) 柳一路(一〇) 彦造(九) 炭車(九)
- (一三) 黙闇(八) 靜雲(八) 雷相(八) 加香(八)
- (一四) 光哉(八) 耕水(八) 飛水(七) 幸堂(七)
- (一五) 露太樓(六) めかく子(六) 月兎(五)
- (一六) 梢雨(五) テルホ(五) 光風(五) 翠夢(四)
- (一七) 孤舟(四) 文蝶(四) 稔(四) 汀柳(四)
- (一八) 耕鹽(三) 藤園改好古(三) 青砂郎(三)
- (一九) 久水(三) 剛山(二) 曼平(二) 桂扇(二)
- (二〇) 五輪(二) 風人(二) 里十九(二)

合計六千八百〇八句 人員百一十一名

移 轉

中野柳陽氏は滿洲開原大和街二〇へ

改 號

河合素郎氏は玄人、大高子其氏は鬼堂、藤岡青果氏は晴風

正 誤

前號近作柳標「改めて主人の手前誘ひに來」平八とあるは一舟の句

◇川柳雜誌投句用箋

本社制規の投句用箋が出来ました。左の價格でお頒ち致します。なるべく此用箋を御使用下さい。

◇百枚綴一冊 價 金拾參錢

▼御申込は本社事務所宛。

(一錢切手代用不苦)

新 誌 友

(四年十二月十五日まで)

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友として、ここに芳名を掲載します。何卒此際新讀者を御勧誘下される様にお願ひ申します。御紹介下される方には「川柳雜誌」の近刊を見本さして差上ますから御申込下さい。(二冊子)

長谷川可村(楳元紋太) 都藤冷笑(梅田支部) 梅村道男(麻生路郎) 古谷金喜(西村山月) 小池芳朗、江上美南史(安井ひろし) 福

緋緘の伊勢海老今は伏したまま
辨當のメニューに書き海老は海老
御笑納あれご伊勢海老社に届き
伊勢海老を初荷くご置いて去に
海老フライ値か氣味ながら食べ
天井さいはれて海老の哀れなす
身を扱いた海老正月を賑はらず
赤い尾があつて天麩海老と知る

指

○濁 水
親指は小指のここで酔ひつづれ
頼信紙二度敷へた指に合ひ
若旦那指角力だけ強いなり
銀婚へ小指のきすの 話も出
指さゝれ泰然と行く低能兒
指に塗む土が氣になる都行き
タイピスト或る日指紋をさ見
すゝきごごつかんだ虫に指を切る
桃割の指の丸さも處女らしく
潔癖がミミズの指で飯を喰ひ
人前で隠す氣になる指があり
指で丸啞は小使せびつてる
後ろ指さゝれる父を持つ 弱身
三に九を足せば子供は指を見る
突指をしてからキヤツチと落し
店は暇丁稚指力力なき初め
雑音の中の 話に指を出し
年取つた事もはつきり指のしわ

圓 角 光 路 朝 日 沐 天 空 風 香 仙 敏 郎 碧 水
選 孤 愁 四 方 路 秋 甫 高 垣 町 丁 路 耶 空 山 垢 尼 坊 無 鬼 山 茶 花 憲 太 圓 角 無 名 氏 孤 愁 太 郎 坊 碧 水 雪 峰 二 柳 子 清 路

中 見 澤 光 濁 水 共 選

白魚の指にダイヤの目立つなり
内職の指へ遺品ご云ふ光り
陽にかざす指に若さの燃わても
口紅を溶かした指に灯がさもり
瓊指巧くかくして見合ひ 濟み
繼つ子ををりく泣かす指の先
指先に秋の深さを 首肯かれ
合性も良い三仲人 指を折り
給料日近く月賦しい指を持ち
鬼さ呼ぶ刑事淋しい指をあて
製材所際さいごこへ指をあて
地圖擴げ指で迷ひの道を聞き
此の指をあのこうと茶の稽古
入口の指をたよりて事わ かり
子の指を讀ませて菓子を分け
二 點 句
凍傷の丁稚雜巾つまみ出し
迷宮に入つたを指紋二び起し
大道の指輪に姉も引つかゝり
英賀夫 さだを 花 夢 湖 山 草 石 菊 路 一 舟 豆 秋 青 蛙 沐 天 同 山 月 同 一念坊 悟 空 公 二 冷々子 青 柳

指さして記念寫眞の父見つけ
 病上り指先じつこながめてる
 製材所きわさい處へ指を當て
 苦勞した話し節たつ指を見せ
 吊革の指へこもかく光つてる
 タイピストあるだけの指皆使ひ
 白魚の指は失業苦を知らず
 今日も又インキの染るペンのを
 指先きの繻帶口に手傳はせ
 指先きの繻帶口に手傳はせ
 氣味悪く指で撮んでさし
 道知るベ昔の儘の指でさし
 氣安さは親指出して家かこ來
 指の利く日本人にホーク持ち
 銘仙へ縫ふ妻の指ひつかゝり
 突指へ暫しミットがほつこかれ
 その指の値打ち指輪の價だけ
 指折つてるは何やら考へる
 指のさす方へ見學また動き
 招く手の指きつちりご揃へられ
 これしきものにもこ思ふ指の
 はつしきり言はず何ぞ指で書き
 年頃は指の太いも惱みなり
 あや取りの指面白く女の子
 隠されぬ指へ紺屋の色が出る
 母指をくはへるほぎに子はず
 御佛指を揃へておはします
 一本の指の傷にも不自由がり
 なつかしい友の手紙は指で切り
 指更に高價なものを要求す
 温い人差し指に叩頭をする

赤笑 英郎 沐天 没食子 無名 大黃 連峰 失名 山一 茶花 孤愁 圓角 鯉友 波計 陽喜亭 香仙 太路 悟空 冷々子 耕民 無鬼 一柳 桂枝 青果 空山 今雨 無名 市公 垢坊

この指も別な心のまゝ動き
 突き指へチームまゝ寄つて來る
 無言のまゝ指だけでうなづいて
 親に似た娘の指の短かすぎ
 日曜の犬工したゝか指を打ち
 桐火鉢には恥しい太い指
 キットよご指切りして可愛い
 ザク／＼と指サック抜く夜中
 指先で撫で／＼鬚は剃れて行き
 達筆に見惚れて指で書いてる
 握りずし小まめに動く指で出來
 指角力妓無慙な聲を立來
 頼信紙三度數へた指にあひ
 父の指靡りしめてる子の安堵
 盤面へ冬が來てゐる石の冷々

太藝者思ふたよりも細い指
 指先が物言ふ如し斷末魔
 指サック忘れて歸へる仕舞風呂
 試しに入れた指輪がぬきこ
 掌へ指で書く字のはかざらず
 親指を一人が出せば皆黙り
 宿命に五本の指の働きて
 指に物言はせて高座おそれ入り
 指先きで無理に押込む奇應丸
 指先きはあぶなし子供教へられ

秀逸

土いぢる指に大地の親しさよ
 苦勞人指の太さへ嫁をほめ
 指だけを火鉢に翳すつゝまじさ
 (拙吟)鈍くさい指で身元紙幣
 おはじきの母に負けない指さ

清路 二柳子 花夢 同菊路 同碧水 同突支坊 同四方路 同白眼子 同波計 冷々子 公二 太路 勝二 三絃堂 鐵洲 山名 山茶花 二柳子 凡句郎 市公 空山 光路 同

賀正

一月元旦

大阪市東區安土町二丁目

和正堂

電話本町一〇四六番
 振替大阪九一七五番

色紙組合特提

組合三十枚 六十錢

送料 一組十二錢

三百組限り

一月五日ヨリ末日迄

麻生路郎氏著

吉岡鳥平氏挿繪
柴谷柴舟氏挿繪

四六版・三九一頁
美裝函入・挿繪六十葉

川柳漫談

定價金壹圓五拾錢
送料金拾貳錢

本書の内容 ▼ 川柳漫談

(臍の緒、盲人の徽章、蛙、夫婦喧嘩の解剖、都會地獄、君も僕も死ぬ話、レディーメイドの書置、戀を追ふ一人者、指切、鼠盗人、女の三十、賽銭、重役、フアブルの糞の外交、幽霊の靴、近眼の微笑、傘の行衛、猫の寫眞、愛の巢、保険屋と新聞屋、質趣味、床下の佛像、無口附貸の犬、鼻の修業、なりさがり魂、校長さん、煙草、私の墓) ▼ 川柳染ちがひ ▼ ト音前の大阪見物

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳 累卵の遊

内容概目

川柳 漫畫 累卵の遊

日月は輝く

大衆と共に

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入 定價一圓 (送料拾錢)

著者のサイン御希望の方はその旨附記して御注文ありたし

大阪城西區千本通五番
大阪替五八五番

賣捌所 不朽洞



蠻童

名古屋 國枝史郎

六七才頃の私は大變な蠻童でした。つまり餓鬼大將だつたのです。遊び友達をいじめてばかりるたやうです。その頃私は信州の中野町さいふ所にゐました。箱山さいふ山があり、その山を越すに遊、安代、地獄谷、湯田中なさいふ温泉町へ行くことが出来たのを覚えて居ます。箱山はほんの小さな山で、玩具を想はせるものですが、その山の頂にある松の型が天狗に見え、その天狗を二階から眺めては小供らしい自由の空想に耽つたことを覚えて居ります。

松の樹

大阪 鍋平朝臣

もうそれは三十幾年か昔のお話です。

六七歳頃の思出

——本誌第七卷に因みて——

私の家は大阪天満の真中にありますが、近處に一人の小役者が住つてゐました。

その子はたしか本名を福太郎さいひ、飛雀？の弟子で藝名をたしか飛昇とか呼ぶ女形でしたが、例によつて眉を剃落さして、いつも長い袖の着物をソロリさ着てるるさまは、まるで女の兒見たやうでした。私はこの子よりは二つ三つ年下でしたが、何分によんちや者だつたので、随分この子をいぢめたりしました。今も生きてゐたら或は道頓堀で一枚看板の名優？になつてゐるかも知れませんが、不幸若死してしまひました。その子の頭にはよく瘡が出来たりしてゐましたが、あまり友達がなかつたせいかな。

「ほん／＼わてもよせにくなはれ」

さいいつてよく私達のところへもやつて来ました。しかし私等のやんちや連中は又しても。

「瘡出来八幡、芋八幡」

なんかミ譯のわからないこみをいつては

やし立てゝは石を投げたりしていぢめました。するに袴を前だけ半分にしたやうな前垂をしたその子の親が出て来ては

「ほん／＼、あんさんは御大家のほん／＼、うちの子は河原乞食。そないにいぢめんさ、うちの福たんさも遊んだつこくなはれや……」

さいいつたりしました。

いつの頃この小俳優は亡くなつたかはよくは覚えてゐませんが、すつこ後——私の中學時代にはもうたしかに世にゐなかつたさ見ね、その名を染めた華かな職が二階の日覆に早變りしてヒラ／＼はためてゐるのを見てそらに「福たん」の昔を想ひ出したものでした。

私がかれから書かうと思ふ話はこの小俳優が顧問として關係してゐたか、さうかは、何分古いこみなのでよくは思ひ出されませんが、少々位は縁がながれてゐるさ覚えてゐます。

その當時、私共は近所のある家で芝居

ごつこをしてよく遊びました。外題はいつも獨參湯の忠臣蔵だつたらしく思はれます。何分私が一番年少者で、しかもまだ本物の芝居を見たことがないことを皆が知つてゐるので

「ほんはまだちやりほや」

「さいつてもそれは小道具方——がありました。私はいつも庭の櫻の實(まだそのころは私の庭に大きな山櫻や牡丹櫻が数株もありました)をそつこ拾ひ集めるさいふよりはかち落して、それを潰して判官切腹用の血を製造せねばなりませんでした。しかし私にはそれが内々不平で不平で堪まりません。最年長者の座頭格が幸ひ私の従兄なので(その男は今且市の市長として納まつてゐます)

「兄さん、あてにもなんぞわゝ役させてゐな……」

かう私は従兄に甘へていつもせがみました。しかし

「まだ早い〜」

さいつて採用されません。それである日たうさう私は「何かの役に使つてくれないさ櫻ん坊をまつて来てやらぬ」ミダダけてやりました。さあ、これにはさすがの判官殿も、由良之助殿も城明渡し以上

その日から私さ、お向ひの目玉の二郎さんさいつのが名題?に昇進して、何かの役に出して貰へることにになりました。やつこ仲間入りの望みが叶つた私共二人の歡喜のさまを一つ想像して見て下さい。二人は手をまつて躍り上つて喜び合ひました。私達の初お目見は、五段目山崎街道の場なのだそうです。

「さあ、あんたは「松の樹」やで、こゝへ立つて、かう右の手を上げて、左の手をかうさけるのや……」

「それから、あんたは「石地藏」や、さあこゝへ立つて右の手で輪をこしらへて、左の手はかう横にするのんや……」

それから、従兄はかう加へて申しました。

「これは二役共、五段目には一番大事な大役なんやで……」

しかし私は早速抗議を申立てました。

「兄さん、そないに長い間手あけてたらだるいやないか?」

「そら時々右さ左さ手をあけかへたらわゝがな、その方が枝ぶりが變つておもしろい」

かうして何も知らない、あはれな私達二人のお坊ちゃん、まなま書割代用?大道具代りを仰せつけられ、正直に兩

手をシゲナルのやうにあけさけばかりさせられてゐました。

しかしいつまでたつても、松の木さ石地藏以外にはなれませんので、二人で相談して時々その役を交換することにしました。ある時、松の木はお隣の石地藏に

「なあ二郎さん、いべんでもわゝよつて猪になつたいなあ……」

さいつて、ウンミ一つ大きく伸びをして枝振を美事にしました。するさ、石地藏は十八番の大目玉をむいて、長い舌をペロリと出しました(奮作補筆)

美しい悩み

芦屋 小出 檜 重

六七才の頃に私は永い間目を病んで赤いモミのきれで涙を拭つてゐた事を思ひ出す。頗る憂鬱だつた。

外出するのに表付きの下駄を履かされたのは恥かしくてたまらない事だつた。

歸るまで私の機嫌は悪かつた。

大寶寺町の夜店さ堺筋の心學道話は私の一番の楽しみな場所だつた。その心學道話の看板は今も尚ほ堺筋に存在してゐる。

小學校へ入學の當時、宗右衛門町あたりから通つてゐた女の子が一人、美しく

惱しかつた。その浴衣は紺地に白ぬきの上り藤下り藤の模様だつた事もはつきり記憶する。藝妓の子だつたらしい。

孤 兒

金澤 窪田銀波樓

私は五歳にして父を失ひ、六歳にして母に先立たれた孤兒であります。然もその頃の顔はなさ、死さいふものを知らねば何等の悲喜もなかつたものです。七歳で小學校に入つたが、家人が何か氣に入らぬ事でも云ふミテコでも動かばこそ、登校を肯んぜずして乳母を弱らせたものでした。懐かしい思ひ出です。

葬式をお祭りにしてハンヤギ

宵やまぢ

甲府 篠原春雨

明治十九年のことです。七歳の春初等科六級の生徒になりました。讀本は「天は高く地は廣し、鳥飛ぶ虫鳴く、晴れたる朝、曇れる夜」——さいふのだつた記憶します。

甲府の柳町さいふ目貫きの塲所で、父

は小間物荒物等を營業さし、祖父は長唄の師匠をしてゐました。自然「羽根のかわら」や「明けの鐘」ぐらゐは唄ひもし大きな三味線を拘ねたものでした。だから普通の商家と異つて、藝人の出入が多く、幼い女の子や唐棧づくめの人達で毎日賑やかな生活をしてゐた事が目の底に残つてゐます。賣出をししたことも、二階座敷で唄のお浚ひがあつて、茶番の催しで大笑ひしたことも覺てゐます。

いまの自分が、兎角江戸文學を愛好するもの、當時の感化に依るころが多からうと思はれます。殊に演劇に親しんだことは、現代の少青年がキネマに馴らされるより、一層熾烈でありました。然し後年、演藝係りにして新聞社の飯を喰はふ、なぞは夢にも思ひませんでした。天は高く地は廣し宵やまぢ

芥子坊主

大連 大島濤明

私は七才から學校に上りましたが、その頃私共の用舎では男の子は頭の中程に蛇の目型に毛を立て、俗に芥子坊主と言つてゐた。學校に行つて見る機械刈り(五分刈り)にした者が大部來てゐたので何だか自分の芥子坊主が怪かしい様に感

じたので早速家に歸つて刈つて貰つた。所が父親が櫛ミ缺みで刈つたので段々が出来たので却つてお可笑しなこゝになつたことを記憶してゐます。

振り返へる六七才が遠過ぎて

竹のこゝかれ

朝鮮 蛭子省二

私の一番幼い記憶では、あの濃美の大震——五才——に母に連れられ、従姉の裏の竹藪に遁れ、家が段々傾くをみてゐた事で、此の体験は東京で罹災した時にも、決して人並みの騒ぎはしなかつた。地震に對する度胸を常に持つやうになつた。否、私の運命觀の一つなのである。

私は年弱であるから横濱の小學へ八ツから通つた。六七歳にまたがつて野岡にゐたようだ。此家にも大きな藪があつて隣りの小僧さんが寢小便をした布團を背負せられ、竹にくゝられてゐたのが、ヤハリ濃美震災の聯想から、はつきりして居る。東京でも横にヤブがあつた。今の住宅にもヤブがある。私の修身上のモットウは「竹のこゝかれ」である。庭で蛇が蛙を呑むたのを、尻尾からしごいたら、蛙が飛出した。あそこで蛇は殺された。此の事以來蛇嫌ひになつて、蛇

をみるに脳貧血を起す。先年京橋畔で蛇料理を食つて、大に征服したつもりである。

父の暮かたきであつたらう、南京豆を五つ位袂に入れては遊びにくる「南京豆のおぢさん」ミ呼んで、誰よりも好きだつた。

寺小屋にいつたが、其の事情に就て記憶がうすい。吐月峰(ハイフキで有名)の名を覺ひてゐて、大きな寺だと思つて居た。學生時代に一度いつてソビの場所であつたのに驚いた。

古川柳に「阿部川で馬は黄粉を浴びてゆき」の阿部川餅の前の橋は橋賃をまつてゐた様だ。釣が禁止されてゐたものか私は竿をもつて一目散に逃げだした事があつた。イタヅラ坊主ではあつた。

阿部川の客へ坊主に馬つなぎ(附記)夫妻で餅屋へよつたが、此の名物は確かにうまい。鐵橋になつても附近の気分はよい。柳も残つて居る。○七靜岡阿部川(不明)、橋本邦三云ふ磨滅した店判を捺してきて居る。

アザの先生

金澤 安川久流美

六七歳の頃さへば、はつきり記憶も

ないが、尋常一年生の年でその頃十三であつたじき兄進に伴れられ村の小學校へ登校した。右だつたか左だつたかに二錢銅貨大のアザのあつた女の先生が受持ちまきまつた。それからもう三十年は過ぎた。頭の兄は俳號曉花ミ稱し、適齡の歳に夭折し、受持先生は郷里高松の海に溺死した(十二月二十五日)

當屋

八尾 福田山雨樓

僕の生れは現陸軍大臣宇垣一成閣下の郷里と同じく、岡山縣の或る山奥で瀧瀬村ミ云ふ所である。僕は三歳のまきこの生れ在所から同郡の西高月村大字牟佐へ養子になつて貰はれて行つたのださうである。其處では毎年陰曆十一月十五日より十六日迄郷社高藏神社に報賽新嘗の祭ミ云ふ遺風がある。それは我皇國朝廷に於て、皇祖皇宗に孝敬を盡させらるゝ報本反始の道ミして太古より傳はり來れる大嘗新嘗の御祭が、古へには下々まで行はれてゐたのでこれが今に至りても尙新嘗祭の遺風ミして繼承されてゐるのである。そして新嘗報賽の舊式はいさ嚴そかに奉務されるものであつて、其の饗宴の日(十一月十七日)には俗に「高藏の杵舞」

ミ稱する一種の舞を奏し、儀式が終つた後も二日間村人男女多人數集つて酒宴を開くのである。その新嘗祭に奉仕し杵舞の儀式を取行ふ家を毎年氏子から選定し之を當屋ミ稱する。恰度僕が七歳のまき僕の家がこれの當屋に選定されたので、當時の賑やかだつた印象が夢の國を迎るやうな淡い追憶の中に甦る。舞の次第に付ては手許に相當文献があるので詳述してもいいが、これは追憶ミ多少かけ離れたこまなので省略する。

「おこやからさんじました。おこやにやおはよううゑんでんさつてつかあしあい」

これが當屋の饗宴に村人を招待する爲めに、子供達か前々日に觸廻るまきの口上で、一軒々々言つて歩くのである。僕はそのまきまだ小さかつたので大きな子供について廻つたわけ、口上は述べられなかつたと思ふ。しかしこの榮譽ある儀式が自分の家で行はれるのだミ云ふ軽い誇りミ嬉しさミを抱いて村の隅から隅まで寒空の野道をついて廻つたものだ。方々の親戚からはさし／＼米俵を寄贈して來る。庭には俵の山が築かれた。酒樽の数がいくつミなく家の中に据置かれる。まるで戦のやうな賑やかさが自分の家を襲つてゐるのだ。やがて杵舞の日が迎へられた。僕は其の自家の内の何處

に居たのか、まるで自分の存在を無視されてあるほきに忙がしい鬱陶氣の中でまご／＼してゐたのであらうと思ふ。何しろ百人からの客人をよぶ爲めに、家中心が料理屋兼儀式場に充てられたのだからたまらない。眼がおさるやうな雑踏と喧騒のうち第一日は無事に暮れた。幼な心にも狂熱的な喜びを抱いて饗宴の第二日、第三日を迎へた。まるつきり養父母の邪魔をしてゐたことであつたらうと思ふ。

この古俗的新嘗祭の遺風は今も尙繼續されてゐることであらうと思ふが、國を出て郷土に疎音を續けてゐるので、存否の程確かでない。こうして華やかな追憶の裏に、いさも寂しい追想が痛く自分の頭をかすめる。それは養母が其後七年にして其の家を去り、僕が二十七歳のとき養父が此の世を去つたことである。

紙石版の追憶

松山 前田 五 健

あの頃は石版ミ石筆が學校用品の第一でした。

そしてみな石の黒いのへ枠のついたもので、若し三つ折六つ折れなごの紙石版でも持つて居たら級中でも相當の敬意を拂はれ幅が利いたものです。眞つ黒塗りの

の手習草紙ミ錠力筒の筆入れを風呂敷に包んで肩から斜めに背負ひ、走るごがらんがらんご鳴る通學姿です。何分四國の田舎ですから特別に總てが遅れて居た様です。

私の父は私をよく田宮流の撃劍道場へ連れて行きました。父ミ叩き合ふ人が父を叩いて「お面ッ」なんて云ふ無性に腹が立つて父が勝つて呉れ、ばいゝがミ小さい拳を握つたものです……父より大きなミ罫せり合ひになる父は足を外掛けにして對手を押し倒し、二つ程面を撃つたのが深く印象に残つて居ます。

或る日學校で紙石版を持つて居るM辯護士の子息昇さんミ私ミ喧嘩を初めました。原因は忘れましたが常に頭に残つて居たものミ見へ、父が道場をやつた足癖で昇さんを眞仰向けに倒しました。折わるく私の頭が對手の鼻へ當つたものですから恐ろしい鼻血になり、昇さんも見て居た友達連も私も青くなつて慌て出す。昇さんは泣き叫ぶ。先生が来る。小使さんが走る。双方の母親が来る。大變な騒ぎでした。

私の母は町内でも勢力のある辯護士さんの息子を傷つけたミ私を叱つたり心配したり結局私を連れてお詫びに行きました。……所が昇さんは奇麗な顔になつた。其の頃はまた珍らしい干葡萄のはいつた

パンを辯護士さんから貰ひまして「仲よくせにやいけん」ミ頭を撫で、呉れましたが、辯護士さんの關羽髯が其れはく恐ろしく目に映つたものでした。

其の日私の父は叱りもせず、翌日眼をさますミ枕元へ紙石版の六つ折が置いてありました——今はもう皆な故人で私だけ之れが書けるのみです。

刀と雨

東京 富士野鞍馬

「其處行く侍一寸待つて貰ひたい」これは幡隨院長兵衛の臺詞、この芝居の眞似が十八番で、誰にでも演つて見せた。

箆筒から祖父の刀や袴や陣笠なごを出して、友達を集めて、日覆を幕にして、その其處行く侍をやつた。いつも誰かが刀にさわつて血を出した。それでも泣かなかつた。

宵山に母に連れられ四條の人出にもまれて歸りに雨にあつた。京都ではお雛養のあごでお茶漬を喰べるミ雨にあふミ教へられてゐたので、母がその茶漬を喰べたことを知つてゐる私はそれだから雨にあつたのだミ信じてゐた。

教へた理屈でやりこめられる母

學齡未滿

大連 佐々木三福

六才以前の事は少しも記憶に無い。七才の四月であつた、昨日迄の遊び友達のAやBが今日から尋一として學校通ひである。自分もすつかり入學する氣になり子煩悩の母親も校長に頼んで入學さす積りであつたらしいが、田舎の校長さんは仲々物堅い。おそ生れの學齡未滿と言ふので入學が許されず、さんざ泣いて母親を手古摺らせた事を記憶してゐる。今好々爺として全世を送つてゐる當時の良校長O氏に會ふ度に此幼い思ひ出が浮ぶのである。

七才で泣いた涙がまだつきず

鳥の子

大阪 麻生路郎

私は廣島縣の尾道で生れ、生れて間もなく瀬戸内海の周圍六七里の島にあつた。それ、そこで大きくなつたのだ。

七つゝの時に生家に歸されましたが、もうしても歸るのはいやだ云つて、泣いて泣き止みませんでした。今秋の茶

屋にゐる兄が私を背負つて海岸の夕べを歩き廻つてゐましたが、さうしても泣き止みません。さうく閉口して再び里へやられました。その後も小學校へやる關係上、歸すことに骨折つたらしいが、八歳の時に、島の小學校へ通ひはじめました。そんなごてくのためには小學校で「アイウエオ」を習はず「いろは」も「をわかよたれ」のころから習ひはじめました。斯うした行き方がその後の私の生活について廻りました。

少年にかがやくは鯛か海の國

バレンの親仁

松山 岩本素人

僕の生れは京都。家業は手刷の木版印刷。木版を刷る時紙の裏からこする丸い平たい竹の皮で包んだものを、御存じでせう。あれをバレンいひます。あの竹の皮はおまん屋の皮に間に合はぬ。特別上等のキヅのないものを撰擇します。その竹の皮を賣りに来る親仁がこてもへうきんな男で、来るご半日位はおもろい事ばかり言ふて歸つて行きます。そのおつさんが僕の顔を見るに、何さかかきかからかいます。それに僕の方では「アホ」「コラ」「バカ」の三手を以て應酬する外戰術

を知らないので、いつでもこちらの旗色が悪い「坊んさん、あんたの鼻の下の筋をれ何んさす。岡蒸汽が通るのさすか」僕は鼻をすゝりながら「コラ、アホ、バカ」これでは太刀打がならん。一ぺん仕返しをしてやらうと常にも思つてゐました。

或日の事僕が外の遊びから歸つて来る。それに依つて皮屋のおつさん来てけつかる。そしてそのおつさんは尻を浮して、前の火鉢で煙草の火を付けやうとしてゐる。皮屋の尻は腰掛けから離れてゐる。時こそよし矣、僕はおつさんの尻の下へ忍び寄つて、そいつを腰掛けを抜き出してやつた。何んにも知らん皮屋のおつさん、火の付いた煙草を咬へておいぎを下ろした。おつさんは見事に尻餅を搦きました。さうご敵討つてやつた。をもしろかつた。

皮屋は尻を撫でて苦笑した。

電話でよんだ

おこつあん

大阪 高橋かほる

日曜には芝居へ連れて行くさかいに學校へ行きや。云ふ約束で嫌いな學校へ行つてました。私の七ツか八ツの頃芝居の歸りに今の松竹の事務所の傍に有ましたいづた云ふ料理屋の前で

箱々

長春中野柳陽

私「ここへはいりませう」
母「おこつあんこ一諸の時はいろいろな」
私「ほな電話でおこつあんこここへ来てもらつたらよろしひおまんねんがな」
暫らくして料理屋の二階へ父の顔が見へ、母の酌で父はいさごものんびりして居ました。母はひき口も呑みませんが……やつぱり嬉しそうでした。そして私は夫婦で好エもんなアーと思ひました。

かゞり竹

大阪長谷川一徹

六ヶ年の長い年期奉公を終へた乳母は私をその生家へ連れて行つた。蘆葺の小さい山添の家だつた。それでも裏には柿があか／＼と熟して居た。而してその幹には私の爲に特に作られた蔭り竹さへ立てかけられて居た。

私はその蔭り竹で柿を探つた事も忘れなしその味が如何だつたかは無論忘れたが、あの蔭り竹こそを作つて呉れて居たお伽話に出る正直さんをつくりのお婆の姿を感謝の念と共に覺へて居るご同時に乳母が直ぐ何處かへ遊びに出て、その姿を見せなくもつてしまつたあの時のわびしさは今もはつきり覚へて居る。乳母のせな逃て行くのを待つて呉れ

その頃は大型晩成の心算であつたのか記憶に残つて居るものにてマズ皆無云つてよい方ですが、唯一に朝の床を離れる時母が菊々云つて手を引つぱつて呉れたのかすかに遠い昔の夢の様におぼへて居ます。たまらない懐かしいものにして、母の健在をよろこびつゝ。

弱虫、泣虫の

頃を憶ふ

大阪藤里好古

自分の祖父は丹波山國隊の小隊長を勤めて来た云ふのが大變ミソであつた。自分は何の因果か、三歳の時より喘息で

今日でも随分親しくしてゐるが、心身共に弱虫で、幼稚園へ行つても教室の中迄もお祖母さんに附添つてもらはないう泣き出す云ふ仕末であつた。其時の園長であつた寺田女史に此春心齋橋の森永で會つた、此時分の事を話され、周囲の人々から笑はれた事があつた。此バア否老女史にも記憶されてゐる程、偉大なる弱虫であり、泣虫であつたのであ

る。
祖父は自分が此様な状態にある事が癪の一つで、よく父母達に當り散らしたものでした。其結果ロクに假名字も知らぬ此泣虫は毎日「文天祥正氣歌」の講義を聞かれる事となつて、オトナシクそれを教はられる事、お菓子も呉れず、遊びに出る事も許されなかつた。

かゝる慘憺たる生活裡にも、タツタ一つ楽しい事があつた。さうした風の吹き廻しか、あの長い難解な正氣歌を、スラ／＼と讀んだ目があつた。其時の祖父の眼には涙が光つてゐた。其ホービに書食後第五回内國勸業博覽會へ連れて行つてもらつて、あつちこつち珍らしいものを見せてもらひ嬉んで居つた。處が今の天王寺公會堂の邊にあつた冷蔵館？へ入つて其頃としては珍貴な製氷機の實演を見てゐるさ、館外に館内の空氣の冷温の相違でヒイ／＼と喘息が出て来た。サア困つた。スグ俵で急遽歸途に着いたが、今宮から天満へは一時間餘りかゝつた。其途次車の上ではヒイ／＼からヒユ／＼と愈々激しくなつて来た。そうするご祖父はイヤミ云ふ程自分の尻をツネつて、文天祥は七年も土牢に入つて居つても、嚴然としてゐた。病も氣の持ちやう一つじやつかりせいご小言云ひ／＼尻をツネるものだから、こんざは尻の方が氣になつ

て、ヒユ／＼の方は幾分苦痛を忘れたことがあつた。

自分はこゝろ兩三年固疾の喘息で臥床する毎に、此時の事が思ひ出され、讀書によつて氣分の轉運を計つて、かなり常病人に不似合な程大膽に生活してゐる。

兵隊さんの水入

大阪 安井ひろし

僕が六つの時だつた。長兄のお嫁取で用舎の事だから徹宵の騒ぎである。そこで私は出入の人に負はれて散財にお茶屋へ行つたのだそうだ。そのとき僕は驚のある可愛い「ほん／＼」でチャホヤされた事を覚えて居る。

父は大の敬神家で毎朝僕を「かたき馬」にのせては裏山の最上山にあるお稻荷さんへ詣つて「家内安全直熒延命」を唱へて居たのを子供心にうろ覚えにして居る。

七才の時、故郷から十里ばかりある姫路に住んで居る長兄に女の子が生れたので、母に連れられ、「おこた」をした川舟に乗つて龍野まで下り、そこから汽車で姫路に行つた。なんでも、元の城南校（いまの西校）の近くで、その川端に砂利

が積んであつて、暖い小春日にそこで母を遊んで居たが、玩具にして居た瀬戸物の兵隊さんの水入をこり落し、帽子の角をこはして、なんだかうらかなしい氣持になつた事を覚えて居る。この水入は僕が小學校時代にすつと使つてたように思ふて居る。

姫路にもいまではそうしたのききな砂利置場なき、もうなくなつてしまつた。

そのときの女の子は、はや三人の母になつて居る。

跛の仔猫

大阪 阿部 閑生

親猫が仔猫を銜へて来て母の膝の傍へ置き、すぐ引返して土間に降り、其處から斜めに掛け梯子を攀じ登つて屋根裏へ隠れたを見るに、亦白い仔猫を一つ銜へてひよ／＼と降りて來ます。

五度目に梯子の頂上に現はれた時、母が見兼ねて下で兩手を受けるに、白い仔猫が眞逆さまに掌を逸れて土間へ落ち片脚を傷めました。この跛の仔猫がそれから今日まですつと私の頭の一隅にびつこひき／＼生きて居ます。

負んぶして學校へ行く雪の道

叱られなかつたこと

大阪 橋本 二柳子

日本海に面した百餘戸ある村に生れたので、夏は砂遊び、水遊び、冬は圍爐裏で村の人々の雑談を聞く位。或る時は爐の中へころけて左手に熱湯をあびて二里餘の處へやけさまじないに母に背おはれて行つたこともある。雪の降つた日なき高下駄で雪道をふ／＼ころ手して往き來した様に思ふ。飴賣が面白い狂言や猥談、忠臣藏の五段目「鞆財布五十兩」の所を一寸眞似たりして一厘、二厘の飴棒を賣りに來たもので、今は一厘の飴棒は一錢位の値になつてゐる。怖いものは獅子舞や犬、父は嚴格な方で叱られることが度々あつた。村の前に小さな川があつて、村の人が洗ひものをする處になつてゐた。村は縣下での養蠶地ですから夏の川に養蠶用の細い網を水につけてあつたので女の人が木綿着を洗ふ様にしてもんでやつた處が大へんに叱られて、まだその上に私の家まできなりこまれたものですから歸りが怖くて夜になつても歸へられないものですから探して來られて漸く歸つたがこの時は叱られなかつた。

火事と喧嘩と祭り

大阪 松盛 琴人

六七才の頃を回想するに懐しい繪巻だ神田祭は幼な心にも誇を感じた、山車が並び横町から樽御輿が飛び出す、私は小さい萬燈を擔いで驅け廻つて迷子になり駄菓子のミジン棒を買つた多分警察のおぢさんだつたらふ六才。工學士でSさんは私を可愛がつて呉れた、Sさんは身體中刺青をして綺麗だつた、併し人には隠してゐた、元大工さんの俸であつた丈け喧嘩も早かつた。當時洋服は異人の様に見わた、其洋服のSさんが拳骨を固め、何をつボカ／＼と撲りつけ胸の透く様な卷舌の啖呵を切つて相手の度膽を抜いた事など覺てゐる。火事は江戸の華北風がビユウ／＼と吹く寒い晩の事だ三つばんだそれつ／＼許り出でSさん寝て居る私を起して表へ飛び出した。萬世橋まで来るに川向が盛んに燃へてゐる、火事と喧嘩の好きなSさんは本當に江戸子だ今でも思ふ。本郷の大火事は怖ろしかつた、眞書間何軒も焼いたのでも知れる、逃げける私達の後から大きな火の山が崩れ風に煽られ波の様に乗ふて来る。人に揉まれ逃げける内私だけ見知りのおぢさんに預

けられ小石川へ避難した、小石川初音町は以前銘酒屋矢場が軒を並べてゐる、綺麗な姐さんが客を呼ぶ子心にも變な所だと思つた。私の連れて來られたのは揚弓店で室内眞深い所に小的があつて矢が當るミカチンミ音がして「當りッ」ミか何ミか姐さんの好い聲がする、重藤の弓に小矢をつがへて射るので私はこても面白いので夢中で矢を放つて遊んでゐた。懐中火事が起るに直ぐ父が大きな腹巻を私に巻き付けた、多分財産の全部なのだからで蛇が蛙を呑んだやうに重たい。六ちゃんこれなあに、何んか知らないや、出してお見せよ、嫌だ、若し其時私が今十才も年齢が大きかつたらこれでは濟まなかつたらふ。

童心にかへれば父ミ母戀し

自然兒

大阪 松丘 町二

停車場へ六里といふ山の中に育つた私は、十三の春まで海も汽車もみたこまがなかつた。だから六七歳の頃は——桑の實に唇を染め、雑魚を追うて小川へはまき、女の子ミ相撲をこつた。木登りがうまくて、殊に竹箆の竹から竹へ、その彈力を利用して猿のやうに傳ふこまが得意

六八

だつた。(併しこれは記憶の誤りで或はもう少し大きくなつてゐたかも知れぬ)そしてその頃の習慣で、男の子は皆九つ位まで頭を鬘粟坊主に仕立て、貰つてゐた。頭はいゝ方で小學校へ行くまでに假名文字全部覺得、住所姓名を漢字で書いた。あの頃母の生家へ送つた手紙が今でも保存してある筈だ。よく病氣して醫藥に親しんだ。子供の癖に何故か藥が好きだつた。殊に水藥が好きだつた。犬ミ巡査が怖く、火花が好きだつた。母親が厳しく父親が寛大だつた。食物では團子の味噌をうまいと思つてゐた。

先生へお辭儀覺けた村の道

河豚と傷痕

島根 伊藤 綠之助

夏の夕方だつたと思ふ。井戸端で母は河豚の料理をしてゐた。私は組上の河豚を物珍らしく見つめてゐた。その眞黒な皮、そして白いその内臓物みたいなやつ……私の好奇心は湧き立つた。

私はその黒い皮が手に取つて見たくなつたであらう。突如、手を差し出して河豚の皮を押した時既に既に母の持つ庖丁はスタートを切つてゐたのだ。河豚の皮はかなり切れかねるから、その時の庖丁

の勢は鋭かつた。それは私が六七才の頃のことだつたと思ふ。痛かつたのか、痛くなかつたのか、その時の感じは思ひ出せない。泣き乍ら縋帯を見てゐたことをうすら／＼に覺てゐる位なものだ。たゞ残つてゐるものは永久に消ないであらう、傷痕の一すじである。

傷痕の大きさそれもなつかしく

浪花節

別府 小川三猿堂

其の頃廣島に居ました。短氣な親父が死んだ母が日課の様に喧嘩をして居た様です。親父に悪い癖があつて喧嘩の終りには母の衣類を持出して叮嚀に缺て摘み切つて泉水に投込んで居た事を覺へてます。千日前云ふ盛場に汚い活動館があつて二階からです。隣の仁○加が壁の破れから見られる云ふ至極便利な小屋で、有名な松之助が大石良雄に扮して大きな目をむいたのを見たのも其の頃でした。

何んか云ふ觀商場の中に榮座云ふ狸でも出さうな寄席があつて小圓、奈良丸の浪花節を下足共七錢で聞いたものです。云つても其の當時の私には浪花節なる物皆目面白くなく只親父が其のたびお

茶菓子を買つてくれるのでそれを樂しみにいつたものです。今もつて浪花節活動が飯よりも好きなものもひこへに親父のおかけと思ひ、その恩は山よりも高く感謝して居ます。

両親の愛撫の中に育てられ

吹雪の電柱

平塚 酒井 駒人

東京で一商賣する氣の父は私を、母は弟を背負ひ、雪深い信濃國をあこにしたのは私が七ツの時でした。丁度其日は吹雪で小野驛まで行く途中の電柱がすれ違ふ度に、ジーツミ鳴つていました、毎年冬になり雪が降るこ、其頃が思い出され、きつこ電柱に耳を傾けます。

暮れるのが悲しい

近江 若井 たけし

暮れるのがいちばん悲しかつた。だから夜が明けるこ何かしきりに歌つたものである。

子等の目はたゞはてしなきパラダイス

暗い光

京都 清水 光風

僕の六七才の頃はからだにクサが出来て外へ遊びに行けなかつた。或日の夕暮隣の外へ遊びに行けなかつた。或日の夕暮隣の末チャンが「光一チャン遊ばか」こいつて來たけれご僕はからだ工合悪いので遊びに行けなかつた。母が「光一チャンはアンバイが悪いよつてまた今度遊びまつさ」こいつたら、末チャンはさびしさうな顔をしてゐた。ランプが暗い光をたゞよわしてゐた。僕は縁先に坐つて暮れゆく空をながめてゐた。僕はかなしくなつたので母の膝へ泣き伏した。かきでは末チャンやほかの子供がたのしさうに遊ぶ聲がきこわてゐた。

腕白時代

神戸 西村 市公

六七才の頃は父の病苦も知らず腕白を繰返へしたものです。一日に下駄の三足も割つて歸つたのも其の時分の事でした。こいふのは自分の下駄を二つまで割つたその上に貧乏な家庭の事こてもう穿くものがなくなつたので今度は母のをそつこ借りて出たのですが一溜りもなく壞れて

しまつたのでした。これなごはその一端に過ぎませんが何こいつても此の時代としては腕白な事ばかりが記憶に残つてゐます。又思ひ出さなつてゐます。

自分が六七才の子供の父になつた今日黙つて見てゐてくれた當時の親の心を有難く思つてゐます。又六七才迄育てるこいふ事の至難である事を今まさしく見せつけられてゐます。

拜啓がせがまれてから講にかわり

カクレンボ

大阪 木山 靑砂郎

母より先に風呂を出た僕はカクレる場所を考へた。そうして小さな躰は脱衣箱の中に後ろ向けに這ひ込む勢よく蓋を閉めた。三分、五分息を殺して考へてゐるみやがて母らしい聲で激しく僕を呼んでゐる。僕の好奇心はいやが上にも高かまつて尙靜かにしてゐる。その聲も消へてしまつた、多分歸つて了つたのだらう。急に淋しくなつた僕は這ひ出そうとする。これは失敗、あまり激しく戸を閉めたものだから錠が掛つてゐるではないか。僕は堪らなく哀しくなつて箱の中で大聲を上げて泣き出して了つた。漸く番臺の人達から引出された時は地獄で佛に逢つ

た様な子供心にも堪らない喜びの泪が頬を傳つてゐた。そんな事があつてからの僕は何時かカクレンボを恐ろしいものにして失つた。

カクレンボきらいな譯を笑われ

泣 虫

大阪 三輪 五輪

第一に體の弱かつた事。肺炎かたるをやつて東京市外の森ヶ崎に轉地をしたのも此の時分であつた。記憶して居る。そんな關係からか、外へ出て遊ぶ事が出来ずに家の中でかたるや將基等をして日を暮らして居た。

意氣地なしで泣虫なのは今でもそうであるが、其の頃は今より少しばかり頭が良かったと思ふ。こも角病氣勝ちで貧弱な體をしたあの時分の事を考へる。こ苦笑しい様な氣にもなる。

四十度へ氷か夜のあわたし

四條磧の夕涼み

大阪 石川 双葉子

私の家は四條通の近くにあつた。其のころの四條通り云へば、今の道幅の半分

もなかつた。兩側の軒並には日覆を廻らして、祇園石段下から御旅町までは、大阪の心齋橋の様々人出で、夏になる。四條大橋は夕涼みに來る人で一ぱいであつた。橋の上から見る。磧にはいろ／＼な見せ物があつて、私は父に連れられて橋の中間から下へ降りてゆく。魚釣屋が軒を並べてゐた。私は父が釣り上げる鮒やもろこしを手にとつて魚籠へ入れるのが無性に嬉しかつた。きれいな姉さん連中（今思ふに藝妓や舞妓で思つたと思ふ）が藪ぬけの入口では入るのをこぼんでゐた。私は父に平氣では入つた。薄暗い藪の細路を父につかまつて行く。急に突當つた。父はこわくない。云ひ乍ら、私をしつかに引きよせた。其の時私に父の行手に一ツ目の小僧。高入道が突立つてゐた。頭の上の方からは髪を亂した、舌出しのお化けがねめつけてゐるので、私はなんでこんな所へ來るのか分らなかつた。藪ぬけを出る。過ぎ横手の竹垣の中に、實物と同じ大きな木の馬が樂隊につれて、宙に廻轉してゐた。しばらく見てゐる。先つきの姉さん連れが、木馬に乗つて次ぎ／＼に廻はつて來る。私は藪ぬけをよ／＼せなかつた。姉さん連が木馬の上ではしやいでゐるので、父も二人で笑つてやつた。それから涼み角力の方へ行く。見物が黒山の様でこても見

られまいと思つてゐたが、こんき角力を取らうしい人が、着物を抱へて人込をかきわけてゐるのを見て、私之父は一所に ついては入つた。私は今の四條大橋に佇んでこんな事を思ひ浮べた。
藪ぬけをこぼんだ女馬に乗り

悲しい事ども

鳥取 中島 鐵洲

私の六七才には余りに距離はあるが今の私としては悲しい思ひ出である。
總てに恵まれない私はよく占ひに依つて 斷念もし慰めもしたものだ。

「君の六七才は大凶であつた短命なら ざれば親に縁なし」

是れは私の過去を判斷した時の言葉であるが勿論占ひではない、生年月日時の数に依る推命判斷的中率のよい判斷法だ母に死別したのが六七才である。
屏風が立てゝあつた事、人がゴチャ／＼來て居た以外母の死に對する何物も残つて居ない。母のたまふ寫真があるが親みが無い。

妻よりも母の寫眞の若くして病氣で六ヶ月、八分迄死んで居たまふのが七才の春。
氷糞を三個釣つてあつた事ミ脈、聽診最

後に舌を見る順を覺て醫者の催告しない間に舌を出して賢いと言れ頭を撫て貰つた事等も忘れ得ぬ事だ。

來診さ幼き患者告げて居る

華やかな事一ツ思ひ出せないではなうて丸つき無かつたのが私の六七歳である

(四十二、一記)

突き落したN

大阪 川合 舟々

お母ちやん泣き叫んだ時は既に僕の體は水の上だ。僕を突き落したNは驚愕の餘り大人に告げに走る他の子供はトツプを切つて逃れた。喧嘩をしたのか(いや喧嘩なれば迎もNは相手にならない筈)Nを怒らせる様な事をしたのか、亦是云ふ事をきかなかつたのか(或は一寸押したのが落込んだものか、原因はしかか起憶し無いが、突かれた瞬間その洗濯場になつてゐる臺を蹴つた僕の体ははづみ、背泳よりしくする／＼と向ふへ氣持よく進んで行つた事を覺へてゐる。勿論體をものがき乍らあるだけの聲を立てゝゐるに違ひ無い。幸ひ人家が近いので直に助けられたが、恐ろしく深い池だと思つてゐるに引上げて呉れた大人の漸く膝を没する位だつた。其後學校へ入つてから

Nは僕より二つも年上であるが御多分に洩れぬ落第で三年の時同級になつた。而し亦泣かされるのが嫌で一度も其事に觸れなかつたが、恐らく今逢つて話をしても頭に無いだらう。Nは今でも僕の第二の故郷大和郡山に健在だ。
是は丁度僕が學校へ行く前の六歳の時で何でも小春日和の午前だつたと思つてゐる。

おもちや箱

大阪 水谷 鮎美

おほさか生れの私にはやゝ平凡かも知れませぬが、幼なき頃は母の背から父の肩組から、指さしてはおもちやを買ふて歸るのがいちばん印象されてゐます。

こんな風に育つてゐたものですから七歳の春小學校にあがりましたが、はにかみ屋でした。附添ひの母の袂をはなさなかつたことを覺へてゐます。その頃流行つていたものにかりかり屋、大砲せんべいのぞき、八角めがね、夜店の見せもの、猿芝居、小屋がけの二輪加なぞありました。

いまの家に十六年住まつております。両親と私の三人暮しです。さびしい言へばさびしい、幸福だと言へば幸福です。

順調にこの歳にまでなりました。この後も過獨狂燥などにはふれないでも暮せるものさ信じてゐます。それは私のこゝろの人生詩は静かに流れてゐますから……詩にてらされた人間はご純なものはありませんから……

たゞいまさなりましては、このおもちや箱をあたへる弟や妹のいのがさびしいことでせう。(四・一二・五朝)

一人子に添乳の母の子守唄

矢立

大 阪 中 見 光 路

私の七歳の頃さへばアノ日清戦争の直後今から凡そ三晋半の明治廿九年に當るその頃、私の家は父が再び商賣……木綿問屋……に、失敗を重ねて第二次の逼塞をしてから四五年のここになる。

商人の家に生れた私は、幼な心にも商ひさいふこごがいつか脳裡に染込んでゐたらしい。下女等から

「光坊さんは大きなつたら何ンになつてでん？」

「わてら商賣してたんさ儲けるのや」

さ、塵んな事を言ひくしてゐたさうだある日祖母……私の妹にまだ母の手がかゝるので、大低祖母が私の面倒を日々見て呉れてゐた……に連られて何處かの歸

りに、立寄つた手遊屋で、私は、ふみ、ニッケル板で拵へた矢立を數ある陳列から見出した、それは好まじう本式に出来てゐた……價は二十五錢位だつたさ覺へてゐる、今の一圓五十錢程に當るだろう？……何しても欲しくて欲しくてたまら買つては呉れなかつた。

私は、祖母に對して、他の兄妹より……腕白も随分偉かつたが……亦、素直だつたから日頃祖母は誰れよりも私を一番可愛がつてゐた。今でこそ二十五錢位のものだが、その時代の儉約な家の子の玩具としては餘りに高過ぎるので、老人の勿体なさから何うしても聽き入れては呉れなかつた……祖母がいつに似氣なく本氣でカツミする程にダダケ抜いたのであつたが……で祖母は私の腕が振けん計りにして兎も角引摺つて歸つた。父も母も……父には繼母だつた……祖母への氣兼ねから頑さ私を叱りつけ、猶も捨鉢になつてダダケ續ける私を抱へてマツ暗な裏の納屋倉へ締込んで了つた。見兼ねた老下女が潮きき見て取り私に代り謝つて漸う濟んだこごがあつた。其後高等小學を了へ商業學校に進んでから、第三次の不再起な逼塞をしてから、父も兄も相次いで他界し、三男である私が今の貧棒な家の相續を除儀なくされた。自然、學業も續

けるに由なく半途で抛ち、奉公に出る、り外に術はなかつた。

それから幾年か流れ來り流れ去つた今はもう祖母も父も母もなほ老下女も、私の「矢立のダ」を知る總ての者はもう此世に誰もゐない「商賣してたんさ儲ける」筈であつた私は、まだ獨立さへもなし得ないで今、人の矢立となつて主人の腰より放れられず、判取りのような仕事をくる日もく繰返してゐるに過ぎない、そして矢立に納まつてゐる禿筆のように、年と共に頭髮がだんぐ薄くなつてゆく……こんなこごでいつまで暮すのやら……愛想に矢立へのく坊ンへ書き

鼠の齒

松 山 淺 井 冷 々 子

へ、ア貴方は道後の方ですなあ、齒で判りませうかエ、私の知り合のロ云ふ牧師で此の珞琅質を非常に侵されてゐるので先生様の齒は金ミ瑪瑙で御座いますかと言つて笑はされた事があつたさうですよ全くですな、道後の人は必つさ齒が多少に不拘赤い様です、さあ夫れを研究中心なのですが仲々判りませんへ、ア然し之を論文にしたら博士に成れませう！何なら私の齒を提供しませうか！なき、話合つたのは近頃の事で松山のU齒科醫は研究

母はうろ／＼と只あまのちの醫者へ言はれるその時父は「よし牧野へ行つて来る」牧野は高岡より二里位離れ、その村には東福寺と云ふ昔よりあやまち専門の住職ありし私をおんぶして早速出掛けた。

途中大門と云ふ所にかゝるこ「ほうらでかい川、なかひ橋」、と暫く停んであやして下された。牧野より腕をなをして家へ歸るこ母は安堵の顔で迎へられた。六才の折の災難今日の元氣を求めたのも親である。母に聞かされては思ひ浮べ忘れ得られないここのみ。

御殿 醫

大阪 安西 杏三

座敷に通るこ

「お前、何處から來たい」
こ目鏡越しで、ならむ醫者に、私は腹の痛いのを忘れて小さくなつて、負はれて行つた女中の陰に小さくなつた。

御醫の髪の長さに小さくなり

右 向 け

大阪 櫻井 圓角

私の家は堅法華で「臭いもの」を稱して、魚類、肉類はては野菜の中でも、葱、玉葱等は、食はないのを原則として、止むを得ず食つたら、肉類は一ヶ月、魚類

は一週間殺なきの場合は其日一日は佛壇を拜むこが出来ぬ習慣であつた。

中でも其嚴格な戒律を守ることの張本人の様な、伯母に連られて、或日親戚へ行つた。其家ではお客様と思つて一里もある町へ出て鯛を買つて来て料理して居た。傍で見て居た六七歳の私の鼻へ、魚の臭ひがブンこ来たので、私は、叔父さんソナ臭いものは僕は食はんで」云つた。叔父はソイヤは食つて呉れお吸物にしたらおいしげぞ云ふて居た。いよいよお膳の前へ据つた時、伯母はお看を頂いて居たけこ私はお吸物の汁すゝつて御飯を終つた。

右向けと云へば右向く小供なり

七歳の思ひ出

壺ヶ池 牧田 普門

川柳雜詠が七才になつた。七才と云へば私が小學校へ入學したのも兄が死んだのも七才だ、七才は實に懐しい。

山紫水明とはあまりに綺麗すぎる言葉かも知れんが、私は福井三十五萬石の領地、山あり、川あり、平野あり、交通の便も至つて悪い片田舎の水呑百姓に生れた。今は電車の便もあるが當時は人力車さへなく、汽車に乗るには一里の道をつつかなければならない。随つて大都會に生れた子供のこを思ふこ、現在の日

本の子供と、丸出しの朝鮮子供ぐらいの比較になる。

成績は相當な收獲を得て、一年の修業には第二位の成績で同じ村では鼻高々であつた。

私が四才の時父に死なれ、後十人の兄弟中上のものはそれ／＼自己の所信に向つて生活の活動を初めた。一番兄が母を助けて、私と一才の妹を養育する内、私が六歳愈々來年入學となつた時、潑刺たる精神を持つた兄は百姓のまゝろしさが苛立たしくなつて母の反對を説伏して、遠く北海の地に稼いだが、不幸にも肺炎となり、ついには結核性の喉頭に罹つて志半にも達せず翌年私が七才の六月歸國してしまつた。さて歸つたが、田舎の事でもあり、充分の手當も出来なかつたので遂に翌月十八日二十五才を一期して世を去つた。五六人の兄弟は皆大阪や北海道にゐる。兄の死を目のあたりに見ての母も幼い二人の子供に眼をやつては、悲しみを訴へるものにてなきその心情なるか、言ひ知れぬ寂しさが迫つてゐた。子供であつた私にも悲しさが込み上つて止めぎもなき涙を押へて母をいたわりつゝ近隣の人達を呼びに歩いたのであつた今でもその當時を想ひ浮べるこ、眼蓋の熱くなるのを覺ゆる。

賭にもう緊縮の餘地がなし
 賭への抗議即次可決され
 賭の味へ軍曹立つたまゝ
 夕飯にきつい時計曇るなり
 正午近くの時計曇るなり
 賭に不平もない新世帯
 賭に信用があり金を借り
 賭に不足を云え義理を持ち
 賭の娘へ用事許りふへ
 賭さ別な鑑詰買ふて来る
 賭の話もまじふケラス會
 珍客へ中味の違ふ茶腕蒸し
 賭の小言に女中慣れてくる
 賭に債券を買ふ金が出来
 粗板へコックは高い下駄を履き
 落付いておれぬ賭部屋を見る
 賭の不足へ試験追つて来
 賭の方で幾らか浮かす金
 賭用さいふエプロンも要るそう
 我が班へ炊事當番心得て
 賭夫時間はづれの晝を食ひ
 賭がどうのこうのと拂つてす
 (客)惚れている事賭へ少し見せ
 (同)腰口を聞く賭の貯めてゐる
 (同)レンコ鯛賭方の顔に見え
 (同)散らばつた中で賭方の飯
 (同)賭にまでつかまして出来た仲
 (人)金だけの事さ賭鍋を上げ
 (地)賭を鏡の姉に尋ねて来
 (天)賭へせめてはそむく療養所
 (軸)賭にこまる〜さ今日も鮎

鶴峯 喜由 斧葉 虛白 文久 二柳子 嶺月 かずを 文蝶 彩秋 玄佛 豆水 ひろし 清弘 柳甫 新水 波郎 灯舟 孤愁 同 里十九 同喜亭 陽喜亭 ひるし 嶺月 亂耽 同葉 松葉 同葉 琴人

働きに出るゴム靴が朝を待ち
 なごの顔の朝を恐れし
 巡廻へいつもの朝を掃いてゐる
 吊皮のゆるるまゝなる朝の戀
 大銀杏お寺の朝へ冬を抱き
 信心は朝を知らせる聲になり
 早出する父の起きたを知つてゐる
 工場の笛が朝餉を急ぎたてる
 煙草すふ朝は昨夜を悔ひながら
 病床の朝へ看護の氣がゆるみ
 電燈が消えて淋しい朝の冷え
 味噌汁の匂ひに朝の塵を捨て
 稼ぐ日の朝に追はれて靴を履き
 學校は休まされぬが朝の冷え
 孝行の荷へ朝霧が動くなり
 しつかりと土踏ん出る朝々や
 天理教の音からぐるり朝になり
 (人)さつま芋焼いて朝餉に替へむ
 (地)あるじ寝てゐる朝の藁灰
 (天)日を切つ仕事へ朝の手を焙り
 席題 船世帯 かほる 選

山雨樓 開路 愚陀 亂耽 琴人 嶺月 狂司 きたを 柳笑 船美 水仙 清路 文蝶 紫明 喜町 雨由 葉平 久郎 一杉 古燈 選

船世帯こちらを向けば膳があり
 船世帯あまり泣くので陸へ連れ
 船世帯女房の舵でめしにする
 船世帯捨れるに任せ飯も煮へ
 船世帯家賃値下を笑ふている
 船世帯女房呑んで明日は晴
 船世帯寄席の話はぼつ〜し
 來客の足から見えて船世帯
 船世帯氣兼の入りぬ煙を上げ
 船世帯コレラですよと子を叱り
 船世帯今日から海へ出ますのちや
 船世帯ふたりがおなじ蚊がとまり
 船世帯白ちりめんの帯で出る
 (人)船世帯今日は喧嘩をしてる
 (地)船世帯女房ももう四十過ぎ
 (天)船世帯大阪に着き兒をあやし
 (軸)船世帯頰張る様に火を起し
 席題 狂人 文 久選

孤舟 嶺月 山門 没食子 卯生 内匠守 松葉 柳甫 彩秋 居美 同 山雨樓 亂耽 孤舟 紫明 町二 木魚 豆秋 三子平 裸人 かくる 青砂郎 桐村 苦笑 嶺月 内匠守

北風にこゝまで来たが會へぬなり 幸泉
 北風にまだつゞく道を走り 同
 北風は耳のあたりをきつう 喜由
 北風の中に煙突煙を吐き 嶺月
 北風へ公會堂の晝が濟み 同
 北風に明日の物を買ひに行き 同
 北風が内まで送つてくれるなり 同
 北風に何邊来ても留守に逢ひ 新水
 北風に一錢落ちてた音がする 同

川柳雜誌社 一周年記念句會 (堺)

十一月十六日夜於大寺瑞祥閣 友淵貴山報
 晩秋の一夜落付のある會場にて 堺支部一周
 年記念句會を路郎先生をお迎えして開く。席
 上、路郎先生より「堺と川柳」に就て有益なる
 講演あり、一同に多大の感銘を興ふ。各選
 者諸氏より三光に對して短冊の寄贈あり、尙
 堺支部より參會者に記念品をわかつて、十時
 過有意義に記念すべき會を閉す。終りに路郎
 先生初め同人其他の諸兄の寄贈に對して有
 難く御禮申し上げます。
 (參會者) 路郎、萬年青、次男、政吉、二柳
 子、鶴峯、文蝶、天帆、黑天子、石竹、鮎美
 觀月、里十九、稗人、豆秋、松風、又光、二
 映、多聞、周歩、俊翠、太路、清路、兎歩、
 三絃、かほる、朝陽、さだを、一杉、春江、
 ひろし、光三、巨水、琴人、青砂郎、笠原、
 瓢山、貴山
 兼題 鯛 路郎 選
 大切に鯛だけ無事に持ち歸り 巨水

風呂敷に包み切れない鯛の顔 一杉
 鯛越えて鮒掬ひの列に入り 兎歩
 注文の通り鯛を真つ二つ 周歩
 御下命へ鯛千尾の明るさよ 琴人
 鯛のあらにも魚屋の欲があり 太路
 鯛片身里親値段段きいてたべ ひろし
 鯛堤げて田舎の道の立話し 觀月
 折詰の鯛だけ先きへかへつてき 里十九
 鯛買ふて病の交を慰める 文蝶
 丹前へ大きな鯛を賣り附ける 又光
 鯛網に娘は少しからげ過ぎ 多聞
 ほう丁もつけられず男を待つ鯛 二柳子
 鯛ちりへ一家揃つて丸くなり 朝陽
 思ひきりはれた姿で鯛がやけ 清路
 鯛さいふ生れついでに幸運兒 同
 焼物の鯛にみんなを嬉しうす 青砂郎
 苦しさを知らぬ哀れな鯛になり 同
 (人) 鯛の前 不甲斐なきをばは 貴山
 (地) 喜所へ来て鯛をみるだけの 二柳子
 (天) 勿体なや鯛の洗ひも身に着 萬年青
 (軸) 鯛一匹で人間の騒ぐこと 路郎
 席題 光 ひろし 選
 見付かつた光り途中で行きつまり 三だを
 病室の窓春らしい陽があたり 三絃
 首筋の寒い都の光りなり 萬年青
 陳列はどれもこれも光つてる 裸人
 淋しさに水の光りを見つめたり 觀月
 陽を受けた處から草の色になり 石竹
 土堀ればそこにも光る物があり 周歩
 燦然と水平線へ今日を見る 琴人
 パラツクへまた光明の朝が来る 豆秋

六獨に満足して夕の膳 青砂郎
 白熱の光に鉢を捨てて出る 萬年青
 暮れ物れば鍛した針が光つて居 又光
 はり物の馬鹿に嬉し日目の光り 兎歩
 留置場の外カンと日が當り 同
 足許の土にも朝の光りあり 一杉
 思ひ切り朝の光りに背伸びする 同
 (佳) 川向ひ西陽をうけて巡査来る 周歩
 (佳) 苔しみを知らず光りに馴れる 青砂郎
 (佳) 足袋に穴があいたのどかな 路郎
 (軸) 黎明の光りの中に親子居る ひろし
 席題 椿 琴人 選
 未練なくころがつてゐる紅椿 太路
 すげなくも椿の落ちる頃の戀 石竹
 椿あかるし手紙こそづけ 又光
 冬休み椿眞赤に咲く郷里 路郎
 養生の便り椿へ心もつて行き 豆秋
 何事か思はず如く椿散り きたを
 刺的なシーンになつた赤椿 周歩
 愛の巢の窓へはみ出す紅椿 青砂郎
 故里は夜晝椿落ちる處 朝陽
 思出は椿の花を吸ふたこと 一杉
 本椿頭の上になをけふのせ 同
 昔の子へひらつた椿の花を出し 二映
 嬉しい日一輪さしの椿咲く 同
 御隠居に椿をやれば句で返り 兎歩
 一片の椿が落ちて音もなし 同
 應接間椿見てゐてまたさける 三絃
 午後の陽の椿に戀を明しけり 同
 ほの白く椿は籤に暮れ残り 同
 同 ひろし

十二月五日夜

於 綠之助居 伊藤綠之助報

兼題 火鉢

雷 相選

挨拶は火鉢を除けてあらたまり

比呂詩

アカンシヨも火鉢叩いて有頂天

夜詩夫

鐵火鉢餘りに重い病み上り

門松坊

土火鉢煙管の音も輕やかに

幸 永

桐火鉢煙管の音も輕やかに

夜詩夫

エプロンの雪溶けてゆく大火鉢

門松坊

(佳) これだけは火鉢の灰に書見

貞三路

(佳) 分別を火鉢かきくかして

綠之助

(佳) 桐火鉢酔ふてゐるのを危がり

花 情

(佳) 火鉢越し相手の顔をきこ見る

同

(佳) つくれんと火鉢を抱き死を思ふ

同

(佳) 燒跡に残る火鉢を凄く見る

同

(人) 御通夜に冷く光る桐火鉢

同

(地) 口説ける手火鉢の椽を撫で

同

(天) 股火鉢思案と別にあたまり

同

席題 日本刀

幸 永選

短刀を呑んで居そうな女です

演 雄

一心をこめた刀に血の煙

キヨシ

家柄をはつきり見せる日本刀

雷 相

名刀を持つて士族さいふ誇り

綠之助

(人) 立てかけた刀へしやんこ身置

松 隱

(地) 虫干の刀阪妻眞似て見る

松 隱

(天) 日本刀握つたまんま肩が落ち

キヨシ

(軸) 名だけ見る寶物館の日本刀

幸 永

席題 通帳

松 隱選

通帳を見せて悲しむ水枕

綠之助

緊縮の犠牲となつた通帳
初孫も出来通帳の餘白なし
通帳妻の心も汲んでやり
同 幸 永

(秀) 通帳の高に氣の合ふ共稼ぎ
同 幸 永

兼題 寢言
藤枕寢言に何か惚氣出し
寢言に言ふてる父の苦勞性
その寢言笑はれてゐる朝の飯
人寢言今何思ひけん睡を吐き
雷 相

(地) 針仕事寢言へそつ向き變へ
同 幸 永

(天) 寢言から妻の秘密をさびし
同 幸 永

川柳 柳梅田支部句會 (大阪)
同 幸 永

兼題 悪者
ぐつすり寝た頃刀をさきはじめ
悪者さ知りつ次の子をばらみ
悪人は悪人らしき暮しむき
善人さ悪人に冷たき雨が降り
悪人の親さも知らず雨は木り
悪者の眼鏡がくもる日向に居
悪者のひとり日向にちぎれ雲
同 幸 永

兼題 夜
こゝも夜よなきのりんを呼びと
誘惑にかつたがさびしけふの床
硝子戸におびゆる夜の妓を見つ
人夜の酒私服刑事とうまがあひ
地夜蠅が飛んでゐるは田刈だ
天夜はながし父はわらじを居
同 幸 永

兼題 友達
友達に誘はれてゐる面白さ
舊友はよっぽどいける猪口をうけ
虫の聲しきりなり友は逝く
友達の心も知らず灯がともり
寢も出さず布圍も出さず古い友
寢ころんで友さ唄へば寝てしまひ
ぶしつけに云へば友達聞いてくれ
軸僕の名を呼んで友達死なくれ
同 幸 永

兼題 母
狂人へまだ丸焼けの灰煙り
丸焼けのせめてこの子の寢顔なり
丸焼けへ高張りだけがならんで居
丸焼けのぐるり一へん廻つて見
丸焼けになつたか罪の色の街
丸焼けの跡雨が降り風が吹き
同 幸 永

兼題 友達
友達に誘はれてゐる面白さ
舊友はよっぽどいける猪口をうけ
虫の聲しきりなり友は逝く
友達の心も知らず灯がともり
寢も出さず布圍も出さず古い友
寢ころんで友さ唄へば寝てしまひ
ぶしつけに云へば友達聞いてくれ
軸僕の名を呼んで友達死なくれ
同 幸 永

兼題 母
狂人へまだ丸焼けの灰煙り
丸焼けのせめてこの子の寢顔なり
丸焼けへ高張りだけがならんで居
丸焼けのぐるり一へん廻つて見
丸焼けになつたか罪の色の街
丸焼けの跡雨が降り風が吹き
同 幸 永

兼題 友達
友達に誘はれてゐる面白さ
舊友はよっぽどいける猪口をうけ
虫の聲しきりなり友は逝く
友達の心も知らず灯がともり
寢も出さず布圍も出さず古い友
寢ころんで友さ唄へば寝てしまひ
ぶしつけに云へば友達聞いてくれ
軸僕の名を呼んで友達死なくれ
同 幸 永

兼題 母
狂人へまだ丸焼けの灰煙り
丸焼けのせめてこの子の寢顔なり
丸焼けへ高張りだけがならんで居
丸焼けのぐるり一へん廻つて見
丸焼けになつたか罪の色の街
丸焼けの跡雨が降り風が吹き
同 幸 永

兼題 友達
友達に誘はれてゐる面白さ
舊友はよっぽどいける猪口をうけ
虫の聲しきりなり友は逝く
友達の心も知らず灯がともり
寢も出さず布圍も出さず古い友
寢ころんで友さ唄へば寝てしまひ
ぶしつけに云へば友達聞いてくれ
軸僕の名を呼んで友達死なくれ
同 幸 永

兼題 母
狂人へまだ丸焼けの灰煙り
丸焼けのせめてこの子の寢顔なり
丸焼けへ高張りだけがならんで居
丸焼けのぐるり一へん廻つて見
丸焼けになつたか罪の色の街
丸焼けの跡雨が降り風が吹き
同 幸 永

兼題 友達
友達に誘はれてゐる面白さ
舊友はよっぽどいける猪口をうけ
虫の聲しきりなり友は逝く
友達の心も知らず灯がともり
寢も出さず布圍も出さず古い友
寢ころんで友さ唄へば寝てしまひ
ぶしつけに云へば友達聞いてくれ
軸僕の名を呼んで友達死なくれ
同 幸 永

異國風 飛來る 昔の 港町 夏宵
 異國風 に出來てる ショウウインド 三猿堂
 異國風 踵も高く 氣も高く 葭村
 異國風 見せて 歸朝の 里歸り 夏宵
 異國風 な屋根を見せてる 文化村 三猿堂

川柳蟹ヶ池支部句會 (大阪)

十二月八日

牧田普門報

もうおつつけ事始めだ。浮世を離れた蟹ヶ池の支部も何んさなく年末氣分が横溢してゐる。世は將に迷土への關所を前にしての喘ぎをしてゐるのだらう。七月以來種々の事情の爲め休會してゐた。當支部も年末の忙しい時眠りから醒めたやうに句會を復活した。忙しい時は仕事か抄る」ではないけれど。

本社から同人二柳子、かほる、兩氏が出席下さる。丁度僕に面會に來て呉れた白帆君も都合よく加つて呉れ、支部會員その他を合して二十六名非常に盛會であつた。尙萬よし老やひろと兄も御出席下さる。筈になつてゐたところ、政事季節の折柄業務の都合上突如上京されたので乍遺憾出席願へなかつた。

席題 辭

五選

他家の飯食べて氣儘の辭が 取れ 茶迷
 鏡さへあれば 覗いて 行く女 運坊
 辭だまは言はして 置けぬ女の 子 柳月
 一遍は必ず 捏る 彼の 癖 紫海
 そう笑ふなよ 俺の 癖だま 湖舟
 腕を組む癖あり 思案する 男 普門
 彼の人の癖は障子を 開けてゐる かほる
 子の癖も何んにも 知らぬ若い 親 紫溟

初對面の辭まは知らず氣を配り
 その癖もよこ近頃は金も貯め
 大聲は俺の地聲をつけ加へ
 又も出た癖へごこかで笑ひ聲
 洋行はおかしな癖と變つて來

席題 緊縮

普門選

緊縮に食費の減つた施療院
 緊縮の別葬式の酒をやめ
 緊縮の村に盛り場よく離し
 緊縮をよそに老母は住んでゐる
 失業のあがき倒して 吸ふ胡蝶
 緊縮と別に博士の増へて行き
 緊縮と言ふ銘仙の派手な柄
 緊縮の春を呑まない事にきめ
 (佳)緊縮に下駄の鼻緒の太いこと
 (佳)緊縮に白く見えたり足袋の裏
 (佳)店番に緊縮の字が目立つなり
 (軸)緊縮は硝子の罍を貼つてゐる

席題 霜

白帆選

明日歸る退院の朝霜が降り
 寝やけにならずにすこす病んだ冬
 残り咲く椿の花に霜が降り
 霜の朝炬燵で風を聞いて居る
 霜降りにあますと妻の赤い頬
 霜踏んで來る牛乳の温かい味
 初霜へ水菜のうまさ噂され
 霜柱も踏んで來た病み上り
 湯タンボを手水に使ふ朝の霜
 葉の落ちた雑木へ霜の日はつゞき
 霜の朝バケツを下げて立つて待ち
 ボケツトの手を出しかれる霜の朝

櫻 松蓮子
 波紋 節花
 同 同
 門選 二柳子
 金時 波紋
 松蓮子 紫海
 柳月 大觀
 同 同
 普門 二柳子

霜の朝泣く子をあやす母の愛
 (佳)霜の屋根雀の脚が冷たそう
 (佳)霜を見て子供は空へ息を吐き
 (佳)霜の朝焚火へ寒い手が伸びる
 (軸)信心は霜の光つた朝を起き

兼題 橋
 二柳子選

振り返り見返り橋の懐しく
 橋の上この川上を聞いてゐる
 此の橋もよくなつたれさ久し振り
 反橋を子は面白う又のほり
 橋一つ越へて番地を開き直し
 里程表橋から別な道があり
 欄干が朽ちて名所の一つなり
 (佳)まさまりもつかず橋へ來誌
 (佳)久々の歸省に橋もなつかしく
 (佳)懐手橋のなかげで立止り
 (軸)橋の名も知れず掛茶屋される

兼題 手相
 かほる選

手相見て商賣替へてみたくなり
 再婚は手相の方へ聞いてみる
 かるた取りすんで手相の話も出
 手相でもと易者は客を呼び
 永病ひふと生命線をみる
 手の相が幸運あると悦びて
 この筋が良いと言はれて氣を直し
 蠟燭へ手相は寒くちぢこまり
 あまりに手相と過去が合ふてゐる
 隠居も手相へ自信もつてみる
 戀愛に強い手相に出て居れど
 手相だけではすまされぬと聞き
 健康な筈の手相へ歳が暮れ竹

茶迷 同 紫海 湖舟 白帆 普門 紫溟 由美平 義人 凡天 運坊 明治 至光 湖舟 普門 阿矢 波紋 一味 葉

長き夜を娘黙して縫ひつづけ
勅題の模様をマネキン見せて立ち
(佳)一山の蜜柑を寒く見て通り
同 駒 城 人

川柳支部例會(大阪)

十二月八日於双葉子居 朝田新水報
守口支部は毎回拾人餘の會合で、非常に関し
みのある句會を催して居ります。拾貳月例會
より新に金太樓、蒼太の兩氏を同人に迎へ益
々發展して行くのを喜んで居ります。

兼題 目的

目的はづれて北濱の風 京 郎
あなたの目的は何時も空想でず 當り矢
落第をすれば丁雅に行くさ決め 舟々
目的のはつれた事に戻つて來 新水
目的を語れば母は涙ぐみ あきら
新しい話も親交聞いて見る 双葉子
(佳)千圓の高を目ざして居る層屋 公二
(佳)都への汽車にあてごは無(り) 舟々
(佳)目的もなく書終る履歴書 双葉子
(人)目的はなんだと頭からきかれ 雨町
(地)父母に知られる背の目的 双葉子
(天)雄圖空しく日本への船 舟々
(軸)目的の一つ靴に入れて出る 舟々
席題 語 舟々
桃太郎の話で小供寝てしまひ 英選
先生と歩き話題に窮してゐ 雨町
ほろりささせる話手奇麗なり 蒼太
仲人の話に心動いて來 あきら
別ればならぬ話が、進んで來 双葉子
空車馬と話して戻るなり 雨町

女給もう話につきて唄ひ出し
話される方が迷惑げな返事
(軸)こみ入つた話一汽車遅れる氣
(軸)さやける妓を美もに見る
同 舟々

席題 宿 替

宿替の後で噂の種さなり 新水
引越した後で掛取やつて來り 白蛙
二階借妻に押さして移るなり 雨町
引つたに娘床の間飾るなり 蒼太
宿替のたびに女房智恵がつき 金太樓
引き越して知らずに叱る向ひの子 双葉子
宿替への小供も共に積んでやり 公二
引越の丁度隣も子が、ひさり 英一
新築へさうに引越したと聞く 舟々
引越して見ても借家は借家なり 同
(佳)越引へうこれきりの世辞を、 同
(佳)越して行く家を後に物思ひ 詠逸
(佳)宿替は破れた枕置いて行き 公二
(佳)宿替(名残り惜むも)女房なり 同
(軸)宿替に今度の家を大きく云ひ 新水
席題 苦 帳 帳 互
半生の苦勞を語る通帳 詠逸
通帳に皆身代はまごめられ 新水
五十銭になつて金利がついて居る 金太樓
通帳子供の名も借りるなり 舟々
死んだ子の名前が残る通帳 雨町
質屋では顔の賣れて通なり 同
通の色も古いお得意 公二
へそくりの妻の通をつきさめる 双葉子
ホナスに質の通へ眼を通し 同
月末になつて驚く通帳 雨町

通帳こんなん買ふた覺えなし
これ丈けたまつた通帳父に見せ
親友へ通帳まんま出して貸
同 舟々

席題 福 引

人間は福引にまで迷はされ 雨町
福引にバケツの當る獨身者 新水
姑さ嫁とタワシを引いてく 町二
一等を引いて福引蹴つまづき 同
くじ運があるさて背の子に引かし 公二
冗談に引くと二等が當つて居 同
もちくさして福引へ行く娘 双葉子
福引に當つた算筒見に來られ 同
同 双葉子

松山支部例會(松山)

十二月七日於金龜館 西山玄々子報

兼題 女 素人、水樹共選

酔ふた父あれが男であつたなら 冷々子
結局は泣きじやくつてる女勝ち ひで緒
一人になつて勝氣な女泣き 斜松樓
麗らかさ遠目に美人續くなり 薩城
藝名を替へて藝者の派手になり 大樓
嬉しくてならぬを娘只黙り 同
友の嫁二三次逢へばよく喋り 同
マネキンの笑ひ冷めたいなと思ひ 支々子
二人になつて女の改たまり 紫石
見送りの中に黙つて居る女 斜松樓
餅花がゆれた娘の高島田 青帆
風呂の名で投書して選に入り 嘉久馬
添乳から抜け出て女手内職 極光
久方を問へば女の下駄があり 春峰

緒の長い袍愈けた姿なり
君が代も歌へ袍を買ふて待ち
雷相

野垂死だん／＼増える人集り
野垂死れんげの花が咲いてるに
松余彌

野垂死何處の誰だかほつこかれ
逃げのびて此處らで死ぬるは無情
緑之助

野垂死二三度かいで犬は逃げ
野垂死鳥合の衆に取りまかれ
幸永

同 幸永

川柳取支部近況

中島鐵洲報

同人は目下十名になりました。それから客員として先輩二名。毎十五日に例会を催します。句の募集と発表は地方の新聞でやつて居ますが、投稿者が定まりません。それ等の人が他十五六名はあるのです。

柳樺や一路集に依り、ひたすら句の向上につとめて居ります。どうか將來の發展を期待して居て下さい。

尖銳會偶會(大阪)

十一月二十四日於裸人居 裸人報

鬚、風呂、箸、帽子、棚

鬚剃つて淋しき煩のこげに見せ
ゆきづまる度に易者は鬚をなで
素人

焼けたのが二三本ある猫のひげ
ひげ剃つた背は歩いて見たくなり
同 秋

明日は又明日の日が湯につかる
風呂焚きは雄波戦記を讀んで居る
同 秋

朝ぶるで今日の豫定を考へる
裸人

リヨマチに教えられてる薬風呂
お銚子は未だかさ箸を割つてゐる
歩き初め箸もつ事も教えられ
花嫁に黒檀の箸長すぎ
おもむるに金の話は箸をおき
新妻の思はぬ所に棚があり
月曜日にも棚が欲しくなり
腹の子を思ひ浮べて帽子編み
志津子

師走小集(島根縣)

十二月七日 伊藤緑之助報

寒風 風 緑之助選

寒風に稲架場の竹のひようくさ
寒い風お午餉を一つおごらうか
寒風に吹かれて這入る紅い顔
話し合ふ言葉を寒風持つて逃げ
深帽子脇目もふらず風を突き
寒い風されど氣輕なふところ手
秀寒い風土手八丁をたどる一人
秀隙間風今日の寒さに大工呼び
比呂詩

危いれ酒杯交換よしてくれ
仁丹で酒のにはひを隠して
コップ酒思つた通りくだを巻き
互選

門松坊 夜詩夫 緑之助

門松坊 比呂詩

石枕はたけば月の情かな
すけ笠のつれなき花の石枕
石枕たき火も消へてしまひけり
石枕はななく蟻はつぶされる
石枕夜露はひかる放浪兒
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

笑童居偶會(神奈川縣)

十二月七日夜 酒井駒人報

首すじに何の手術かいい女
ぶらんじに小犬は首を振つてゐる
手蔓もさめに師走の町を抜け
冗談を云ひながら其日暮しなり
圓満な相して貧乏をしてるなり
同 笑童

かほる居偶會(大阪)

十一月二十六日 高橋かほる報

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

加勢してひとり日向に運を待ち
覆面の加勢へみんな手をたたき
或時は車掌に加勢したいなり
乳母ひさり淋しく人の子を育て
牧場の乳をこぼして朝の呼吸
乳房もみく我が家に急ぐ
本宅の方をみつめて乳しぼり
置き物の布袋に梅を一枝そへ
布袋さん歩きつかれて戻つて来
ごの繪にも布袋大きく塲所をさり
唐子皆よせて布袋のすつばだか
うちかけを着せて行燈を暗うする
行燈の灯を吹き消せば虫が鳴き
行燈のつらば女房若う見へ
行燈に半分かくれ帯をくけ
好い舞臺行燈の灯がわかつてき
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

回覽五句集 (松山)

十一月三十日 高田雨眠報

題 口 笛

口笛のそれからそれへ不長團
出られない其夜口笛耳につき
後知らぬ唄へ口笛吹き足して
口笛の俯向き勝に塀の外
手内職子は口笛で戻つて來
口笛の何處で覺へた越後獅子
口笛に脚を揃へて二人行き

川の子
支々子
雨眠
極光
斜松樓
松葉

題 腰

宙腰になつた處へお茶が出る
やなら腰上げた無言の眼がうるみ
腰一つひねつて手品笑はせる
腰掛がぐらつて居る競技場
中腰になつて話へ念を入れ

眺敵
雨眠
極光
支々子
同

題 買物

買物の手柄を評價させて見る
買物を頼まれて居て朝歸り
見て置いたのを二人で買ひに行き
買物の歸りを叔母に見て貰ひ
里の母へ無心する氣で派手に買ひ
内職で償ふ腹で買物し
買物の序一幕見て戻り
買物にこさよせ見合ちやんと出來

松葉
眺敵
極光
同
雨眠
同
支々子
同

キヨシ居小集 (島根縣)

十一月二十六日夜於キヨシ居 綠之助報

風

黄に青に廻せど賣れぬ風車 キヨシ

綠之助選

(佳)雲に乗つて來た秋の風
(佳)立間を折から風が邪覽に來る
(軸)北風を衝いて軍歌消えて行く

二三男
濱男
綠之助
選

お茶菓子の一つを食べて口を拭き
ペトにされた羊羹母が食ひ
新しい位牌の前のチヨコレト
給玉に困り抜いてある義齒
菓子ばかり食つて勉強強くなり

二三男
濱男
綠之助
同

尖銳會十二月例会 (大阪)

十二月七日夜

於 寺田町交又點西入内藤製作所

須崎 豆秋 報

席題 ストープ、巻紙 互選

朝のストープ小使一人居る
云ひにくい話ストープ燃えさかり
ストープの赤きなれた靴の
ストープへ唱ふ女給の少し酔ひ
巻紙を見つめる顔に涙あり
巻紙へつき襟をして筆をさり
巻紙をちぎつて番地書いてやり
巻紙へ母の情の假名まじり
巻紙へ不満さら筆の音

裸人
豆秋
公二
石人
琴人
柳山
公二
豆秋
鬼堂
柳板

子の話自慢でなくて笑はれず
金もうけの話のあと欠伸が出
故郷の話に炬燵あたたかかし
(佳)生前の話がばつむ倒屏風
(佳)この後をさうする話唾を呑み

石竹
豆秋
柳影
同

(軸)ひそく話して歸る見舞客
一理ある事と課長は云ふた丈け
理屈には勝つてお金でへこまされ
理屈ではござらぬ事實食へぬなり
理屈でも行けず出鱈目でも行けず
親方の理屈にそうやなと思ひ
理屈など聞いても居れず仕事に出
(佳)まゝ事に理屈のうまい女の子
(佳)理屈を云ふな履ふ身になれ
(佳)理屈云ふのへ年増酌をする
(軸)二重ない理屈に母は念を押し

石竹選
公二
柳精
斗入
鬼堂
柳影
同

病人に窓あけてやる靜かな日
空想のふさ目をむける窓の風
クレオン畫窓窓窓へ人の顔
雨の窓欠伸が二つ戸をしめる
死刑囚窓一尺の空へ戀ひ
(佳)事務室の窓冬の風鳴つてゐる
(佳)人間のはかなき窓のしみの跡
(軸)子の寝たる窓の蜻蛉を逃がす

石竹選
公二
柳影
琴人
裸人
豆秋
同

戸のすきま猫はのぞいて通るなり
朝刊がペサリと落ちた戸の隙間
影數の隙間も冬になつた風
やりてらしくもない隙があつた
舄かく隙間子供に泣き出され
言葉尻隙さす署長追求し
女から見れば男に隙があり
(佳)隙間ぐるぐる朝の陽が這入

柳影
斗入
公二
豆秋
柳影
同

兼題 窓
兼題 隙

石竹選
公二
柳影
琴人
裸人
豆秋
同

兼題 隙

柳影
斗入
公二
豆秋
柳影
同

兼題 隙

豆秋

(佳)軒下の隙見に女給聲をかけ
 (佳)しかつてる先生寒い窓のすき
 (佳)隙間に肌を感じた男の眼
 (軸)曲馬團隙間だらげな小屋をた

席題 曲る

先の方へ曲ればW〇があり
 双方がよけ損なつた曲りかぎ
 金力が曲つたまゝを押し通し
 帛皮の紳士よめく急カーブ
 信心は曲り曲つた山の寺
 曲る曲る心地も曲る
 (佳)淋しさに角を大きく曲るなり
 (佳)四つ辻をはつきり曲る梯子酒
 (佳)判取へ曲つた文字が書いて
 (軸)見送りへ頭を下げて辻を折れ

名賀壽會例會 (尼崎)

於 大物町圓平寺 今村吉朗報

席題 記者

婦人記者子供をほめて記事にする
 御主人の趣味も聞いてる婦人記者
 兎も角も逢つてみる氣の記者を

席題 能書

能書へ眼鏡をかける咳の父
 能書も添へて細々母の文
 能書へ偽物のあることも添へ
 (佳)能書を讀み聞かせてる枕元
 (佳)能書に香ひの残る婦人薬
 (佳)能書の人なとこがカーゼが出
 (秀)能書を笑ふて妻の湯を沸かし
 (軸)能書に朝鮮文字のさこもあり

公二 柳影 琴人 豆秋 斗入 鬼堂 二 祿人 石竹 同 豆秋 同人 琴人

水兵の酔ふてナイフを恐がられ
 二階借りナイフで葱を切つてのけ
 (佳)椅子席の借りナイフへ柿添へ
 (佳)順繰りに柿へナイフが廻る

席題 霧

(佳)プロペラの音が暗るも朝の霧
 (佳)獵尻り霧立つ池に鴨が逃げ
 (佳)朝霧へ温い辨當箱を提げ
 (佳)ユニホーム揃て霧の街を抜け
 (佳)霧の町大根車さ行き違ひ
 (人)踏切の向ふが見えぬ霧になり
 (地)霧暗れた後を陽さしの朝の色
 (天)朝霧の街へ日暮き吸い込まれ

席題 編物

乗替を貰ふと又も編み續け
 亡妻にその儘編んである姿
 編みさしに不圖氣のつた飯の焦げ
 編物の膝へ口繪を見せに来る
 (人)編物へ靜かに更ける姉の部屋
 (地)出生生今日編物へ氣が乗らず
 (天)父のひばかりを編んで弱く生
 (軸)寒がりの父へ優しう編み續け

兼題 家相

(人)愛の巢の家相夜店の端で聞き
 (地)古井戸を氣に母の病み續け
 (天)裏鬼門こは開かぬ扉の苔
 兼題 紅葉
 下戸一人紅葉を寒う見て歸り
 (佳)花見さば別な旦那紅葉狩り
 (佳)紅葉する頃を結納つがなく

双光選 壽郎郎 陽喜亭 突支坊 町選 柳堂 白鶴 楯雨 楯童 萬樂 陽喜亭 吉朗 陽喜亭 柳堂 楯雨 吉朗 壽郎郎 楯童 雙光 陽喜亭 雙光 陽喜亭 白選 雙光 楯雨

(佳)紅葉狩り鐵道省は儲ける氣
 (人)失職へ故郷の山は紅葉して
 (地)まだ早い紅葉に茶店愛想よし
 (天)ホスターの紅葉はみんな赤
 席題 喜び
 除隊兵喜ぶ人へしやちこげり
 喜びの一皿足らぬ母の膳
 母だけがその榮轉を勝はず
 ふだん着て来た喜びの勝手口
 當選にマクネシユームを焚く来る

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附(金文字入)で書架を飾るにふさわしい簡素な装幀に出来ました。

- 第一卷 第二卷 各金五圓也
- 第三卷 第四卷 各金參圓也
- 第五卷 第六卷 各金參圓也
- 當分第五卷 特價金壹圓五拾錢
- 送料十八錢

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

- 第二號より第四十七號まで 各一部 金拾錢
- 第四十八號より第七十一號まで 各一部 金貳拾錢
- (但し一號九號十二號廿一號廿五號卅六號三七號はありませぬ)

川柳雜誌社事務所



編輯後記

路 郎 生

▼發展から發展へのプロセスを
ひた押しに進んでゐる「川柳雜
誌」が第七卷の春を迎えたこと
は柳壇のため同慶に堪えない。
社關係の諸君から「六七歳の頃
の思ひ出」を募つた所以である。
本年は柳壇のエポックメーキン
グとなるべき大飛躍を試みたい
と思つてゐるので、社關係の諸
君は云ふまでもなく、愛讀者諸
君、誌友諸君からの特別の後援
を期待したい。思ひつかれたこ
とは、ごし〜申込んで頂きたい
。こちらの案は何れ發表した
いと思つてゐるが豫め協力して
大いに柳壇のために働くことの
覺悟を持つて頂きたい。

▼新年號は豫想以上に原稿の山
積であつた。我等川柳人の熱と
力が如何に旺盛であるかを觀る
ことが出来て愉快此の上なこで
ある。先づ特別寄稿家蛭子首二

川村花菱、前田雀郎、西原柳雨
食滿南北の諸君等が響をならべ
て、感想に評論に研究に、その
深き造詣を寄せられたことは我
等同人の尤も欣快とするところ
である。

▼本號の表紙は小出樽重氏を煩
はした。

▼編輯後に到着した川上三太郎
氏の原稿其の他次號廻りとなつ
た原稿が多い。諒されたたい。

▼左記の四君が新に社友として
入社された。今後の活躍を祈る。

上田 柳 影 君
松田 多 郎 君
丸山 公 二 君
森 石 竹 君

▼多忙だつたり健康を害したり
してゐたため中絶してゐた私の
「廿四篇まで」を是非書き續けて
ほしいといふ希望者が多いので
本號から又々御愛讀を煩はすこ
ととなつた。

▼月評は相變らず紋太、山雨樓
琴人の諸君を煩はした。ひろし
君は上京中で欠席。本號から「草
を圍んで」といふ題にあらため
た。氣分を新たにしてくかゝる點
から云つても、さうすることが
効果的だと思つたからである。

▼同人では素人、雨町、ひろし
縁之助君等が筆を執つた。

▼近作柳柳、川柳塔、粒々集、
光塵抄、一路集、各地柳柳等、
各作家の活躍振りにも目ざまし
いものがあつた。この勢ひで昭
和五年度の活躍を期待したい。

▼新に「大問題、小問題」欄を設
けた。活用されたい。

▼「ビルディング」と「飛燕往來」
は休載した。

▼社友平田楯雨君が家事の都合
上退社されることになつた。

▼十二月七日の夜行で萬よし老
さひろし君が社民大會に參列の
同志と共に上京した。社民は御
承知の通り分裂したので、萬よ
し老もひろし君も共に脱退して
しまひ、目下新黨組織の準備中
であるさうだ。

▼ひろし君は九日の夜三太郎、
雀郎兩氏に迎へられて、鶯谷の
「おぼら」で御馳走になつたさ
うである。黨務多忙で宿に残つ
て居た萬よし老と三太郎氏も
一度飲むといふので近くの支那
ソバやで随分遅くまで痛飲、大
いに川柳を論じたさうだ。ひろ
し君は十日に江上美南史君に會
ひ淺草の野口バーの支配人さな

つてる舊同人繪山千代二君を訪
ねたさうだ。

▼十二日にはすゞめ吟社の藤島
某六氏と新宿驛に落ちあひ、○
丸氏や昌二氏を訪ね、夕方雀郎
氏と銀座で戀人さ逢尾君やう
に會ひ、共に代々幡の雀郎居に
落ちつき、十四日の朝歸阪した
こと。

▼桑港の社友松村敏郎君の通信
によると拙著の「川柳漫談」をあ
ちらの書店でも賣捌いてゐるこ
の新聞廣告が出てゐるさうだ。

▼社友近藤テルホ君が新に糸屋
町支部の幹事として活躍される
ことになつた。因に同君はサン
デー毎日の新春特別號の表紙畫
の懸賞募集に應じて美事に一等
賞を贏ち得た。

▼社友三輪五輪君は十一月末か
ら山陰、九州方面へ旅行。

▼一月には本誌客員前田雀郎氏
川上三太郎氏等が相次いで來阪
される筈である。

▼京阪神各支部聯合會は近來
稀に見る盛會であつた。各幹事
の勞を多とする。

▼前號の編輯後記を讀むと、宇
喜多秀穂翁が史上で有名な金吾
中納言であるやうであるが、史

上で有名なのは金吾中納言宇喜多秀穂翁はその末裔なのである。壽像は秀家郷のでなく秀穂翁のである。その除幕式が十一月二十四日勝山城麓で舉行されるので、それへ参列の目的で二十二日の夜、社の琴人君と共に商船の革丸で大阪を立つた。尤も琴人君は除幕式の方には関係がなかつたのを、私が一日早く向ふへ行くので誘ひ出したのである。二十三日朝高濱へ着くさすくにお馴染の五健氏、支々子氏の顔が見たのは愉快だつた。それに素人君が上海時代の支那服を着込んで武子女史と共に出て来て呉れたので一寸異彩を放つた。

▼午後松山支部の前幹事冷々子君を一同さきとその宅に訪ふた冷々子君は目下密柑の書入時で非常に多忙らしかつたが我等の姿を見ると大いによるこんで無理に座敷に招じやうとしたが寸刻を惜しむ時季を察し、後刻を約して道後の岩井居へ落着いた夜は松山支部主催の歓迎句會、席をあらためての歓迎宴共に胸襟を披いての柳談に興の盡くるところを知らなかつた。(句報參照)



▼別府支部では支部員が益々増加の傾向を示し、目下女流作家

が芽出度退院することになつたので植田湖舟君が新に幹事として支部の面倒を見ることになつた。

▼御旅支部では支部正會員、準會員の制度を設け、今後一層作句に精進するのこゝさである。

さへ出来て、熱心に本誌及湯苔誌のために努力してゐる。

- （座姿）向つて右より計加、支々子、大鷲、五健、巨城路郎、冷々子、琴人、松葉、武子（立姿）向つて右より一止、斜松樓、文芳、雨眠、拓水水樹、芳之助、春峰、青帆、素人、夢郷、素泉

- ▼糸屋町支部の八木毒仙君の令閨が十二月十日急性肺炎のため永眠されたので、十九日の夜毒仙居で追悼句會があつた。本社からはひろし君と私が出席して哀悼の意を表した。
- ▼長野暗濱氏の令嬢繪子さんが十二月十三日結婚された。同氏は又二十二日に大阪市住吉區住吉町七七〇地へ居を移された。
- ▼故武笠山椒氏の令息幸三氏は札幌市南九條西十一丁目に移られた。
- ▼島山一庭氏の家庭では十二月十五日二男日出夫君が誕生された。一矢君の再生と思はれるだけに一庭氏の喜びのほどが察せられる。
- ▼宮津番傘川柳會では一月十一日午後一時から宮津町山嘉樓に於て川柳大會を開催するこの事
- ▼加賀大聖寺町の高田茶搦郎氏主宰の柳誌「風見草」の創刊號が舊冬十二月に出た。この柳誌の名づけ親である關係からも大いに發展を祈つてゐる。

投稿規定

▼近作柳橙及課題吟の句稿は葉書又は同型の厚紙に各題別紙に認め住所氏名雅號を明記するこゝ。

▼各地會報は半紙判の原稿紙に清記のこゝ。

▼文章は二十字詰半紙判原稿紙に認めるこゝ。

▼書體はなるべし楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記するこゝ。

▼締切は嚴守されし。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこゝ。

募集

第七卷第三號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

- ▼影 安井ひろし選
- ▼雀 太田朝陽選
- ▼家 住田亂耽選
- ▼鴨 朝田新水共選

第七卷第四號課題

一月五日締切

(各題十句以内)

- ▼馬 松丘町二選
- ▼娘 竹内多聞選
- ▼行末 酒井駒人共選
- ▼石川双葉子

每號募集

▼近作柳橙(拾句迄)麻生路郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社告

○社務一切(編輯に關する件、投句、贈讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

普通號 一部 金拾錢
 新特輯號 一部 金拾錢
 八月特輯號 一部 金拾錢
 半箇年前金(特輯號共) 壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共) 參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませば御相談に應じます

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます▼御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりご御指掌願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年十二月廿五日印刷
 昭和五年一月一日發行
 (第七卷第一號)
 (毎月一回一日發行)

大阪府西成區千本通五丁目七番地
 編輯兼發行印刷人 麻生路郎

大阪府西成區千本通五丁目七番地
 發行所 川柳雜誌社

大阪府住吉區杭全町六〇三番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番
 電話天王寺二一六七番

賣捌書店
 (大阪) 大賣捌 サクラヤ書房。(明文堂 其他市内各書店)
 (東京仲見世) 五森堂(神戶) 米田、俊雄、實文館(函館)
 石塚(石川縣小松)マコト屋(京都)三宅(松山)弘文舎

昭至誠學團柳川部藝學團誠至和昭

(南海電車)

柳	天	全	內	河	萬	寒	友	阿	飯	高	漆	森	立	山	末	大	平	山	池	半
村	屋	內	川	內	屋	川	淵	形	原	岡	島	本	田	田	山	塚	田	田	澤	田
樹	瓢	瓢	樂	瓢	瓢	樂	貴	一	敏	保	萬	黑	一	天	天	堅	顯	久	樂	梯
光	樓	樓	亭	樓	樓	亭	山	杉	雄	保	兩	天	坊	溪	昇	坊	太	居	次	次
吉	江	樓	菅	樓	樓	樓	福	穗	松	水	三	後	谷	木	加	柳	上	新	土	土
田	口	樓	菅	樓	樓	樓	川	積	島	內	輪	藤	口	山	藤	天	田	井	井	井
一	泰	樓	吞	樓	樓	樓	戶	一	格	迷	五	竹	海	青	柳	天	籬	游	萬	萬
稻	平	樓	風	樓	樓	樓	一	秋	子	宮	輪	石	耳	砂	司	郎	下	水	年	年
聞	陽	樓	泉	樓	樓	樓	工	工	郎	宮	輪	耳	耳	郎	司	郎	下	水	青	青

謹賀新年

松山川柳人會

松山市立花	松山市湊町四丁目	松山市出淵町二丁目	松山市紙屋町	松山市小栗水頭内	松山市南八阪町	松山市小唐人町三	松山市一萬町	松山市昭和町
石丸春峰	岩本素人	岩本武子	新海素泉	西山玄々子	豊島巨城	豊島夢郷	得居双葉	虎尾大鷲
友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠	友田雨眠
松山市豊坂町	松山市外道後湯之町	松山市北八阪町	松山市出淵町二丁目	松山市一萬町	松山市千舟町七二	伊豫新居郡氷見町	松山市西堀端町	松山市一番町
大窪文芳	渡部芳之助	渡部青帆	河野兩桂	川上川の字	野本喜峰	久門薩城	久間野松葉	安井柳女
松山市外祝谷	松山市松前町五丁目	松山市枝松	松山市外道後湯之町	松山市外道後湯之町	松山市小唐人町三丁目	松山市外餘戸驛	松山市小坂五三五	松山市喜與町四二
(忌中)浅井冷々子	酒井大樓	坂井拓水	三好計加	三好一止	重本かき松	清水柳芳女	柴田極光	白石水樹

(いろは順)

川柳雜誌 御旅支部同人

(いろは順)

生田 翠夢

大阪市東區粉川町一六

押鐘 柳南

大阪市西淀川區海老江上四丁目二

梅村 路鳥

大阪市東區淡路町三丁目

電話本局六二一四

山岡 荷月

大阪市東區成區鶴橋町(大軌驛前)

松田 多郎

大阪市東區和泉町二丁目

(電東八四八)

福田 飛志

大阪市東區島町二丁目

(電東三六八四)

櫻井 圓角

大阪市東區農人橋二

(電東五三二二)

謹賀新年

川柳雜誌 梅田支部同人

田夕鐘

大阪市港區高尾町一ノ三七

山水 鮎美

大阪市此花區龜甲町二ノ七九

飯根 香仙

兵庫縣武庫郡大庄村字森具五八二

野健 坊

兵庫縣武庫郡大庄村濱内

野卜 居

阪神電鐵 寄宿舎内

藤原 鳴玉

大阪市此花區上福島北三丁目

川村 觀月

一四五 德丸清秀方

永里 十九

大阪市西淀川區姫島町蓮池

森田 石竹

府下豐能郡麻田村字箕輪六一五

都藤 冷笑

大阪市此花區上福島北三丁目二

横田 眠聲

大阪市西淀川區姫島町五二二

謹賀新年

尼崎川柳名賀壽會

清	佐	阪	中	金	蟹	西	西	今	石
水	々	崎	野	泉	江	島	畑	村	井
虚	木	斧	立	萬	柳	白	亮	吉	突
白	宙	葉	洋	樂	堂	鶴	山	朗	支
尼崎市大物村四七〇	大阪市東淀川區十三今里町八五	尼崎市大物村四七〇	尼崎市外小田村西長洲西五一	尼崎市宮町五二	尼崎市大物村三三六	尼崎市大物村三三二	尼崎市大物村天神道	尼崎市大物村西横堤二〇七ノ一	尼崎市外杭瀬

正賀

素晴しく内容の充實した

「京」

の新年號をぜひ見て
下さい、五十頁の大

冊で一部十銭

京都市富小路御池下ル

發行所 京都川柳社

電話本(2)一一二番
振替大阪四四四八番

謹賀新年

昭和五年一月一日

川柳雜誌社蟹ヶ池支部

井上 松露 莊六 半平 武郎 至光 大觀 明治 松汀 湖舟 紫海 紫の字 普門 一味 運坊 波紋 窓蜂

(イロハ順)

謹賀新年

川柳湯 別府刊月 誌吟市湯 社行「苔」 別社行發 府同町行 支人

市原豐泉 一丸摩子 岩尾翠子 濱崎葎村 二宮驛水 渡邊雨燈 神矢對馬 吉用媚柳 毛無僧改 吉田眺浦 坪井突如 司城流舟 長野季軒 小川三猿堂 古川夏宵 後藤仙柳 後藤假面 足立劍阿彌 齋藤詩津女 木村たかし 木村晃卓

謹賀新年

緣談先ノ調査
資産信用調査
家出人ノ所在探査
素行動靜秘密調査

大阪市東區北濱一丁目

赤埴探偵社

赤埴秀吉

電話本局二三七一番

(秘密嚴守) (調査迅速)

財産隱匿。特許侵害
等ノ探偵。地方出張
探査ノ依頼ニ應ズ
營業八年中無休

川柳たまむし吟社

大阪市東淀川區中津濱通二丁目

山本 雨迷

賀正

大阪市天王寺町上汐町二丁目

増位 汀柳

賀正 尖 銳 會

事務所 天王寺區大道三丁目
一一二 中野方

同人 女人、鬼堂、裸人、
斗人、豆秋

賀

大阪市西區北堀江御池通
一丁目四番地 早瀬塗料店內

荒井英賀夫

大阪市南區東賑町二十九番地

今川 波計

正

大阪市西成區粉濱本町三丁目
一五番地

中見 光路

賀

勇 宗 改

那須古燈

武田北人

大阪市東區道修町
田邊五兵衛支店

謹賀新年

川柳雜誌社 平塚支部
相州平塚町旭座前

支部同人

中原笑童

平塚町新宿四九五

小宮城月

平塚町新宿一五〇

下田美知坊

平塚町新宿一一五二

酒井駒人

平塚町旭座前

月刊「浮舟」見本進呈

賀正 浮舟吟社

吳市朝日町三十九加藤月天方

同人 一同

謹賀新年

昭和五年元旦

中野柳陽

滿洲開原大和街一〇

川柳雜誌社

賀正北濱支部

◇星馨叢書第一編出來◇

藤里好古著

粧妝

和紙和裝美本
實費送料共金五十錢

—延喜式以來の「粟起し」の發達史を、川柳狂歌等を引用して詳細を論ず。先人未着手の文献也。

—近刊—

川柳巫女歌、川柳水無月祓、

川柳玄猪牧、

大阪市北區南森町五四番地

藤里方

星馨文庫

清風院

賀正安藤花蝶

愛知縣東春日井郡中央線

鳥居松驛前四五七四ノ二

謹賀新年

昭和五年一月一日

川柳雜誌社守口支部

石川双葉子
大阪市外守口町寺内

朝田新水
大阪市外守口町車庫東裏

安西杏三
大阪市東成區北清水町八九一

奥居金太樓
堺市附洲町五

平井蒼太
大阪市外守口町車庫東裏

禁酒斷行

………
昨年から………

金澤市味噌藏裏町

安川久流美

1011

大阪醫科大學

賀正 長崎 柳秀

南海電車

賀正 池澤 樂居

大阪府下高師ノ濱

謹賀新年

阿部 閑生

賀正 中澤 濁水

高知市本與力町

賀正 大島 濤明

大連市西公園町一四五

(愛宕川神社)

賀正 富士野 鞍馬

東京王子堀ノ内一三四

謹賀新年

一月元旦

龜井花童子

川柳雜誌社函館支部

賀正 庄 萬よし

大阪市南區道頓堀
新戎橋 南詰

活きた寫眞を作る

謝諫遠

黒木寫眞館

阪神西宮東口下車半丁

賀正

丸山 卯生

神戸市熊野町四丁目四四

川柳雜誌社釜川支部

賀正

伊藤緑之助

島根縣釜川郡高松村

川柳雜誌社高岡支部幹事

賀正

越田 久水

高岡市坂下町

川柳雜誌社高岡支部

賀正

山本 秀翠

高岡市御於屋町(大木方)

賀正

安藤 空山

愛媛縣新居郡東平

賀正

吉川 啞人

山口縣久賀町日曜堂書店

賀正

辻 左馬

和歌山縣田邊町
中屋敷町幽霞松下

特別誌友募集一ヶ月二圓也
月刊柳誌あけぼの編輯員タルコト

賀正

久田 狂水

福島縣石城郡磐崎村

大阪朝日新聞「京滋柳壇」投句所

鐵傘堂

宮城 啞亭

京都府宮津町
電話九番

山口縣代表柳誌 佐加太利(一部十二錢)

賀正

小林 苦笑

山口縣防府町驛前
防府川柳會

賀正

橋本 言也

京城永樂町二ノ八四

賀正

澤井朱唇子

大阪市北區空町一丁目四二
電話北七二六一番

賀正

竹田 芦穂

大阪市港區八條通二丁目

賀正

森田 輝翠

大阪市天王寺區生玉前町八〇

賀正

關本 雅幽

大阪市港區鶴町三丁目一〇

賀正

西村 山月

大阪市港區鶴町三丁目一九八

賀正

福田 鶴峰

大阪市天王寺區北河堀町六二

<p>賀正 竹内多聞 南海電車</p>	<p>賀正 福田山雨樓 大阪市浪速區湊町保線事務所 戎一〇〇三</p>	<p>賀正 丸山公二 大阪市天王寺區國分町三</p>	<p>賀正 山本靜香 大阪市南區上本町二丁目一六</p>	<p>賀正 沖野英郎 大阪市西區靱北通二ノ二三 電話土佐堀三七二三番</p>	<p>賀正 魚住三子平 大阪市天王寺區東平野町 一丁目二番地</p>
<p>賀正 青果吹號 藤岡晴風 大阪市住吉區平野 梅ヶ枝町六丁目</p>	<p>賀正 大西八歩 大阪市東區北久寶寺町 四丁目(竹中方)</p>	<p>賀正 計理士 荻野四方路 事務所 大阪市北區神山町三〇 市電大輪寺瓦斯會社前 中村荻野會計事務所 電話北三三六九番 自宅 兵庫縣武庫郡大庄村四六番</p>	<p>賀正 川柳雜誌社堺支部 友淵貴山 堺市大町西三丁目一三</p>	<p>賀正 高橋かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一 電話南五九六番</p>	<p>賀正 松丘町二 大阪市東成區別所町五〇二</p>
<p>賀正 若井たけし 近江八幡町</p>	<p>賀正 松盛琴人 大阪市此花區上島福南三丁目六六</p>	<p>賀正 住田亂耽 兵庫縣武庫郡魚 崎町五九八二</p>	<p>賀正 安井ひろし 安井欣女 大阪市南區安堂寺橋西詰</p>	<p>賀正</p>	<p>賀正</p>

賀正 ふあうすこ川柳社
「ふあうすこ」菊判、月刊
神戸市花隈町楳元紋太方

賀正 佃嶺月
神戸市北長狹通
二丁目五四ノ六

鬼灯川柳社

賀正 岡田陽氣亭

大阪市東區箱屋町二ノ二六
電話東三二一二番

月刊「風見草」一ヶ月金拾錢

賀正 聖城川柳社

發行所 石川縣大聖町魚町十
四番地高田茶撫那方

賀正 川柳雜誌社京都支部
桑原京郎
京都市七條大宮東入

賀正 橋本牙羊
石川縣石川郡安原村
田華峰
石川縣金石町港町

賀正 出口雨町

大阪市外阪急沿線
小會根村

賀正 橋本二柳子

大阪市住吉區杭全町六〇三
電話天王寺一一六七番

謹賀新年

川柳雜誌社

糸屋町支部

大阪市東區糸屋町二丁目

賀正 麻生路郎
麻生葎乃

入院隨意

院長 醫學士

山縣正雄

本院

大阪北濱三丁目電停前
電話本局二〇八〇番

賀正
山縣眼科醫院

分院

西宮	神戸	大阪	梅田、天六、玉川町
寺前町、	穴門上、湊町一、小野柄一	汐見橋、東雲町	九條、松島、戎町二

古本屋時代

今のやうにあさから〜新刊が出るゝ新刊を一々讀破することは容易ではない。たゞへ新本を買つてもいよく讀むころになれば、もう古本で至極新しい本が出てゐる。こゝうなればわざ〜新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新しい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新しい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

(路郎生)

謹賀新年

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋

を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

謹賀新年

清酒

午後六時白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて来る



灘津攝

嘉納合名社會釀

弊社の工場

謹賀新年

設備

輪轉機外敷臺の印刷機械、活字鑄造場あり、就業人員七十餘名、活字豊富にしてルビ付活字最も多く新聞雜誌等の印刷は弊社の最も得意とするところなり。

營業種目

新聞雜誌印刷、圖書出版引受、紙型鉛版活字製造販賣各種製版印刷、其他附隨事業一切

藤本兄弟社印刷所

大阪市東區農人橋二丁目

電話東一七〇番七七〇番
振替大阪八二八四番

にきびとり

美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生薬

(一)ニキビ、吹出物 婦人は固より

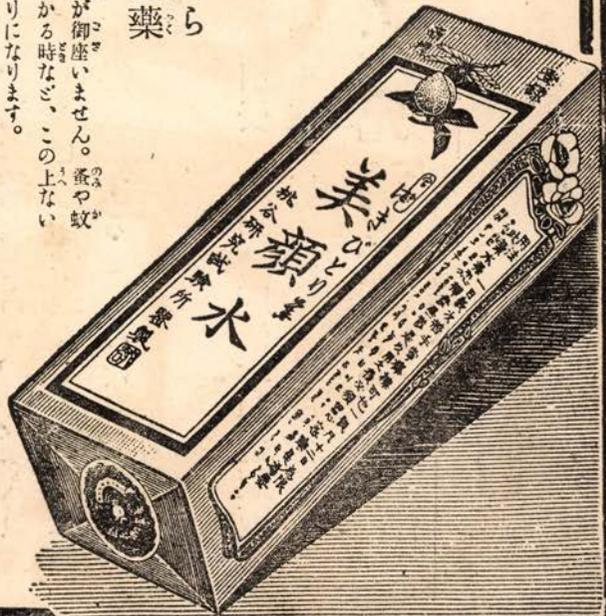
男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いませぬが、この薬は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二)蚤、蚊、南京虫 其の他毒のある

虫にさされた時、この薬を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さされた跡が

(三)皮膚を美しくす 斯ういふ薬です

から、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ様に綺麗になり、顔の美しさを増しますので、心ある御家庭に常備せられて居ります。



元賣發

販大・京東

館天順谷桃

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一圓一日發行)
昭和四年十二月廿五日印刷日本 昭和五年一月一日發行

川柳雜誌

(第七十二號)

本號に限り定價金五拾錢